女性

第貳百參拾九號

女鑑第貳百參拾九號

目録

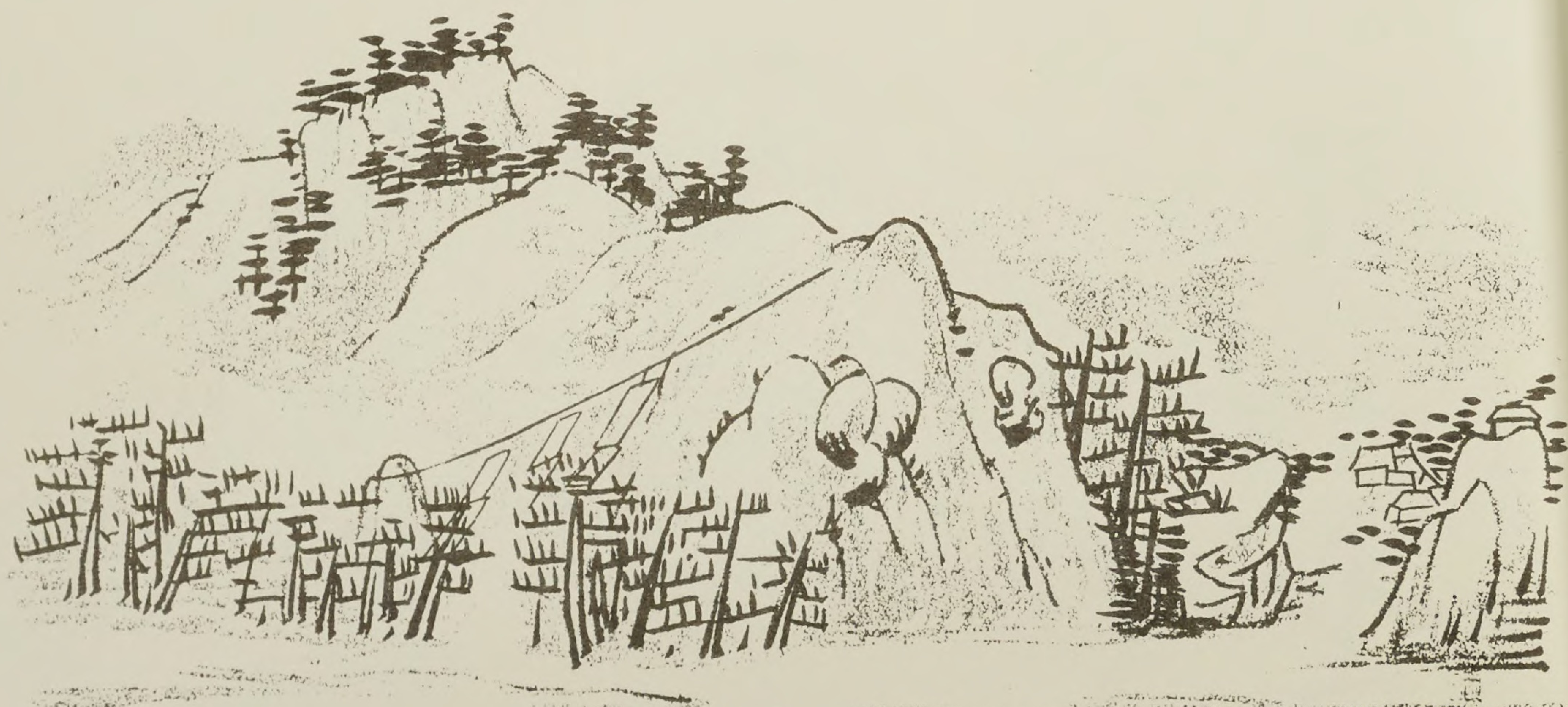
定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十月十九日印刷
明治三十四年十月二十日發行

東京市京橋區築地貳丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七番）

日本紀
神代上
伊弉冊尊
生火神時
被灼而神
退去矣故
葬於紀伊
國熊野之
有馬村焉
土俗祭此
神之魂者
花時亦以
花祭又用
鼓吹幡旗
歌舞而
祭矣

通禧寫



日本赤十字社
篤志看護婦人會
講師
正五位
勳三等
足立寛先生著作

幼時教育在家庭
孟母訓言千古馨
誰識斯篇關世道
須為户々座間銘
録旧製表代題字

久元

朋友の道

朋友相親しみ、其の美を濟ず要は、爲に謀ることにして、己の知れる所は、かくすことなく、善を責め、非を諫め、且つ、互に相依りて患難共に相救ふことを勉むるに在り。面從阿附は、朋友の道にあらず。たゞ、歡樂のみ與にするも、亦、朋友の道にあらざるなり。

歡樂を共にする朋友は、はなはだ多きも、痛苦を共にする朋友は、はなはだ少しこれ、利の爲に交る者は多けれど、義を以て交る者の、稀なるに依れり。朋友の道、豈に、此の如きものならんや。阿諛追從は、利慾の交なり。眞義至誠は、眞の交なり。互に、學事勉勵を勸誘し、忠信孝悌貞淑の道を勸め、懶惰不注意を戒め、其の心付く所は、忌憚なく、之を忠告し、且、窮厄痛苦あるを見は、赤心之を恤み、之を救ふこそ、眞に、賴むべき朋友なれ。

さて、善を責め非を諫むるは、素より、朋友の道にて、人々、これを務むべきことには相違なけれども、さりとて、多人數の前にて諫め、又は、不穩當なる言語、

なども用ゐて忠告する等は、却りて、不德なること故、これも、また、心得べきことなり。

萬葉にも、何せむに違ひは居らむ否も諾も友のなみ／＼吾もよりなむと詠まれたるは、即ち、朋友の間にて、事の善惡をさだめたることに、如何ぞ、われひとり、違ひ居らむ。事の諾非となく、朋友と共々に、我も、相賴りてなさむとの意なり。思ふべし。

相賴り、相親しむは、朋友の大義なり。事々に、自說を主張し、物々に、異論を挿み、頑然抗議して、いさゝか、推讓する處なく、己の主持する處を正論讜議と誤認し、以て、自、喜ぶが如きは、大に非なり。是、たま／＼、多年の交誼を破るに至らむのみ。然れども、これたゞ、推讓の美德たることを敎へ、妄に、其の意に違はずして、常に、相賴るべきことをいへる者にして、必、何事も、雷同阿附せよといへるにあらず。詞に拘泥して、此の意義を誤ることなかるべし。朋友多數の同志にて誘ふことにても、其の理に悖り、道に害あることたるを知らば、誠意をつくして之を諫め、共に、其の美を成すべきことを注意すべし。

徳操と學藝

丸橋金次郎

近世、女子教育の旺盛となるに從ひ、各府縣、殆ど女學校の設置せられざる所なく、その多きは二三に及ぶ。かくて、之より輩出せらるゝ幾多の女學生は、もとより、女子に必要なる教育を受け、識德藝能、皆完備して、他日社界に處して、賢母となり、良妻となるに、毫も差支あるべき理なく、世人も、之を是認して、その卒業證書を以て、婚嫁に尤も大切なる條件となすに至りぬ。然り、實に此の如くならざるべからずと雖も、われ〳〵は、之に對して、いさゝか疑を存すると共に、學校教育の價値の何れにあるかを疑ふなり。

凡そ、教育は、善化作用なり。被教育者を指導して、善に附かしむるにあり。されば、家庭教育を忽せにし、單に、學校教育にのみ托して、圓滿なる婦人たらしめむとするは、不可能の事に屬す。必ずや、兩者相俟つて、始めて、その効果を收むべきは勿論なれども、學校教育を受けしものは、たゞ家庭に成長發達せし者に比すれば、遙に完全なる婦人といはざる可からず。然れども、實際は、其の間に、黑白の徑庭を見出す能はざるのみならず、未だ、眞正に教育ある一家の主婦として見るべき者、少なきが如し。某女學校に於ては、卒業生の結婚せしものにして、三分の二は、離婚の不幸に遭遇せりとかや。此等は、多少事情あるべけれど、獨、家庭の罪に歸すべからず。大部分は、學校教育の方針

の誤れるに基せずむばあるべからざるなり。

昔、儒教主義を以て、女子を教育するに當り、心術を練り徳操を涵養するを專一とし、學藝の如きは、別に、眼中に置く遑なく、僅に、本人の實驗に放任したるが故に、文字こそ解せざれ、其の精神は、牢乎として社界萬般の事に當り、少しも障害なく、優に女子たるの天職を盡したりき。さるに、今日の女學校を見るに、全く反對せる傾きあり。教師は、一時義務として、受持學課を教授するに止まり、眞に、女子將來の大計を慮るなく、生徒は、試驗の爲めに勉學して、嫁ぎて後の學問なるを知らず、父兄は、一種の名譽心に驅られて、通學せしむるやの觀あり、言葉を換へていへば、其の教育は、形式的となり、全く、學藝に重きをおきて、女徳の修養におろそかなり。予輩は、悉皆とまではいはざるも、多くは、右の如き狀態に陷れるものゝ如し。實に、本末主從を轉倒するの甚だしきものにして、危險至極といはざるべけんや。

すべて、人の學問をなすは、我が精神を修養し、兼ねて、平常の實用に缺かざらしめむがためなり。即ち、一は精神的にして、他は實用的なり。前者は、道德の觀念美的思想を注入し、後者は、直接に、處世に必要なる藝術を教ふるなり。されば、二者、何れも肝要なるは更なれども、比較上、精神的學問の肝要なるに若かざるなり。而して、普通教育に於て、學問を授くる主なる目的は、精神的教育を施して、之を實踐躬行せしむるに在らざるべからず。されば、たとへ、家政の學、音學其の他の技藝に秀で、學問は、古今東西に通ずるとも、その行爲にして卑劣ならむには、單に、學校の階級を經たるのみにて、無教育にも耻づる所

あるべし。蓋し學藝は、文明婦人の一資格としては大切なれども、要は、德操修養に勉めざるべからず。德操はその根本にして、學藝は枝葉なればなり。而も、德操は、外部に表出して、擧動となり、初めて價値を判ずるものなれば、胸中いかに道德心ありと雖も、そを實現せざらむには、有とも無きが如し。

此の關係は、甚だ意義（人々の思想）と、文字との職分的關係に類す。文字は思想を發表する符號なれども、此の媒介によりて、思想を豐富ならしむべし。而して、なほ、思想を發表するには、言語身振り等ありて、文字は、或一部の具たるに過ぎず、されば、幾萬の文字を知りて、之を弄するとも、意義にして、淺薄又は了解せられざる時は、決して取るに足らず。此の如く、德操を修養する手段多けれども、學藝は、そが一部たるやを疑ひなし。されども、茲に注意すべきは、其の本體として尤も切要なるは、德操其の者にて、之を修養せんとする學術藝能にあらざる事なり。故に、女子の人物の高下を見るには、此の有無を以て、標準とせざるはなし。されば、これを我が身に體して、學術藝能を習得するに際しても、常に德操に近づき、能く實行せん事を理想となさざるべからず。貝原益軒翁曰く、『書をよみて、道に志なくば、文字を知れるのみにて、心において益なし。是無用の學なり。こゝを以て、學をするには、先づ志を本とすべし。』と、誠に然るべきなり。若夫れ婦人にして、さる心なく、猥にわが學藝を誇りて、輕擧妄動ありたらむには、小にしては、家庭の和合を亂し、大にしては、國運の消長に關す。宜しく、溫順靜淑等の諸德を具し、凡べて、不禮不作法の行爲あるべからず。即ち、內に在りて、

よく舅姑に仕へ、夫を助け、兒子を保育して、一家を整齊し、その任務を盡して、以て、國家の安寧福祉を維持すべき也。苟も、婦人は國家の花なるを自覺したらむには、徒に、學藝の如き末節に拘泥して、本分たる德操を忘るべからず。

女子と美術

（九月美術女學校始業式にての演說）

三輪田　眞佐子

本日は、本校の始業式でありますから、一言申しまして、生徒達を奬勵する助にいたしたく存じます。

此度、アメリカから横濱まで、モルモン宗といふ宗敎が、入り込んだ樣です。聞くところに由ると、モルモン宗は、種々な社會上の制度につきて、妙な考を有するとかですが、一般には、多妻宗として知られて居ます。けれど、それは、米國の如き新思想を有し、又一夫一婦の說が盛な國に多妻敎が生ずるとは頗る變であるが、蓋し、その目的は、子孫を多くするため、多妻を許すのであると申します。恰も、我が封建制度の餘波として、蓄妾、即ち、妾を養ふを許せしが如き者でありませう。

しかし、今日の如き開明の世に於ては、女子と雖も、或る目的と職分は男子と異るも、人格を重んずべき點は一樣であります。決して、女子を以て、單に子孫を作る器械の如く考へてはなりません。故に、一夫一婦を以て、人倫の大綱とせねばなりません。ですから、わが國の如き過去の制度に於て、既に妾等のありしは、其の時勢によりて、今更尤めざるも、今後、モルモン宗の如きものが來りて、多妻主義を唱へられては困ります。

必覺、モルモン宗にあれ、封建時代にあれ、多妻主義の實行せらるゝ女子を、物品視するは必要であります。而して、女子が、物品視せられて玩弄せらるゝは、女子の位置を高むるに足る實力、即ち、社會に貢献する能力がないからであります。決して人の惡るいのではない。此に就ても、本校の如き學校は、女子の位置を高むる上に、最も必要と存じます。但し、私は、女子が、實力即ち價値がなくして、同權説等を唱ふるは、間違ひと存じます。

過日も申上げた通り、權利は義務を行ふものにて、義務を行つて、始めて權利を受けられます。よりて、自ら實力なき女子にして、同權を言ふは、恰も、種を蒔かずして、收穫を貪るが如きものです。

次に、經濟上の點より本校の位置を考ふるに、私

は、女子が、心力と體力とを以て、出來る丈社會の事柄に從事せば、自然男子の方は 女子のなし能はざる方のみを致して、遂に、天下に、遊民がなくなります。今日迄の處では、日本に、四千萬人の人間があつて、その半分を女子と假定すると、この半分が無爲にして暮らすとせば、國家の活動する力は、半分となる道理であります。

故に、私は、將來、小學校敎員の如きは、悉く女子にて勤め、又その以上の學校も、女子の學力と相應したものは、女子の力にて成立する事を望みます。されば、美術の如きは、男子を撰ばず、共に研究し、女子の相應したる男子にして出來得ざる傑作を出して、以て、世の需用に當つる事を祈ります。

第三番目に申上げたいのは、私は、美術の専門家でないから、斷言は出來ませんけれど、美術は、

天然界の状態
人間界の事變
の二者あるべく、多く注意することが必要と存じます。然るに、惜、哉女子は、勢ひ見聞がせまいから、實物を見る事が少ないと存じます。故に、其の欠點を補ふため、萬事に注意することを望みます。

終りに、過日も申上げた通り、美術家は、裸體畫を書く必要もあり。愛の心を描す必要もある等、若年女子に、如何はしきことも考ふるは、免かれますまいが、皆様が、實踐すべき神聖なる品性と、又技術として、他の事變を寫すべきものとを、混用してはなりますまい。故に、私は、神聖なる手より、美妙なる作品の出るを望みます。



日本女訓（未定草）

川崎重陽

中編

廿二、婚姻は、人倫の始にして、最重んずべきことなり。されば、女子は、みづから、之を私せず、必、父母のはからひによるべきは、我が國太古よりのよき習はしなり。もし、婚姻の禮儀おろそかならば、夫婦の道正しく行はれず、恭敬の本立たずして、一家齊ひがたかるべし。

廿三、女子、他に嫁ぎては、よく、舅姑にかしづき、夫にしたがひ姒娣をはじめとして、夫の兄

弟を敬愛し、一家親族の親を厚くするは更なり。ことにその家に傳はれる家風を重んじ、己も、之に習ひ慣れて、益、その美を濟さむことを、旨とすべし。これ、主婦たるもの丶、最大切なる務なり。

廿四、舅姑に事へては、敬ひ愛みて、いさゝかも、我が心に隔をおかず、何事にも、心中をうち明けて、敎を受くべし。しかせば、したしみ、おのづからうみの父母と異なることなく、舅姑も、一家の行末をたのしみて、心を安んぜらるるなるべし。これ舅姑に事ふる孝行の道にして、また、うみの父母へも、この上なき孝行なり。

廿五、舅姑老年になられての後は、何事にも、ただ、その心身の安からんことをむねとし、舅姑の好まるゝ方にしたがひ、あけくれ、樂多くて、おのづから、老をも忘れられんことをつとめとすべし。たとひ、我が身、舅姑の心にかなはずとも、たゞ、一念に誠をつくして、かしづきまゐらせなば、などか、その心の和がざることあるべき。なほ、もしその心和がずば、これいまだ、己が誠の足らぬが故なりと思ひて、ます〳〵誠をつくすべし。ちりばかりも、逆らひ怨むなどのことあるべからず。

野中婉女の傳

指原乙子

婉女は、野中兼山先生の第三女なり。稚き時より、その性いとさかしく、書よみものかくことを好む。父兼山先生は、藩主山内侯の寵遇を被り、執政と爲り、治績大に顯れ、一藩、皆その德に服し、祿一萬石を賜ひて、威權比ぶかたなかりしが、

自ら、そを妬むもの丶出來て、さまぐ\僭をかまへしかば、終に、寛文三年七月、自ら仕を辭して引籠り、只風月を侶とせられしが、その年十二月、俄に歿かられしに、猶も妬しみの消せぬにや。その翌年三月に、家みな、幡多郡宿毛村に謫せらる。時に、婉女、年わづかに五才なりき。その後、こ丶にある事四十年、常に、學を勉めて怠らず。あるは、詩を賦し、歌を詠じ、又、隷書楷書を善くし、藩の名儒、谷重遠氏（谷中將の祖）を師として、四書五經に通ず、そのころは、書籍もいと乏しかりければ、四書は、自ら寫したりとぞ。元祿十六年赦に遇ひ、土佐郡朝倉村に遷る。時に年四十五。これより、醫師を業とせしが、その術いと精しかりければ、その名もいと高くなりけるにぞ、藩士の來りて、治を乞ふものあれば、相見ることを許さず、絲を病者の手くびに結び、障子を隔て、その端をとり、之を診し、症に應じて、藥を投ずるに、必ず効驗あらはる。故に、俚諺に、技の精妙に至れるものを稱して、婉女の絲脈といふに至る。か丶る事ども藩主に聞えければ、その昔を忍ばれて、さすがに、哀れとや思はれけむ、祿八人口を賜はらんとしけるを、婉女、辭して曰ふやう、「妾は、罪人の子なれば、生命を召さる丶も恨みなきに、かくながらふるは君の御恩なるに、そが上祿を賜はらば、天罰の程も空恐し。」とて、敢て受ざりしかど、野中氏の舊臣たりしものども、母の老たる故を以て、強て受けしめしといふ。

婉女は、かくさすらひて、貧しく暮しけれど、進退ふるまひとも、舊の格を忘れず、外出することもいと稀にて、たまぐ\出づる時は、必ず、一刀を佩び面を覆ひたりといふ。こは、刀を佩ぶる

は武士の女たるを示し、面を覆ふは罪餘の身を耻づるなり。君侯、嘗て、野中氏の舊臣某に嫁せしめんとす。婉女辭して云ふ「妾、零丁孤苦て依るべき所なし。されど、前執政の女なり。いかで、志を屈し、身を辱しめて、舊臣の妻となり、亡き父君を耻しめ侍らんや。」とて、遂に從はず。常に、眉を剃らず、歯を染めず、振袖を着して、終生處女の樣を變へざりき。又、深く、祖先の祭祀を重んじて、其の期日には、必ず、昔の禮を變へず、寶永五年、祖先の祠堂を香美郡野地村に建て、舊臣の其の家に功ある者、數人の靈を合せ祀り、自ら祭文を作りて、神に告げ、水田五反を寄附して、永世祭の料となし、又、石碑を潮江山の先塋に建つること、六つ七つにも及べり。皆、孤孫女婉建之と誌せり。享保十年十二月歿す。時に年六十六。

揮淚觀君筆　名卿種不空　詩源小町妙
經術大家風　如日鑽奩底　有天鐵圍中
務應存碩果　明月出塵蒙

と。こは、これ藩の碩儒、谷重遠氏の、婉女が著書に題せられしもの、惜哉、その書今に傳はらず。されど、そを、小野小町に比し、曹大家に準へられたるにても、その學才の程も想はるゝなり。婉女は、終生不婚に終りたれば、かの婦道第一の妻たり母たるの德に於ては、知るよしなけれど、その親族、某氏の女の嫁するに當り、書き送りたる朧夜の月てふ一篇を見ば、彼の一派の不婚論者と、雲泥の差あるを見るに難からず。即ち左に掲ぐ。

○朧夜の月

一世の中、いろ〳〵と移りゆくことを聞傳へ侍る。我つれ〳〵の折から、柴の庵の内にて、そこは

かとなくよしあしの物語を聞きて、理をつめ、工夫して見侍る。そのこのよき惡しき事、親子君臣の挨拶、夫婦兄弟朋友のまじはり、殘らず聖人の仰せ置かれし御言葉、又々、常々の御身持、時々のかはりゆくにつけ、委しく書物にあり。女子の教も、聖女賢女烈女、其の外、いろいろ愚の筆には盡し難き文どもあまたありと雖も、それを、我れ人心にかけ、道理を合點し、論をつめ、我身のしんから工夫せし人はなく、今時の風は、髪の結樣、びんのつけ樣、又は、衣類のもやう、是より外にはよき事はなしと思ひたごふは、あさましき哉。いたましき哉。其のいにしへ、もろこしの教委しといへども、是は、賢女風は、おそろしなどゝ嫌ふ人あるべし。和國のならはしいとやさしく、殊に、吉田兼好とやらんが徒然草、又は、紫式部が作りし源氏物語、是に雨夜の品定のうちにも、いとはぢかはしく、又はやさしく、女のつたなきを、よきをは上の品とほめてあり。然れども、今時は何とやらん。歌書を戀のなかだちと心得、もし見る人のあれば、風儀あしゝと思ふ。それは、用ひ樣のあしき故なり。人參ほど命つなぐ者はなけれども、用ふまじき折から、用ふればあしゝ、人參の咎にあらず、用ふる人にあり。よろづ世の中の事、よしあしともに傳へ聞ては、工夫すべし。天地の中、何か義理をまぬかるゝものあらんや。よく考へ工夫すれば、さすが天性備はりしゆゑ、誰にても、外より來る事にあらず。ある程中庸の理にあるべし。おろかの身ながら、露のゆかりゆゑ、人に笑はれたまはぬやうにと、あまりしたはしく思ひ書送りぬ。必ず人に見せたまふべからず。

一此度、何某とやらんの方へゆきたまふよし。成るはと慎しみたまふべし。我が身は、いとけなき頃よりさすらへの罪に沈みし身なれば、よろづの事いさ知らず、此の時分爰許へ來り、世間の話聞き侍るにも、取わけ、夫婦の挨拶につたなき事いと多く、わきて、聞きにくき事のみ侍る。それにつき、萬に一つも、もし、平生の身の持樣のたよりにやならんかと、書送り侍るぞかし。

一夫といふものは、義理に於て、侮りかろしむるものにあらず、天の如く也。かくあるゆゑ、隨分たふとみ、律義に陰日向なき樣に、有體に心を持つべし。我になさけ深き時は、機嫌よくうらゝかに仕へ、又、なさけ薄きと思ふと、皆、人々顔癖あしきよし傳へきゝぬ。それは、さもしき事ぞかし。こしもとや、遊女底の身持あらん。

侍の子たるものは、夫婦は、一體の身なれば夫の耻は妻の耻、妻の耻は夫の耻ぞかし。互ひに、悪しき事あらば、人や聞かんと、大切に思ふべきことなるに、夫の悪しき事をきゝたてんとするは悪心なり。女は、地にたとへしものなれば、天に從はぬ地はなし。その道理を考へ、夫、われに情なくわたり玉ふとも、又は、やさしくとも、義理をみだし玉ふべからず。その思愛のいと深く、色に染むべからず。ひたすら夫のためよきやうに、家の事をはからひ、下末のものまでも、やさしく當りたまふべし。それとも、表面輕薄にだまし給ふべからず。如何なるおろかの者も、人の上はよく知るものなり。下末は、拙く悪しきことをいひ、はかなき事のみ多し。ゆるしたまふべし。此の心得すれば、おのづから、家來も我も、心打解けて、悪しき

事はなし。

一第一、夫によからぬ事を言ひかけ、怨みたまふ可らず。親子さへ、不斷住むとも心に叶ふ事ばかりはなし。況んや他人の寄合なればなり。然れども、夫婦の挨拶は心安きよし、さわる故、いふまじき事をいひ、恨み出來るならん。さりながら、二葉の松の雲にそふまでと、思ふ挨拶も、堪忍せねばならぬものぞかし。人の家に行き、我が家となすことなれば、固より苦勞あるべし。かならず〳〵何所にありとて、わが思ふやうなる事ばかりはなし。何事につけても、父母親類中のおもはくあれば、爰を耻ぢて思ひたまふべし。父母は、過ぎにし身と思ふべからず。鬼神となりて、天津御空に、あきらかに御存知なり。子の善きは嬉しく思召し、悪しきはつらく、鬼神も安んじたまはず。こゝを合點あらば、いよ〳〵、よろづ心を無慾に持ち給ふべし。貪る心より悪しき事起るなり。取わけ慾の中にも、色慾淫慾ほど、身を亡ぼすものはなし。爰より嫉妬出來るなり。

一姑の挨拶、いろ〳〵世間に聞き悪き事多きぞかし。如何様に叱り玉ふとも、天より與へたまひし今の母なれば、とかう言はずに、あやまる風情してあるべし。さあれば言ひやむ事もあるべし。

一第一、むかうに子供あるよし。他人の子とて、幼なきはかわゆし。況んや、偕老と思ふ夫の子、誰にあるとても、皆いとをしき夫の子なれば、あだに悪むべき理なし。爰をよく〳〵分別して、心を附け、いとをしみたまふべし。うはむきの輕薄は、はけの見ゆるものぞかし。本をよく〳〵合點して、かはゆがりたまふべし。人々

我が腹に生れる子を取立てんと、爰に拙き心あり。前よりある子を大切にさへすれば、我が子は、天の守ありて、我が力つけずして、仕合せよし。けつく我が子をかわゆがり、まゝ子を悪み玉はゞ、天の責を受くべし。繼子を、本母の心になりて見る時は、さぞ〳〵、かわゆく思ひ玉ふらんと工夫すべし。

一家來のつかはれもの寄り合ひ、威勢話に、誰は、旦那樣の御氣に入る、彼は、奥樣よりは御寵愛深く、かやうに仰せられしなど〳〵、さて〳〵かたはらいたく聞惡し。たとへ、男子の事なれば、戯に如何樣の事をいふにもせよ、如何なるおろかの人ありとも、我が妻と卑しき使はれ者と、いづれかわゆきや、それを誠と思ふは、おろかの事ぞかし。清少納言、枕の草紙に書きしにも女の身にても、いと尋常なる其の人からの人、なじみ言ふは聞きよし。つたなき者の、色々なれなれしくいふは口をし。まして、男子衣紋引きつくろひ、けだかき人を、我が物がましくいふは、聞きにくしと、言はれしぞかし。其の主聞きたまはゞ、さぞいやと思ひ給はん。然れども、せんしやうはなしする側にて聞きては、いと口惜し。其の樣なる話いひかけば、ニコと笑ひ、必ず〳〵聞くべからず。それよりして、家を亂すなり。詩經にも、家の亂、外より亂るゝにあらず、女の舌より亂るゝとあり。愼みたまふべし。田夫までも存ぜし事ながら、少しにても行ひのたよりにやならんと、俗文に書きて贈るなり。若し、腹たちたまふ事あらば、この書を見たまふべし。必ず、人に見せたまふべからず。萬に心を配り、堪忍したまふべし。

一此度、行きたまふ所は、先妻ありし由。さらば、

前の內證の事、よしあし語るとも、とかう言ふべからず。侍は、かたみたがひ、必ず口開くべからず。今を毀らんとて、前を譽むるもあり。又、今を譽めんとて、前を毀り、いぢ腹くろく惡しく言ふもあり。此の二色過し事にあらず、よく〳〵分別して思ふべし。我が身を外のものになして、評判して見るべし。朝夕に、道理を考へたまふ時は、天神地神もあはれと思召し、守りたまふ故に、夫婦の挨拶、よく、比翼連理の思ひにて、子孫榮えたまふべし。獨り心のうちありとも耻ぢ思ふべし。油斷あるべからず。愼みたまへ愼みたまへ。

五月やみあやめも分かぬ道すちを
尋ねてあゆめおぼろ夜の月



家政

女禮

産所式（一）

有住常子

臣下にいふ喰初の式といふを、かしこき御あたりにも、行はせたまふとうけたまはる。いとたふとくおごそかに、其の故實を正さしめたまひて、とりおこなはせおはしますらん。其の大御式あるとつけては、産所の式といふをも、世の間におこな

ひて、其の故實をもあらたに取りいづべく思ひはべる。

さて、こゝに、產所式の一わたりをものしつ。こは、わがいへの、古き人のしるしおきたるものによりて、しるしいづるのみ。ふみのかきぶりは、おのれのてすさみあれば、とゝのはぬふしおほからんかし。

御着帶の式の故實をとゞめゆけど、かず〳〵見えわたれど、こゝには、其のひとつふたつをうつしいでん。

○平家物語治承二年の條、六月一日に、中宮御着帶有ける。仁和寺御室守覺法親王、御參內有て雀孔經の法を以て、御加持有り、天臺座主首快法親王、寺の長吏圓慶法親王も、同じくまゐらせ給いて、變生男子の法を修せられける。

○百練抄十五 寛永元年正月廿三日、庚子天晴、中宮御著帶、令ㇾ當ニ五ヶ月一給、關白被ㇾ進ニ御帶一、權大進俊兼相具之向常住院僧正坊被ㇾ加持一、其後著御、主上令ㇾ結ㇾ緣一給、權大夫實藤卿被ㇾ問ニ吉時一、陰陽博士在成朝臣參上、次有ニ大祓一、宮主卜部兼躬修ㇾ之、其後陰陽師又奉ニ仕御祓一、二月一日戊申春日祭、中宮依ニ御著帶一無ニ御奉幣一、被ㇾ行ニ御祓一、四月十五日辛酉賀茂祭也。近衞使左中將公藤朝臣勤ニ仕之一、中宮使御著帶已後也、仍不ㇾ被ㇾ立ㇾ之。

○貞丈雜記 祝儀の部 帶結樣故實

應永廿二年十月廿七日、薩戒記云、今日牟刻女房著帶、（日野兼勘解由小路三位在方卿勘文也）於ニ東面庇南間一有ニ此事一、（其方依勘文也）先女房南面著帶、予（中山定親）跪ニ其前一、右方（女房）取ニ生帶一（精好帖帶也、納筥先是以ニ大炊助重兼遣ニ加持所也）、自ニ端方一指ニ入女房左袖中一、女房取ㇾ之、自ニ小袖下一付ㇾ身引廻後、自ニ右袖一出ㇾ之、予取ㇾ之、如ㇾ元納ㇾ筥、次予又取ニ布

帶、如同宮一指ニ入女房左袖中一、女房取レ之帶也給、云々次予退次有ニ盃酌一、此事雖レ非ニ本儀一爲レ後注付云云。

按するに、始は、精好の帶を結び、後に、布帶をしむるなり。非本儀と云は、如此事ともを、日記に記すには、及ばずと云ふ意也。

この他、百練抄寶治元年の條、山槐記永萬二年の條、○東鑑治承の條下、○同建久三年の條下、○同天福二年の條下、○同延應元年、建長四年の條下等に見えたれど、こゝに記しはべらず。

つき〲其のさまをしるしはべらん。

耳の養生

ドクトル山上兼輔

記者、頃日、ドクトル山上兼輔氏を訪ひ、耳鼻咽喉に就ての、通俗的衛生談を聞かんことを請ひしに、氏は、先づ懇ろに、耳の養生に關する注意方を話されたり。讀者、よく之を讀み、之を守らば、益する所必らず多からむ。

耳はその部位に從ひ、外耳、中耳、内耳の三部に分かたれて、その外耳と云ふ所は、耳殼と聽管との二つより成り、また、中耳は、外は鼓膜と稱する薄膜にて、外耳と界ひされ、内は薄き膜にて内耳と通じ、また、内耳と云ふものは、骨中の一空洞であつて、緻密に造られ、之れは、即ち聽神經の分布して居る所である。

耳の部位は、大體右に述ぶる如くであつて、外耳は、直接に、他の障害を被むり易いものであるから、施いて、その障害を、中耳内耳にまで及ぼすこともしば〲ある。また、外耳には、何の障害もなくて、直ちに、中耳内耳に之を起すこともあるから、常によく注意せねばならぬ。そこで、耳に障害を來す多くの原因は、何であるかといふに、

それは、寒風冷水等の耳の中に侵入することである。今試みに、耳を病めるものに、その原因を問へば、多くは風邪に冒かされてから始まつたと答へるが、それは、いかにも其の通りであるから、風邪に罹かり易い人は、第一に之を避ける方法を考へねばならぬ。そこで、寒風劇しき時や、又は、賊風に逢ふた時には、綿を耳に挿むことが必要である。炎症に罹かり易い小兒などは、殊に、さう致さねばならぬ。また、慢性の炎症にて、皷膜に孔の明いた時なども、矢張り、綿を耳中に入れて塞ぐがよい。さうせぬと、寒風侵入のため、しばしば、中耳内耳に障害を起すものである。但し、綿を耳中に挿入するに就て、注意せねばならぬことは あまり、長く深く挿入し置くと、之がため皷膜を刺戟して、遂に、炎症を起すことがあるからだ。また寒中などは、遽にその綿を引き去るときは、耳中の寒温劇變のために、また害を生ずるものである。又、たとひ聽管内に綿を入れ、寒風を防いで居ても、鼻又は咽喉加答兒に罹つて居ると、その加答兒が、遂に中耳に及んで、種々の危害を生ずることもある。これ耳の養生中、第一に風邪を避けねばならぬ所以である。

水を泳ぐ時、湯に入る時、海水浴抔に入る時には、耳の健否に關せず、必ず綿を耳に挿まねばならぬ。若し少しでも、水の耳に入つたときには頭を其方に傾け、耳の外口を擴げて、水を出さねばならぬ故に、止むを得ざるときの外は、總べて、冷水を耳に入れぬがよい。若し必要ありて、耳中を洗ひ又は、水を注し込むときは、豫じめ其の水を温ためねばならぬ。

耳の中に生へる毛は、恰かも樹林の如きものであつて、寒風の入るとを防ぎ、幾分か耳中の温を

も保ち、又、砂石とか、小蟲とか、豆類抔云ふ異物の入るを防ぐものであるから、妄りに之を抜き取つたり、剃り去つたりしてはいかぬ。いよ〳〵長く延びて、不快に感ずるやうな時には、その端を鋏み去ればよいのである。理髪店にて、耳の毛を剃るとて、小さき傷を生じ、これより、恐るべき病を起すことが多いから、よく注意せねばならぬ。耳中に異物の入つたときに、世間にては、直ちに之を取り去らんとして、簪の耳搔を入れ、又は、藥液を注し込むことなどが、澤山あるさうだが、之が爲め、却つて異物を深く壓し、又は、藥液の爲め、健全なる聽管、及び、皷膜に炎症を起すことがあるから、素人は、漫りに手を下さずして、其の儘、醫師の治療を請ふ方がよい。又、俗間にて、齒の痛みを癒さんとて、藥液を耳に注し、齒痛が治せずして、却つて耳病を治ゆることがあるから、是れまた注意すべきことである。

耳垢は、聽管内より分泌せるものにして、ある說には、小蟲を殺す性があると云つて居る。この分泌物は、時日を經ると、外部乾燥して薄屑となり、自ら剝げ去るものであるから、さう數々掃除する要がない。若し、多く溜つた時には、大人あれば、耳匕で除くはよいが、あまり深く入れてはいかぬ。また、尖の鋭つたものも用ゐてはならぬ。小兒抔には、布片の端を撚り、外より見得る丈けを取り除き、決して、油類などを注し込むものでない。耳を傷ふのは、多くかういふ場合である。また、兒童は、戯れに、手掌にて耳殼を撲ち、爲めに、耳を傷ふことなどもある。世の父母たるものは、此等の事にも注意せねばならぬ。

一時に、又は引續いて、劇烈なる音響を聞いた爲め、皷膜に孔を生じ、或は、内耳に障害を起し、

一時若くは、永久の重聽症にかゝることがある。即ち砲兵とか、鍛冶職とか、水車業とか、汽車の機關士及び火夫等には、間々あることで、之は、耳に綿を密接するときは、幾分か劇響を避けることが出來るけれど、自分の職業の爲めに、かう云ふ病を起す人は、結局、その職業を他に轉ずるより外に仕方があるまい。

又、腺病の外、多く耳病を起すものは、猩紅熱、窒扶斯、實弗的里亞、痲疹、痘瘡、結核、梅毒、インフルエンツア等の傳染病であつて、殊に、インフルエンツアの如きは、急性の中耳膿炎より延いて、腦膿症となり、終に、空しく鬼籍に上ることも往々ある。是れまた、注意を怠たつてはならぬ。

我が國にて、耳病に就き、世人の注意を惹き起せしは、近年のことであつて、今を距ること十一年前、日本赤十字社病院に、耳科といふものを置きし頃より、段々進歩して來たのである。今試みに、諸大家の耳病の統計を擧ぐれば、左の如くである。

トロット氏の説によれば、二十歳乃至五十歳のものは、三人中一人は、多少聽覺を損する割合ありと。

ワイル氏の説によれば、五千九百〇五人の小兒を撿せしに、約三〇%は重聽症ありと。

ベツオルド氏の説によれば、千九百十八人の學童に就きて撿せしに、耳病にかゝるもの二〇、七五%ありと。

又、男女の比例は、ビユルクナル氏の統計によれば、男子は女子よりも、耳病にかゝるもの多くして、三と二の割合なりと云ふ。

以上諸氏の説によつて、耳病にかゝる者の多いこ

とは、讀者に解つたらうと思はれる。而して、耳病に罹かつた時の注意は、その急性なるものをして、漫性に陷らしめぬやうにするのが、一番肝要である。勿論耳病の中で、いかに手を盡すも、其の病勢を挫き難いものもないではないが、病の初めに、相當の治療を施すときは、大抵癒すことが出來るものである。之を換言すれば、耳は、聊かにても故障の生じた時には、素人療治を施さずして、速かに、醫師の治療を受くることが必要である。

禮節談片

石井泰次郎

小笠原流といふ流名のもとに、教授して居る女禮式ほど、無用な物は又と有るまいと思ふ。昔時のは、夫でも無用にはなされなかつた。其の世の中が、君と臣下との差別がたゝずに居つたから、間違ひだらけの秘傳だの、口訣だのといふ物が賞翫されて、正直な傳を主張して居た方は、却て、世間に用ゐられなかつたのです。其の中にも、一際、恐入た教授法を普演せられたのが、小笠原流の禮節で、即ち、諸禮と稱して居つた一學科である。此恐入た教授法が、現今に存在して二つに別れて居るのですが、其の一つは何々で、其一は何々であるといふ事は、よく解する方が無い樣である。

故に、其の小笠原流の禮法が、無用であるといふ者の、其の無用な禮法以外に、有用な禮法あるを知らず。又、其の小笠原流の禮法が、有用なりと信じないながらも、なは、學ばせると學ばせぬの境に迷つてる者が、現今の世の教育を以て、自

身の勤としておいでの方々に、多いやうである。」教育會とか、弘道會とか、矯風會とか、風俗改良會とか、華族學校とか、高等女學校とかいふ立派な教育場に立て、其の會員、其の生徒を預つておいでの方々に、願つておきたいのは此の事である。

實に小笠原流といふ流名の禮法は、無用なもので、無論修身科の中に加へて、教授すべき物でない事と、又其の小笠原流以外の禮節に、教育會や、弘道會や、矯風會や、風俗改良會や、女學校の學科に、適當の禮節の傳へが存してある事とを、知つて居てほしいのである。

既に、皆、それ〳〵立派に、教育に從事なすつておいでの方々には、此樣な迂遠なはなしは、申上るも耻かしい事だが、先づ、申上て置ねばならぬ順序であるから、仕方がない。

さて、二つに分れて居る其の一は何々で、其の一は何々であるといふ説明は、こゝにはいはずにおく事とする。あまり理屈談になり、又、いはれてこまるお人たち、いな、禮法の先生たちも、立派な所にお住居ですから、まづ、暫くはだまつて居りましよう。

今こゝでは、小笠原流男女の禮式は、無用なものである。昔時のは、其の時勢につれて、有用のやうであつた。現今のは、其の時勢につれずに、無用なものであるといふ事を、御承知くだされはよいのである。

又こゝに、小笠原流より、無用な禮法がある。それは、新撰といふ標題つきのもとに、人をあつめやうとして居るので、其の種をたづねると、やはり、小笠原流のやきなほしである。是は、廢棄物を利用ならよいが、利用されない廢棄物を無理に使用して、其の當座のまに合せて居るのであ

る。
是は、特に無用な禮法で、夫がために、大いなる惡風俗をつくりだして居る事がわかる。
わたくしは、禮法專門家で無いから、世間の諸禮の先生等に向つて、極めて、强力な突貫をほどこすまで攻撃をする心はない。しかし、其の傳の筋からいふと、世間の禮法の先生中では、まづ、古い所をうけて居るのです。
もしわたくしが、其の專門家であるならば、今までの內に、禮法が無用であるといふ局外者の言語や、小笠原流の用捨に迷つておいでの方々に對して、何とかいひわけをもし、說明をもして居いたのであつた。
まだそれのみでなく、無用な小笠原流を、無用であると、教育家の方々にきつぱりおことはりも申あげておいたのであつた。

これから、無用でない禮節について、すこし思ふ事をお談しいたさう。

だいどころ

鯖料理

新鮮なる青魚を能く洗ひ、鱗を去り、三枚におろし、レモンの液汁に、一時間程浸し置き、夫より食鹽胡椒をふり、とけたるバタをすりつけ、皮付の方を上にして、二十分間程、文火にて徐々と炙て、器に盛り、バタ、及、ヲランダ醬油をかけて、食すべし。

又

あたらしき青魚の脊をひらきて、腸を去り、頭と尾をきり、能く洗ひ、水氣をとり、こまかに刻みたる洋芹の若芽、胡椒、食鹽、能程に碎きたる脂肪を混和し、魚の腹につめこみ、二所程糸にて

しばり、鐵鋼にのせ、肉のこわれぬやう注意して、度々返して燒き、しばりたる糸のこげ落たる頃、牛酪と、柚子酢を、變る〳〵魚の脊より注ぎ、尚、四五分燒きて後、皿に盛り、牛酪を添へて、出すべし。

刀豆粕漬

刀豆をとり、暫く湯に浸し置き、少し鹽をふりて、十日程おして、水にて洗ひ、一日干して、粕に漬るなり。翌年になりて、食すべし。

醍醐漬

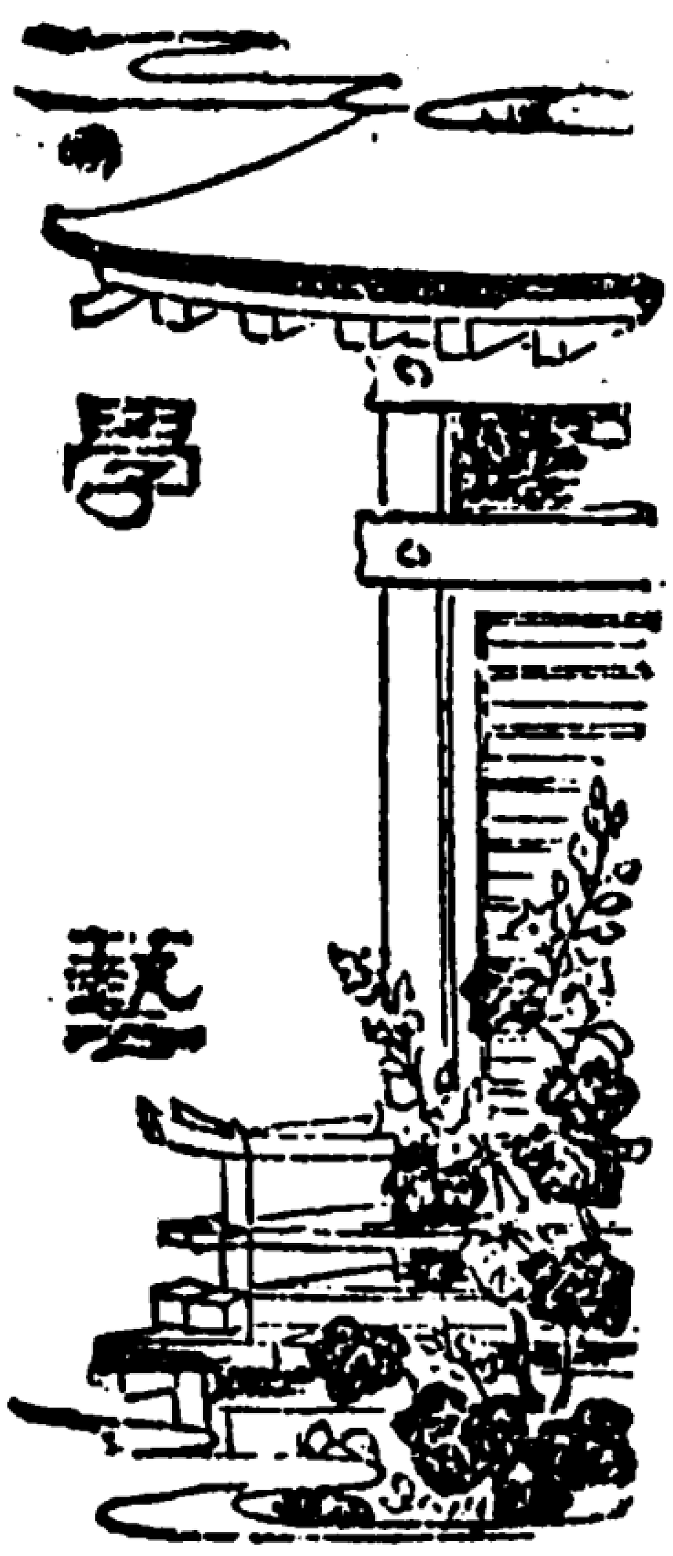
麹三枚に、味淋一升をかけてねかし置き、干瓜、干大根、鹽おし茄子、生姜、唐がらし等きざみこみ、しその實をも加へ、一二ヶ月經て、食すべし。

柿の粕漬

い、、はちやといへる柿の青きうちにとりて、粕に漬ける時は、自然と、澁ぬけて、甘からずして、能き風味あり。他の香の物と、付合せにして宜し。

山葵の粕漬

根を短冊にきり、鹽おしにして、翌日水をきり、壺に詰め、目貼をして貯ふべし。



國文學講義　井上頼文

紫式部日記講義（二十二）

ひんがしおもてある人々は、殿上人にまじりたるやうにて、こ中將の左頭中將に見あはせて、

あきれたりしさまを、後にぞ、人々いひいで、わらふ。

けさうなどのたゆみなく、なまめかしき人にて、あかつきに、かほつくりしたりけるを、なきはれ、涙にところ／＼ぬれそこなはれて、あさましう、その人となん見えざりし。

宰相の君の、かほがはりし給へるさまなどこそ、いとめづらかに侍りしか。まして、いかなりけん。されど、そのきはにみし人の、ありさまの、かたみに、おぼえざりしなん、かしこかりし。

釈義

○殿上人　紫宸殿、清涼殿等に昇ることをゆるされたる人。

○こ中將の君　女房のよび名

○左頭中將　藏人頭にて、左近衛中將を兼ねたる、正三位別當參議左兵衛督　源　頼定卿なり。頼定卿は、式部卿爲平親王の男にて、母は、前左大臣高明公の女。

○見あはせて　女房達は、思はずも、殿上人にたち交りて居たる故に、小中將が、フト、頼定卿と顔を見合せたるなり。

○あきれたりしさま　ビックリしたる樣子。

○後にぞ　御産の過ぎて後になり。

○いひいでて　先日の事をいひ出しての意。

○けさうなどの　けさうは、化粧にて、紅、白粉などを以て、顔面などを粧ふことなり。

○たゆみなく　怠ることなくの意。

○なまめかしき人　婀娜なる人にて、俗にシヤレモノといふに同じ。

○あかつきに　夜の明方に。

○かほつくり　顔に紅粉をつけて、化粧したる

なり。

○ぬれそこなはれて　流るゝ涕のために濡れて、處々、紅白粉などのとれて、ミツトモナクなりたるなり。

○その人となん見えざりし　フダン、よく化粧したる人なれば、今日は、別段に目立ちて、甚だ見苦しく、平常のうつくしき小中將とは、見えざりきとの意なり。

○宰相の君　女房のよび名なり。

○かほがはり　平常の化粧して、うつくしき顔とは、顔が別人の如く變りしなり。

○いとめづらかに　大層めづらしげになり。この宰相の君とよべる女房も、小中將と同じく、フダンは、よく化粧して居たる人なるに、今日白粉などはげて、顔がはりがしたるは、甚だめづらしとなり。

○侍りしか　しか、は清みて讀むべし。俗に、ヲアッタガマアの意なり。

○ましていかなりけん　小中將、宰相などいふ女房たちさへ、化粧がはげて見ぐるしかりしに、まして、自分の顔は、如何ありけん、定めて見ぐるしかりしならんとの意。

○そのきはに見し人の　其際、顔見合せたる人の。

○心ありさま　心と身姿となり。類本、一本等に心の字なきは脱ちたるならん。

○かたみに　互になり。

○おぼえざりしなん　誰の容貌は、見苦しなど、何れも氣をつけて居らるゝ場合にあらざりし故、知らずにヤッタノガの意。

○かしこかりし　ジヤウデキデアッタの意にて、エッケノサイワイなどいふに當る。

東面の間に居たる女房達は、いつか氣のつかぬうちに、殿上人にまじりたる樣になりて、小中將の君といふシャレモノ、女房が、フイト左頭中將（賴定）と、顔を見合せて、見ぐるしき顔色をかくさんすべのなければ、トハウにくれてビックリシタ樣子を、御簾が過ぎて後に、人々がいひ出して笑ふ。

この小中將の君といふ女房は、フダン紅白粉などつけて、化粧などすることに油斷なく、婀娜ナ姿ヲスツ、シャレモノにて、今日夜の明方に化粧したる顔なるに、まぶたは泣き腫れ、流るゝ涕のために、所々濡れて、顔の紅白粉など、まだらにハゲて、甚だ見ぐるしく、フダンにシャレモノのツッシイ小中將、その人ならんとは見えざりき。

また、小中將の君と同樣に、フダン化粧に怠りなき宰相の君といふ女房の、目を泣き腫らし、紅白粉もはげて顔變し給へる樣子などは、一段と、他の人よりめづらしく覺えた事でアッタッケ。フダン、オツクリをして、ウツクシイ、アノ小中將ヤ、宰相の君ですら、ミットモナカリシニ、まして、見ぐるしき、わが顔は、ドノウでアッタデアラウ、サゾ、ミットモナカッタ事デアラウ。しかしながら、その時には誰のやうすは如何に、誰の顔色は如何ありしなど、イチイチ氣をつけて居る場合あらねば、顔を見合せたる人の、心もちゐのさまや、容姿などのよしあしは、オタガイに、氣ガツカナカッタのが、まー上出來テアッタ。

漢文學講義

三石直方

山崎闇齋　原善

山崎嘉、字敬義、小字嘉右衛門、號ニ闇齋ト、又、號ニ

垂加一、平安人、闇齋父名某、小字清兵衛、臣二木下侯一、後致仕、業二醫于京師一、號二淨因一、母佐久間氏、有レ娠、祈二比叡山神一、一夜、夢拜レ神、時、老翁携二梅花一枝一、來納二左袖一、遂生レ男、即闇齋也、闇齋、幼桀驁不レ可レ制、父爲托二諸妙心寺一、剃レ髮、名二絶藏主一、乃一意修レ禪無二懈怠一、然性行猶不レ悛、嘗與二倫贊一論議、闇齋詞理蹇、即、其夜竊就二彼寢一、火二紙幛一、或讀二佛典一、深夜忽拍レ案、放レ聲大笑、衆起怪問、曰、笑二釋迦虚誕一、其豪邁不羈、皆此類也、衆議欲レ逐レ之、當二是時一、土佐公子某、居二妙心寺一、公子聰明有二藻鑑一、歎曰、此兒神姿非常、後當レ有レ爲、乃遣レ之、學二于土佐吸江寺一、時、土佐有二鴻儒小倉三省野中兼山一、共見二闇齋一、亦深器レ之、而惜三其陷二異端一、示二之四子及程朱書一、則大悅、遂蓄レ髮歸二於儒一、時年二十五、闇齋、嘗、問二群弟子一曰、方今彼邦、以二孔子一爲二大將一、孟子爲二副將一、率二騎數萬一、來攻二我邦一、則吾黨學二孔孟之道一者、爲レ之如何、弟子咸不レ能レ答、曰、小子不レ知レ所レ爲、願聞二其說一、曰、不幸若逢二此厄一、則吾黨身被レ堅手執レ鋭、與レ之一戰擒二孔孟一、以報二國恩一、此即孔孟之道也。

山崎嘉、字は敬義、小字は嘉右衛門といふ。闇齋と號し、又、垂加と號す。平安の人なり。闇齋の父、名は某、小字は清兵衛といひしが、木下侯に臣たりき。後、致仕して、京師にて醫を業とせり。淨因と號せり。母佐久間氏娠める時、比叡山の神に祈りぬ。ある夜、夢に神を拜せり。その時老翁梅花一枝を携へて來り、左の袖に納れき。遂に男を生めり。即ち、闇齋なり。闇齋、幼にして傑驁、制すべからず。父、爲に、諸を妙心寺に托す。髮を剃り名を絶藏主といふ。乃ち、一意禪を修めて懈怠なし。然れども、性行猶悛まらず。嘗て、倫贊と論議して、闇齋、詞

理塞がる。即ち、其の夜、彼の寢に就きて紙幃を火く。或ときには、佛典を讀み、深夜に、忽ち案を拍ち、聲を放ちて大笑す。衆起きて怪みて問へば、曰く、釋迦の虚誕を笑ふと。其の豪邁不羈なること、皆此の類なり。衆、議して之を逐はんと欲す。是の時に當り、土佐の公子某、妙心寺に居れり。公子は聰明にして藻鑑ありき。歎じて曰はく、此の兒、神姿非常なり。後、當に爲すところあるべしと。乃ち、之を土佐の吸江寺に遣りて學ばしむ。時に、土佐に鴻儒小倉三省野中兼山ありき。共に闇齋を見て、亦、深く之を器とし、而して、其の異端に陷らむとするを惜み、之に、四子及び程朱の書を示す。即ち、大に悦び、遂に、髮を蓄へて儒に歸す。時に年二十五ありき。闇齋、嘗つて、群弟子に問ひて曰はく、方今、彼の邦、孔子を以つて、大將とし、孟子を副將とし、騎數萬を率ゐて來りて我が邦を攻めしめば、則ち、吾黨、孔孟の道を學ぶもの、之を爲す如何と、弟子、咸、答ふる能はずして、小子爲す所を知らず。願はくは、其の説を聞かむと曰ふ。曰はく不幸にして、若此の厄に逢はゞ、則ち、吾黨は、身に堅を被り、手に鋭を執りて、之と一戰し孔孟を擒にし、以て、國恩に報ゆべし、此、即ち、孔孟の道ありと。

譯解

山崎嘉、字を敬義と申します。小字を嘉右衛門と申します。號を闇齋とも、また、垂加とも申します。京都の人で御座ります。闇齋の父名は何とやら申したが、その小字は清兵衛と申されて、木下侯に仕へて居られましたが、其の後、御暇を請うて、京都で、醫を業として居られ、號を淨因と申されました。母は佐久間氏と申されましたが、懷胎中比叡山の神に祈をいたされました時に、ある夜、夢の中に神樣を

拜し奉りました。其の神樣は、老りたる方で御座りまして、梅花一枝を携へてまゐられまして、其を左の袖に入れて下されました。ところが、祈つた通り、遂々、男の子を生みました。その男の子が、即ち闇齋で御座ります。

闇齋、幼少の時分に、はや、强情で、容易に敎へて行くことが出來ませぬ。そこで、父ある人は、その子の成長後のためをはかりて、之を妙心寺へ頼みてあづけました、ので、闇齋は、髮をそりて、絶藏主と申して居りました。そこで、專ら禪學を修習ひまして、少しも懈怠るといふことは御座いませぬ。けれども、强情で人々を困らせた行は、あひかはらずで悛りませぬ。同輩と議論いたしました時に、闇齋の理窟が立ちませぬで、負になつたことが御座りました。ところが、其の夜、直に、こつそりと對手の寢て、居りまするところにまゐりまして、吊つて居ります。紙帳を火いてしまひました。また、或時には、佛敎の書を讀んで居りまして、深夜にもかゝはらず、突然に、案を拍つて、大聲をあげて、から〳〵と笑ひましたから、其の寺に居りました人達は、吃驚して、何故、その樣な爲をするかと申したところが、イヤ、釋迦のうそはらの可笑しさの堪へられぬので、笑うたのだと申しました。其の心つよくすぐれて、小節に拘はらぬことは、何事につけても、皆、この樣な行爲でありました。

寺でも、もてあまして、皆で相談して、放逐しやう思うて居りました時に、丁度、土佐の殿樣の御子樣が何とやら申さるゝ方が、この妙心寺に居られましたがこの方は、利巧で、文學にも通じ、智識のある方で御座りました。その方が、

その事を聞いてこの兒即ち闇齋は、心といひ容子といひ凡庸のものでない、後に至りて、必ず事を爲すものであらうにと、氣の毒に思ひまして闇齋を土佐國の吸江寺といふへ遣りまして、そこで、勉強させました。その時分、土佐には、小倉三省、野中兼山と申しますえらい儒者が居りましたが、この二人の方が、闇齋を見まして二人とも、殿樣の御子樣と同じ樣に、器量のある人と思ひました。それにつけても、有爲のものを、あらぬよこしまの道に迷はせることを殘念がりまして、四書をはじめ、程子や朱子の書いた本を闇齋に見せてくれました、ので、闇齋は他に道あることを知つて、大に悦びまして、遂々、髮をのばしまして、儒の道につきました

その時二十五歳で御座りました。

ある時、闇齋、衆多の門人に對つて、今こゝで

支那の國が、孔子を大將とし孟子を副將として數萬騎の軍勢を率ゐさせて、我が國に攻めて參つたとした時に、われ〳〵孔孟の道を學んで居る者どもは、之に對する所置は如何したものであらうと、問ひたづねて試ました、孔孟の教に佞惑して居つた時代ですから、群弟子、誰も、答へることが出來ませぬ、拙者どもには如何所置して宜いか、とんと、わかりませぬ。どうか御考を伺ひたいものでと御座りますと申しました。そこで、闇齋の申しますには、不幸にして、若しも、斯樣な場合があつたとすれば、その時は、われ〳〵皆、身には堅固なる甲冑を被、手には、鋭利なる刀劍を執つて、孔孟軍と一戰し、敵の大將副將たる孔子孟子を擒にして、さうして、祖先以來國家より受けたる御恩に報いなければならぬ。さうするのが、即ち、これ、

われ〳〵が學んで居るところの孔孟の道である
のだと敎へました。

（未完）

和畫通信講義（第十八回）

山崎彩峨

墨にて畫くには、先づ、濃墨にて花粉を畫き、次に、花瓣を描く。花瓣は、白色のときは淡墨にて勾勒に畫き、紅色、紫色、及び、莖葉は、皆、淡墨に、濃墨を片端、又は、兩端に附し、狹墨となして畫き、乾きて後葉には、濃墨もて、葉脈を入るゝなり。

彩色のをりも、墨畫と同じく、初に、濃墨か、または、黃色にてときたる胡粉にて、花粉の點を畫き、次に、白色は、胡粉にて畫き、黃かち靑色の淡き隈を入れ、紅色は、胡粉を含めし筆先へ、臙脂を附して畫き、紫色は胡粉を含めし筆先へ、紫色を附して畫く。（紫色は、藍と胭脂とを混和して製する方よし。）最も、この草は、紅紫白色、三種の花にして、葉は、いづれも、鮮綠なれば、藍黃等分の靑色をよろしとすれども、莖幹は白色は眞靑にして、紅紫二色は、紫色なれば、黃かち靑色を含めし筆先へ、紫色を充分に着けたる狹墨にて、描くべし。かくて、描き終へたらは、藍か藍墨か濃墨かにて、葉脈を入るゝなり。


一
三
二
眼
四
八
六
九
七
十一
十六
十四
十九



文林

秋雨　東久世通禧

秋もはや夜ざむになりて板びさし
　そほふる雨のおとぞさびしき

萩ちらんとす　高崎正風

移ろはんいろみえ初つはぎがはな
　さかばといひし友もこぬまに

秋眺望　鍋島直大

谷みづのすめるがごとき青ぞらを
　なきゆく鴈のこゑのさやけさ

山路霧　津軽承昭

常にたつけむりの末もみえぬまで
　あさ霧ふかし阿蘇のやまみち

田上鴈　長谷信成

足びきのやまだの穂波いろづきて
　しぐるゝそらに鴈はきにけり

暁更月　宮池嚴夫

秋霧はやまのふもとにしづまりて
　あかつきさむき月のかげかな

一行斜雁　岡部譲

帯になれたすきになれとうなゐ等が
　よべばかなびく雁の一つら

暁秋風　北郷久政

ばせを葉をふく秋風にあかつきの
　夢をさへこそやぶられにけり

渡鴈　坂正臣

をぶねよぶ大川みづにかげみえて
　我よりさきにわたるかりがね

百舌鳥　千葉胤明

霧たちて朝しづかなるわがにはに
あわだゝしくももずぞ鳴なり
遠山英一

薄暮雁

わたの原雁のゆくへをまもるまに
磯やまかげはくれはてにけり
蜂須賀随子

海上雁

ひと行の雁のゆくへにかぎりなき
空とうみとのはてをしるかな
鍋島榮子

秋晴

こもりてはをられざりけり秋山に
行ひとをはきけふの日よりは
前田朗子

晩月

たちおほふ夜霧はれゆく大ぞらに
影しらむなりわりわけのつき
西四辻茂子

晩露

あき風に尾花たかゝやうちなびき
露のたまちるあかつきのそら
柳原愛子

茸狩

山かげはいとゞ日影のみじかくて
おもひのたけもかられざりけり
小池道子

朝秋風

朝霧はいまかはるらんやまゝつの
かげみえそめて秋かぜぞふく
北島以登子

暮秋月

なく虫のこゑもよわりてかれ渡る
尾花がもとをてらすつきかげ
松平多鶴子

かれゆく虫の音をきゝて

草の葉におきそふ露ををもげにも
こゑかれ〴〵て虫のなくなり
服部磯子

樵路月

山陰にきこゆるうたはしばひとの

つきにうかれて今かへるらん

古渡夕　宮地　小東洋子

舟よばふ聲もあわれにきこえけり
よどのわたりの秋のゆふくれ

心の花

井上頼文選

晴夜月　須田　源

天の原さはるものなき月の夜は
神代ながらのこゝちこそすれ

鈴木孝義

月冴えて光りかゝやく今霄こそ
曇る心も晴れわたりけれ

高根信麿

吹風に夕霧はれて山の端に
光りさやけくいつる月かな

谷紅葉　朝日忠彦

白糸の瀧津瀬さへも色かへて
見るめまばゆき谷の紅葉

高根信麿

紅葉の色つきしより谷かけの
道もさびしく覺えさり鳬

首藤月峰

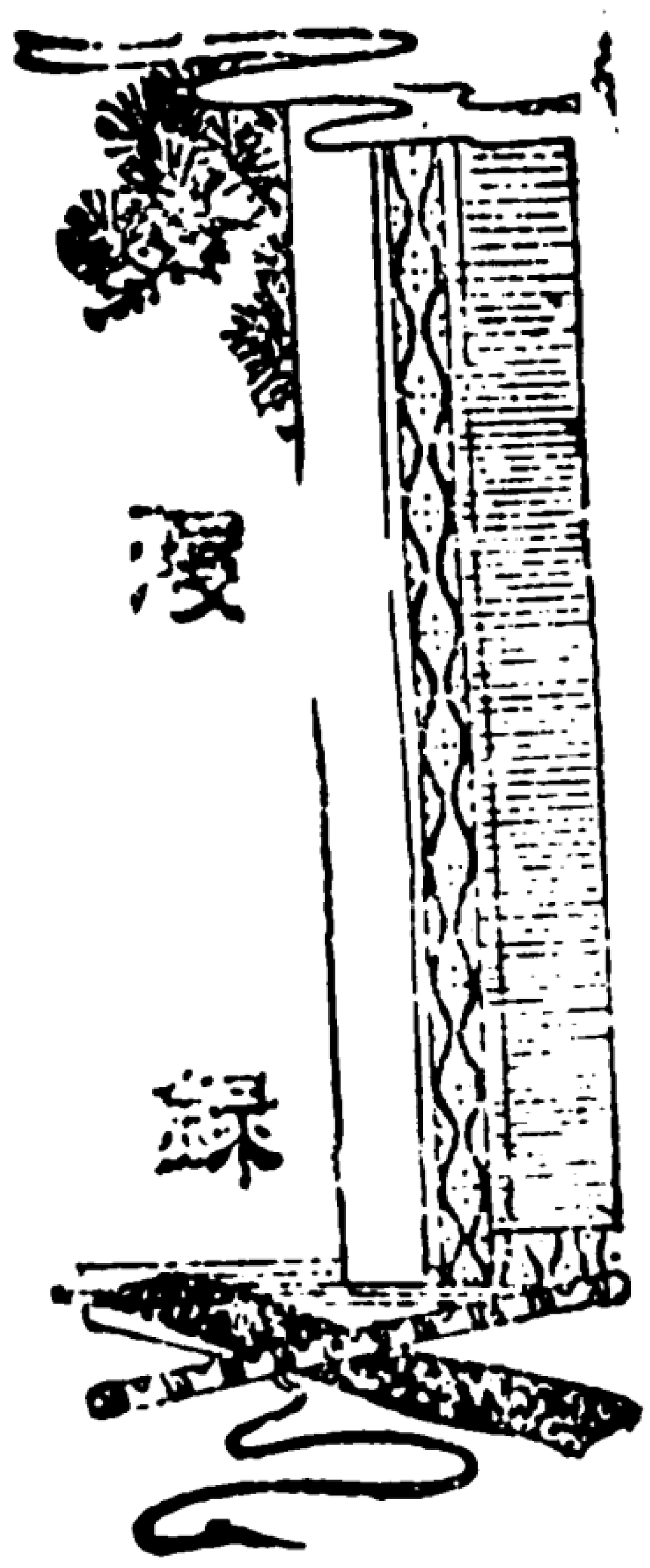
谷合の木々も秋をや知りぬらん
時も後れす紅葉してけり

里擣衣　松永松琴

小夜更けて打つ手たゆむか里人の
砧の音も遠さかりゆく

武本麗翠

山松の嵐の末に聞ゆなり
里も夜寒の砧打つこゑ



英佛獨小學比較談

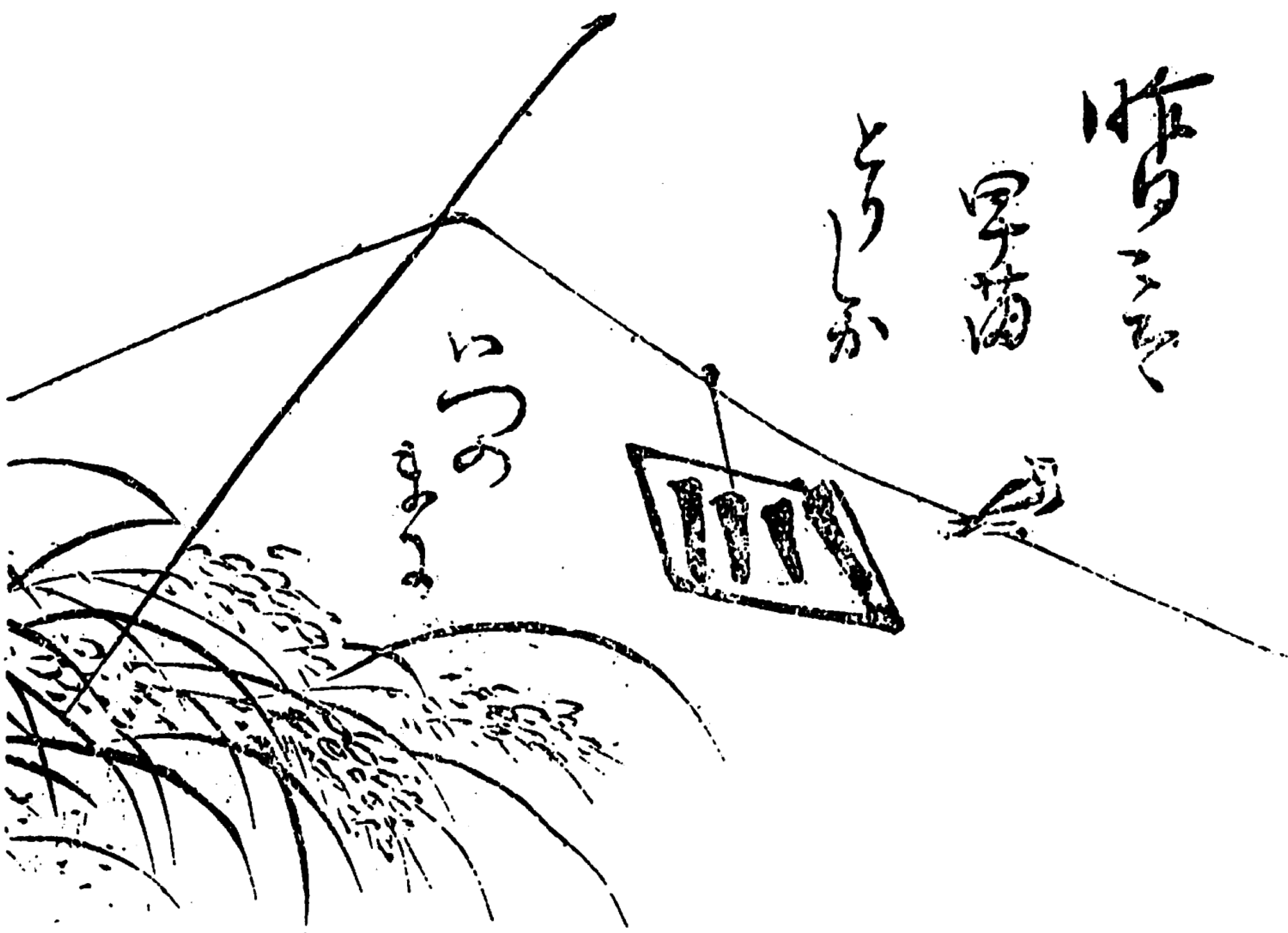
英國ハイルトン、デール女史述
日本宮館さだ子譯

左の一篇は、有名ある英國の女子教育家、ハイルトン、デール女史が、今夏、佛獨二國に遊び、親しく兩國の小學校を視察し、その學制を以て、自國の學制と比較し、得失を論じたるものにして、容易に得べからざる有益の文字とす。因つて、此にその要旨を掲げ、以て、教育に從事せらるゝ讀者諸孃の、參照に供することゝなしぬ。他山の石、以て玉を攻くべしとせば、歐米に於ける教育界の問題、亦た採りて我が教育家の研究に資するものなしといふべからず。諸子、幸に、輕々看過することなかれ。

倫敦に於ける二學校の主管者たる資格を以て、豫て、大陸の學制を視察せんことを企て、今夏、閑を得て、巴里及コーロンに遊び、先づ、獨佛二國の小學制度を視察することゝはなりぬ。

從來、佛國の學校當局者は、其が學生に對して、外來の感化を被らしめざるの方針を執り、就中、宗教家等に對しては、堅く其の門戸を閉鎖して、學校の觀覽を容さず、概して、外來の學校觀覽者を歡迎せざるの國風なれば、巴里駐剳英國公使の紹介狀を得て、漸く、此障礙を排除し、リユー、アムリンの小學男生部、及び、リユー、ジユヴニーの女學校を一覽せり。

獨逸に於ては英國領事より獨國學校當局者に宛てたる依賴狀を得、ライン河畔の羅馬と稱せらるゝ、コーロンの二學校を觀覽せり。借て、此の視察の結果に因り、我が英國の小學敎育制度を以て、之を佛國、及び、獨逸の小學敎育に比較するときは、何れが優に何れが劣れりや、是れ此に一言せんと欲する所のものあり。」概して之を言へば、昨年の婦人大會に於て、我が敎育界の泰斗たる「カノン、リツテルトン」夫人の斷言せ



しが如くに、「我が英國は、國民敎育の上に於て、獨逸、及び、亞米利加合衆國に遲るゝこと、殆んど一百年なり」と、是れ、敢て誇張の言に非ずぞかし。左りながら、我が英國の貧民にして、若し其の子弟に、小學敎育を與ふるの希望さへあらば、容易に、適當の敎育を施すことを得べく、此の點に於ては、甚しき缺點なきも、唯中學敎育の上に於いて、彼我著るしき徑庭あるを免れず。

不幸にして、我が英國人の子弟敎育に對する觀念たる、甚だ冷淡無頓着なるには、洵に、痛嘆の外なし。從來我が英國に於ては、獨逸に於けるが如くに、極めて廉價なる費用を以て、其の子弟を敎育し得べき制度なきより、貧民子弟の敎育費用は、擧げて、中等以上の負擔に屬し、從つて、中等社會の人々は、貧民子弟の敎育に對して、極めて快からざるものあり。此の點に關しては、早晩、一改革を加へざるべからずと思惟す。

コーロンは、中等民族の多數を占むる都市なれども、我國に於けるが如く、絕えて、貧民子弟の敎育を悅ばざるの痕跡なし。必竟するに、同國に於ては、敎育に要する費用、極めて廉にして、中等社會の人々が、小學敎育を與ふると同じく、其の子弟に對して、廉價に、且つ完全に、中等以上の敎育を施すことを得べければなり。然るに、翻へつて、我國の現狀を一觀するに、貧民は、皆、其の子弟の法定年限に達するや否や、直ちに學校を退かしめ、各々、一定の業務に就かしむるを常とせり。此くして、就業時間を半減して、就學に供する時間を與ふるの制度ありとは云へ、是れ、僅々貧民子弟をして、不完全なる敎育を受けしむるの媒助を作すものにして、良好の制度ありとは言ふべからず。特に、工業地方に於ては、其の最も然るを見るなり。

獨逸に於ては、身分の高下を論せず。年齡十四歲に達するまで、必ず、在學するの義務を負はしめ、羸弱學事に堪へざるもの丶外、何等の故障ありとも、一切退學を許さず。而して、健康の爲め、退學するものと雖も、嚴密なる審査を加へたる後に非ざれば、其の退學を認許せざることゝせり。且又、獨逸國民は、總じて、精神的の開發を貴重す

ること、遠く我が英國人に超へ、徒に家内に在りて、子守を爲すとか、又は洗濯の手助を爲し、然らざれば、外使を爲すが如きは、殆んど、獨逸に於て見ることを得ず。總ての兒童は、午前と午後には、必ず學校に出席せざるべからず。若し其の子弟を學校に送らざる父兄に對しては、罰金を科し、而して、罰金の刑再度に及びたるときは、入獄を命ぜらる。

獨逸に於ては、此の如く、嚴重なる强制的制度を具へて、其の子弟を敎育するが故に、從つて、學問の極めて貴重なる所以を覺り、且つ又、學問の實効をば收むるものにして、我が英國人の、敎育に無頓着にして、學問の實効を收むること、甚だ遲鈍なるに比すれば、蓋し同日の論にあらず。我國の敎育制度の强制的なるは、唯名義上のみにして、其の實は、放漫乖離毫も緊束する所なし。而して、一方には、半業半學の制度ありて、學問業務共に上達の見込なく、徒らに、不具者を養成するに過ぎざるは、洵に歎はしきの至りなり。

我が英國の敎育制度は、名義上に於ては、立派なる强制的制度なり。然るに何事ぞ、倫敦の學校局は、賞品又は、賞牌を授與して、兒童の出校を奬勵するの外、他に施すべきの途を知らず。而して、其の結果の如何なるやを問ふに、昨年中、(明治三十三年)倫敦の就學兒童にして、入學せざるもの、又は法定在學中のものにして、半途退學したるもの、殆んど十萬人の多きに及びたり。情なき次第にあらずや。

獨逸の敎育制度は、確定不動、常に一定の企畫に向て前進し、絶て浮動放慢の痕跡なし。之れに反して、我が倫敦學校局の方針定まらずして、學制の鞏固ならざるは、我が敎育制度の一大缺點な

り。

往年、倫敦の學校局は、小學科目の中に「裁紙」の一科を加へたるに、敎師の多くは、之に對する修養なく、俄に之を練習するの困難と、費用との點よりして、同科目の不用なるを決議し、遂に廢止することゝはなりぬ。亦た、同局議員は、上達したる學生を、或學校より他の學校に移すの議を立てたるものありしも、此の如きは、團體的精神を打破するものにして、獨逸に於ては、斷じて行はざるものなり。若し、上達したる學生を敎養する資格なしとせば、同敎師は、速かに、其の職を去るべきは當然なるに拘はらず、却て、其の學生を他校に移すは、事理轉倒の太甚しきものに非ずや。亦た、某議員は、各小學科程中に、必ず歷史科を置くべきを唱道せり。是れ、もとより當然の事にして、毫も怪むべきにあらずと雖も、我が英國の小學科程中には、此の頃迄、歷史を必要科目の一に加へざりしことを表白するものにして、如何にも、敎育の進步、極めて遲々たるを想像するに餘りあり。右は、我が敎育制度の不完全なる一二例を擧げたるに過ぎずして、若し、仔細に之を觀察するときは、此に之を枚擧するに暇あらざるべし。

佛國の小學校にては、主要の學科として、文法及び歷史を敎へ、歷史は、主として內國歷史を敎ゆ。りユー、アムリンの小學校參觀中、偶々文法の敎授を傍聽せしに、其の敎授法は、極めて興味あるものにして、兒童は、皆悅んで之を聽き、乾燥無味ある文法の敎授とは思はれざる程なりき。亦た、他の敎場にては、敎師は、「マクマホン」元帥時代より今日に至る、佛國の主要なる出來事を講授し居りしが、是又た、兒童の興感を惹起すること

淺からざる様見受けたり。次に、上級生徒の數學教習を參觀せしが、其の教授法の完良にして、生徒の數學思想に富みたるには、讃嘆の外なりき。從來、佛國人の何れも、能辯にして、修辭に巧なるは、諸外國人の遠く及ばざる所なるが、其の基く所のものは、小學時代に於て、文法的に言說するの素養あるに歸せざるを得ず。且又た、佛國及び英國の國情より、其の祖先の功勳偉業にして、全世界に影響せし事蹟の歷史を教習すること、最も必要なり。

佛國の小學校に於ては、宗教を一大禁物として、決して校內に入るを許さず。從つて、宗教家の感化を恐るゝこと最も甚し。是、佛國が、他諸國の如く、宗教國たるに拘はらず、過去に於て、極めて、怖るべき宗教上の慘害を蒙りたればなり。倫理は、必要科程の一として、熱心に之を教授せり。教室の壁上には、飲酒の害、及び其の他の弊風に對する戒飾の言を列記しあり。

コーロンの小學校には、各教室毎に、獨逸皇帝、及び、皇后の眞影を揭げあり。同地の女學校にては、參觀中祈禱の際にて、其の狀況は、我が英國の學校と異なる所なかりき。

リチャード、ワグネル街なるコーロン小學校（男女兩生徒在學しあり。）は、最近の建築に係りたるものにして、獨逸國中、最良のものなり。其の搆造は、宏壯にして、各教室の配置搆成、毫も間然する所なし。女子教室內にて、數多の植物を配置し、常に心目を樂ましむるに足る。遊戯場は、其の最も意を用ゐたる所にして、之を我が英國の遊戯場に比するときは、霄壤啻ならざるを覺ゆ。佛國小學校の躰操場は、甚だ廣大ならずと雖も、四時の草木を植へて、之を粧飾せり。亦た、貧民の

學制に對しては、地方自治体の費用を以て、學校に於て食物を給與し、遠隔の地より通學するものにして、行厨を携ふるものには、厨房に在りて、煮焼する等の便宜を與へ居れり。

同校に於て、學生の「ゲーテー」の詩を誦するを聴きしが、音調聲抑、共に我國の學生に異なる所なく、亦た、女生徒の刺繍編物等を一見するに、英國の女生徒と、甚しき徑庭あるを見ず。

之を要するに、我國教育制度の缺點は、

第一、科目の變動して一定せざる事。

第二、兒童は、年齡十四才に達するまで、必ず在學すべき强制的制度なき事。

第三、學生の教程に、一定の秩序なく、短日月中に、過度の科目を教習せしめんとする事。

第四、現に、小學科程中に在るものにして、却つて、中學科程中に置くべきもの數多ある事。亦た、中學教育の基礎を固定し、且、小學教育との限界を明晝にする事。

美術、工業、又は、商業等に關する補習科に於ても、我國は、遙かに佛國の下位に在り。同國に於ては、十四才以下に於て、之に關する大体の修養を與へ、十四才以上に達したるとき、之を專修せしむることゝせり。

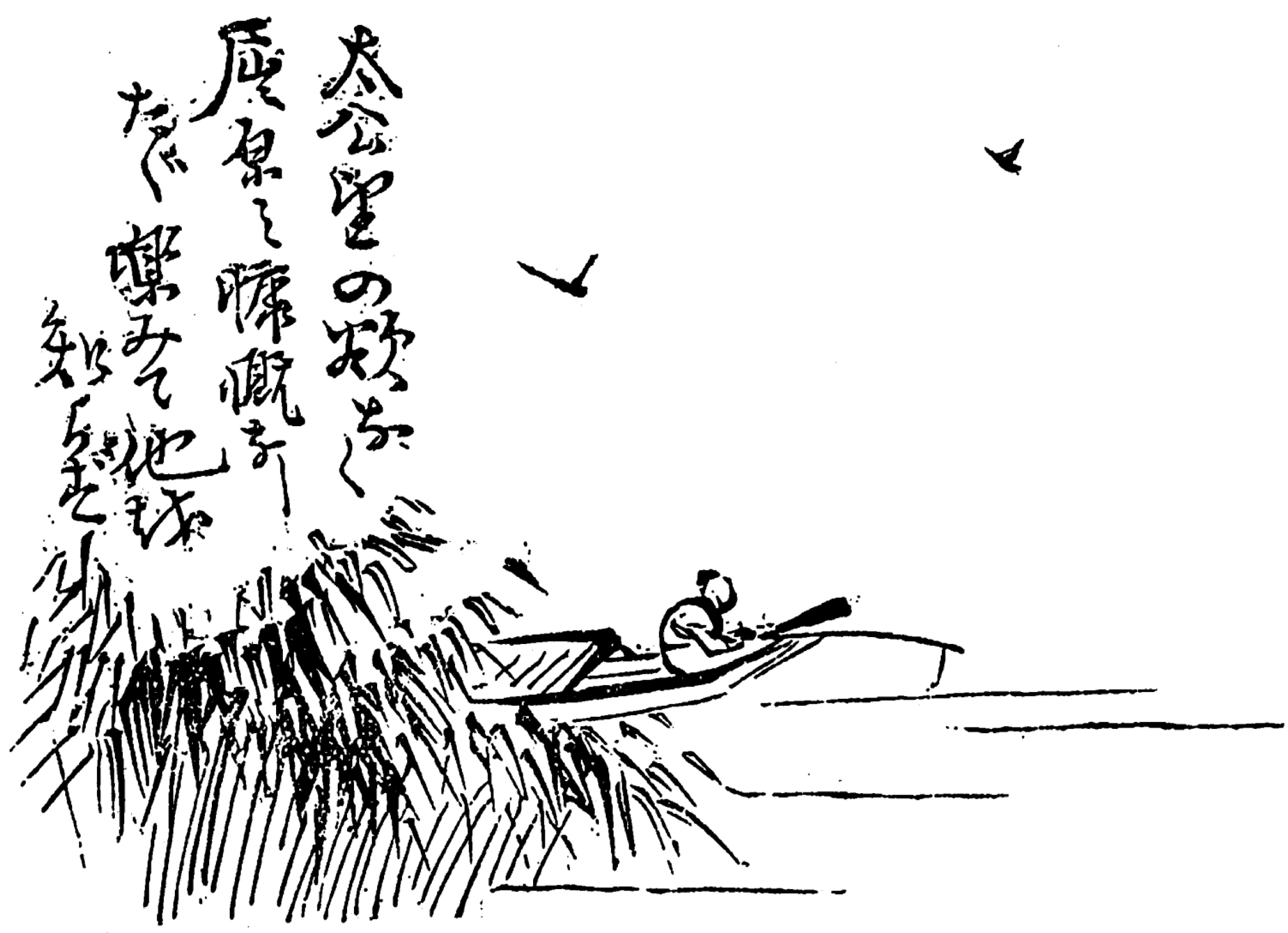
女子要書解題（ふの部）

三浦千畝

婦人養草　五巻十冊

梅塢散人の著なり。散人は、加賀金澤の人。蓋しその傳は、未だ詳かならず。貞享三年の著にして、元祿二年の刊行なり。（佐村氏の圖書解題

に、梅塢散人、荻野八百吉の著と記したれど、そは、同號異人なるを誤れるなり。荻野八百吉は、天保十四年、年六十餘にて、死せし人にして、佛學者なり。此の書の貞享三年の著作なるに、時代頗る懸隔せり。〕序に、『此書は、女子のおひさきこもれる、窓の内にかしづかれて、初もとゆひの折しも、人のむすばむわか草のもみ出る比より、中ほどにいたりて、ついのよる瀬をもとめ、家をた



もち、夫に仕へ、子をもうけてはては、夫におくれて、後、むなしき閨の中にて、獨り、枕の塵をはらひ、ひとつの燈をかゝげて守り、老てのち、子に從ふ比、いつしか花やかなりしかざしも、もとゆひの霜をいたゞき、百年の姥となれる終りまでのをしへ、婦人のもてる調度、朝夕の言語の事に至るまで、一として漏すことなく、よろづ、婦人の事に預る趣、唐の大倭の、貞女義婦の昔

をたづねて、善を勸め、惡を懲しめて、段々に書つらね、婦人養草と號く云々。』と見ゆ。

これによりて、此書の大要を知るべし。

婦人壽草（繪入） 六卷

著者は、貞庵香月啓益とて、筑前の醫師なり。卷首に付したる例言に、『此編は、豐前國中津川の旅舍にて、或人のもとめに應して、集録する所なり。』とあり。元祿五年の著にして享保十一年京都にて刊行す。

此の書の大要は例言に、『此の書は、婦人嗣をもとむるの所より、妊娠十月の間の保養、産後百日までの攝養の事共を、唐土の文に出たるをば、我邦の文字にやはらげ、また、我國の、つねに、みもし聞ける事をまじへて、書つゞり侍りぬ。世の夫妻、共に此の書をよみて、此心をさとしなば、子なきは、子を設け、子あるは、妊娠の胎教、産後の攝養道にかなひて、萬の病なく、やすやすと身をたもち、後裔を繁榮ならしめんこと、是ことぶき草の根ざしなるのみ。』とあるを見て知るべし。さて目録の大體は、

卷一 求嗣の說以下四條
卷二 子を求るの術以下五條
卷三 胎教の說以下十條
卷四 妊婦胎を下し幷產を斷の說以下八條
卷五 妊婦臨月攝養の說以下四條
卷六 產後調護の說以下五條

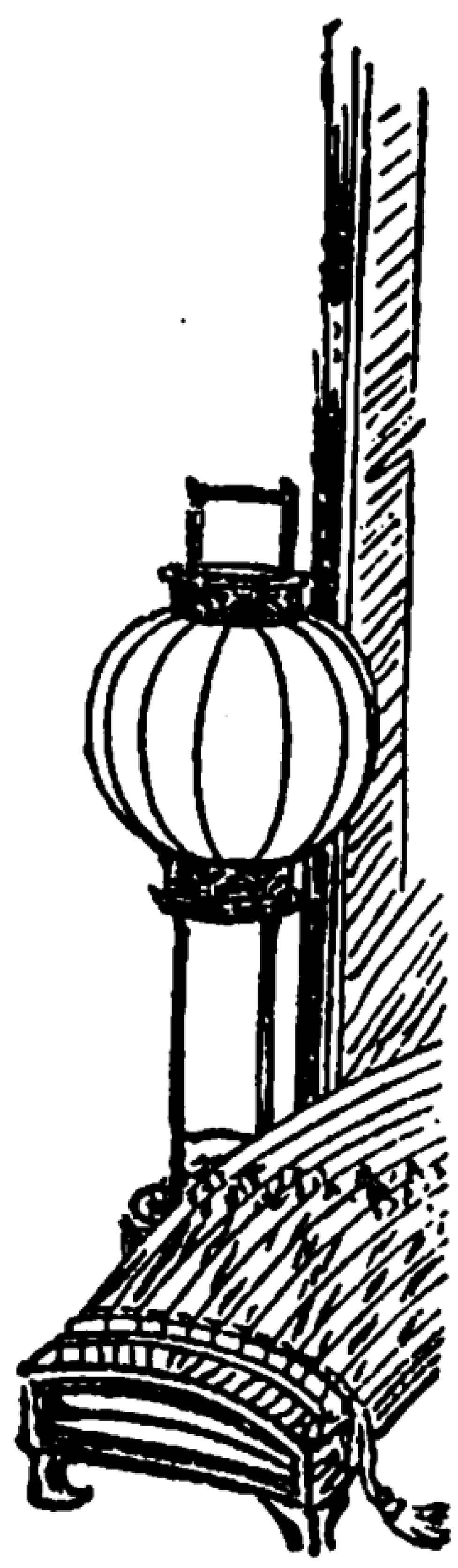
凡三十六條

ふちばかま（繪入）

此の書、絳山撰柳川重山畫とあり。絳山の傳詳かならず。重山は江戸の浮世繪師にして、其の師柳川重信の後を繼ぎ、其の畫風を能くせり。絳山の序に、延喜の皇朝に、賢君明臣を畫し給ひて、君と臣との鑑とせさし給ひき。今茲に重山主人は、古今の賢婦を寫して、おのがや

からの小女子が、「勸懲の助にせまく、筆にまかし、かき出したるを、衆星閣の主人、これを乞得て、世に公にせんと、僕に縁故をしるしてよとあれば云々。」とありて、畫を主としたる書なり。文政六年の發行なり。

目録



詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

朝比奈義秀

朝日かけさすかの人のたねなれは　この名もよゝにかゝやきにけり

二句、さすがといふ詞叶はず。四句、この名もとあるもをさなし。さて義秀は、和田義盛の子、或は、義仲の子ともいへり。そはしばらくおくべし。一體の口つきいやし。見るにたらず。

秩父重忠

君ならてこゝろわけぬをいかなれは　二股川にいひしつめけむ

君に對して、二心なきよしいへるなめれど、君ならで心わけぬをといひては、君に心をわくるやうにて、まぎらはし。君をおきてともいふべき

にや。二股川にいひしづめけむとあるもふつゝかなるいひざまなり。

上總五郎兵衞忠光

くやしくもみ出たされけり身をかへて
うき身をさへにいとはさりしを

二句、しられけるかなと、いふべきところならずや。三四句、身をかへてうき身をさへなど、よくも聞えず。作者、さへといふ詞のくせありて、やゝもすればいへり。そはわたらぬがちなり。此の歌、うき身の外に何事かありけむ。副の意叶はず。すべて見るにたらず。

ふところにかくす劍のこゝろを
世に知る人のなからましかば

青砥藤綱

この河のせにうつもれぬ君か名は
とこなめにてぞ世になかれけれ

二句、せにとあるは、錢にきかせていへるなめれど、つたなし。うづもれぬとあるも心ゆかず。こは、うづもれずとあるべし。四句、とこなめのとことはになどこそ、つけいふべけれど、とこなめに世になかれ云々とは、ふつゝかなり。名は、なぐる、知らる、立べし、殘すなどこそいへ、ながすとはいふべからず。されど、惡しき名なれば、ながすともいふべし。

かざりなきその白鞘の劍太刀
とぎし心もきよくもあるかな

後醍醐天皇

雲ゐまでめさけたまひし駒の名の
龍の悔こそ君もましけれ

駒の名の龍といへるは、ひがごとなり。する墨、青海波などの如く、龍と名づけし駒にあらず。さて、悔こそ君もましけれ。かやうの處は、君は

ましけめといふべきなり。決定していはむは、畏きかたもあれば、推はかり奉るかたによむべきものぞ。この作者の疎漏なるを、さまでいはむもなか〳〵なれど、因に、初學のためにいふものなり。又龍の悔といひしは、易に、亢龍有悔云云とあり。それによられたるにや。この歌は、後醍醐天皇、御即位あらせられたるを、悔たまへるにきこえて、事實相違せり。

大塔宮

きえにける秋の霜こそかなしけれ
　しこの醜草おきもからさで

秋の霜といへるは、心ゆかず。霜は、草木をからすものにて、人のよろこばざるものなり。されば、此の宮を霜になつらへたるは、ふさはしからず。

御衣ぬらす岩屋の苔の雫さへ
　なみたなからにしほりましけむ

作文雜話（六）

安藤晴晨

文章の用語、文脈、

漢文直譯體が、天下に行はれた時代も、歐文直譯體の、社會を風靡した時代も過ぎて、また、是が反動として、頭角を擡げた中古文の勢も、既に過去の夢となつてしまつた。現今の文章界は、未だ、統一を得たといふわけにはゆかぬが、兎に角、人はいづれもの極端に厭きて、中正にかへらむとの希望をいだいて、知らず〳〵、その方にむかつて居るらしい。

この際に當つて、一時世上に跡をひそめた、言文一致といへる文体が、國字改良の聲とともに、再び社會にあらはれて、滔天の勢を以て、在來の文体を厭し去らむとして居る。尤も、この文体は、

現今のまゝでは、果して在來のものに、代る事が出來るかは疑はしい。一方に、少壯語學者の、双手を擧げて贊成するものがある。一方には、また、文藝批評家の二三が、之を凡俗的改革と罵つて居るのを見ても、その那邊に長處があつて、那邊に短處があるかを知るに難くない。然し、將來、發達改善の途を講じたならば、頗る、有望なる文體である事は疑ないのである。

それは扨おき、今日の文章界は、かゝる有樣なので



あるが、自分が、今日の文章を學ぶ人々にのぞむ事は、普通文(普通に稱せらるゝ意義による)を書く人に對しては、歐文の文脈に偏せず、漢文の語法に泥まず、中古文の文體を擬せず、極めて中正の態度をとつて、やつていつて貰ひたいのである。言文一致を書人に對しては、その語法の標準とする所を撰て、野卑に陷らず、冗漫に流れず、よき結果を、將來の文體に貢獻するつもりて、進み

て行つてもらひたい。
すべて、文體は、時代によりて、各其の特質を有して居る。たゞに文章のみでなく、文藝上の作品は、皆、時代の面影をやどして居るといふべきである。わが國の過去をかへりみても、平安朝には、平安朝の特色があり、鎌倉時代には、鎌倉時代の特色あるが、いづれも比較すれば、その差異は明かであるが、これとても、漸次の變遷を經たので、一朝一夕の變化によりてではない。されば、この三十年間の急劇な變化をうけた我が國が、文藝界に於て、文體の混亂を見るも、怪しむに足らない。然し自分は、一文豪のいでゝ、よく、この渾沌たる文章界を威壓して、よく、統一の域に到らしむべき、大作を出すあらむ事をのぞむのである。

（附言）自分は、作文雜話といふ題を設けて貴重の紙上をふさく事、こゝに六回、その間、おもひがけぬ、塵事蝟集したる爲め、つまらぬ事のみ繰返してのべたに過ぎないので、甚だ汗顏の次第である。それで、先、この雜話はこれで切上げて、他はそのをり〳〵、別に題を設けて、書く事としやう。

はきよせ（二）

在近江　松竹莊主人寄贈

天保十三壬寅年八月御旗本平岩善十郎妹河野庄左衛門母堂秋香女の上書

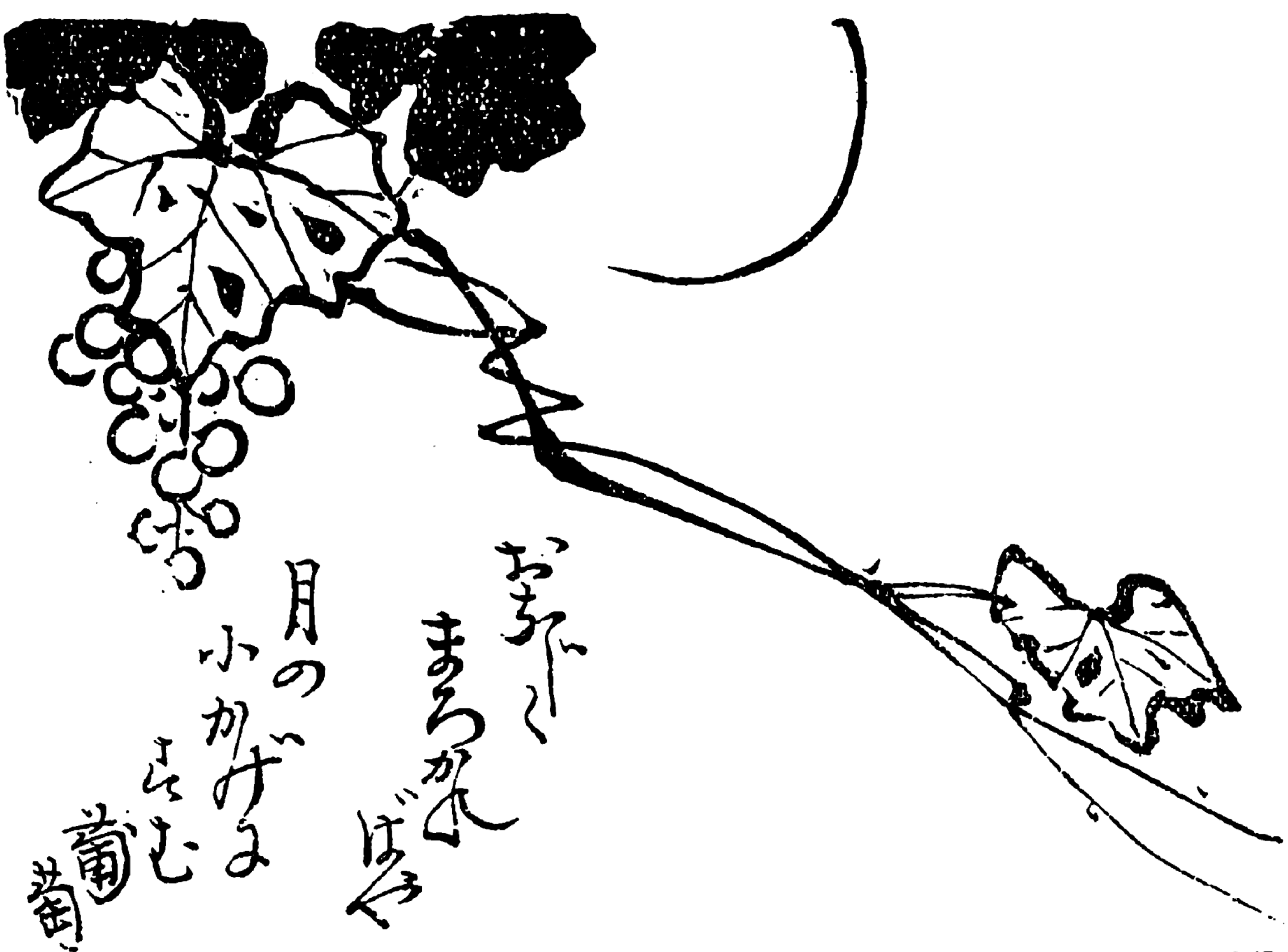
いにしへより、和漢共に、治極りて亂に入、亂極りて治に入る。干戈治て、二百餘とせといふ比は、兎にかくに亂を忘るゝの時節にして、貴賤、皆奢に長ずるなり。心あらん者は、かゝる折こそ驕を愼み、上を敬ひ、下を憐れみ、文武の道を勵み、

儉約を用ゐ、其の家々の祿に應じて、武具馬具等をも心懸け、異國の譏り、倍臣の侮嘲を防ぎ、數代、請け奉りし祿の恩、片時も忘るゝこと無く、且は、子孫の榮をも心がけなば、祈らずとても、天道の照覽、神佛も守らせ給はん。君の惠にて、辱くも、先祖の恩も省みず、文に疎く、武に拙く、只、淫酒遊藝を以て身の樂とし、是れが爲めに、あたら財を費し、人を怨するの心無くば、假令神佛を祈るとも、などか納受あるべき。其の鬼にあらで是れを祭るは諂ひなり。と、聖賢も宣ひしなり。才足らず。文に疎かなれば、道理に闇く、人の上を察すること、さらに無し。士農工商、各生じ得たる其の業、いづれか疎かなることは無けれ共、士は、萬民の上に居て、農人の艱難云ふ計なく、降りくらす五月雨に袂を絞り、早苗取り、土裂る水無月の暑さにも、田の面に生る草を取り、斜草のたなつもの作りたる中にも、瓜田の賊を防ぎ、亦、猪鹿の荒るを追んとて、田の畔、又は、樹の下に蚊帳を垂、莚薦を褥となし、終夜眠らず。秋は、小田の鳴子に、夜盡るとも心をゆだねず。冬は、雪を踏み分けても薪を樵り、谷の流を汲み、燈の下に履を作り、繩をなひ、女子は、肌に幼をいだきて糸をとり、機を織、千辛萬苦をなすと雖、風雨の爲に、作物を空くなし、又、津浪出水の爲に、家を流され、業を失ひ、道路にさまよひ、門に立て、餘りを乞ふも間間あり。治世の士は、かゝる詫しき民の貢を安座して喰ひ、戈矛も動かさず。百姓の身の膏を絞りたる金銀米穀、湯水の如く遣ひ、先納課役を云ひ付け、人をあはれむ心なく、不仁の者も、少しならず。其の貪り取たる金銀も有、互に、子に甘きを食はせ、美服をまとはせ育つるとも、子孫い

かでか、天の咎、悋しみ人の恨なかるべき。領主たる者は、民を撫育するは、國家の爲なれば、我子の如くなすべきを、互に、仇敵の思をなすも多し。給はる所の土地、貢の高こそ頂戴致候半、百姓は、皆天下の民也。己が百姓と、心得、無體を申付ることそ、誠に愚也。四海の困窮は、亂を生ずるの元也。不忠第一ならずや。下を憐む心なきは、禽獸にも猶おとれり。亦、小祿の武士、知行戴ざる者、凶年を己が豐年と思ひ、萬民の飢渇を省みず、遠き慮無く、酒色に奢り、米穀直段下落に及て、うき歎き、職人工等に、申付たる事の聊たがひあれば、それを云立て、價をば不拂、町人工杯は、只己が腕一本の外に知行なく、身一つにして、父母妻子を養ひ、あはれはかなき者なるに、聊思ひやる事なく、利欲に迷ふ不道の者もありとぞ。かゝる親にて育つる子、舞ならずして、誰か忠孝の人とならむ。商人のかなしき、火災なんどに逢へる折は、家藏も一陣の烟となし、身の置所にも迷ふなり。士は、能もなく、功も無き祿盗人だにも、暖に着、甘きを食ひ、心長閑に日を送るは、有難し共、なか〳〵言の葉に盡し難き身なり。皆、是誰が蔭ならん、忠孝の心なきは、犬馬にも猶おとれり。

　みるめ苅伊勢ほの蜑を思ひやれ藻鹽たれつに袖の雫を。かくすよみたる紫式部は、行ずして名所を知り、歌の道の達人とやいはん。さしも、かしこき雲の上に仕へ奉り、宿も定めぬ海士の子が、哀を察し給ふことは、女子の才とは思ほえず。丈夫として此の心なきは、何を以て、國を治め其の家を齊へん。衛の君、狐の裘を重ね着して、雪を慰め給ひしに、薪を負し賤の男、路に哭す。何故ぞと尋給へば、其の人答て、雪降り衣薄うして

寒氣堪難し。この故に哭する也といふ。爰に於て、衛の君、憐に思ひ給ひ、金銀米粟多く出して、窮民を救はれたりとぞ。貴人高位として、仁の心無きはなけれども、誰が言上する者なら ざれば、かゝるわびしきことは、露ばかりも知ろし召ざる也。家臣も又智淺く、學の道に疎く、かゝる賤敷ことは、言上せぬ事と、心得違へる者もあり。人の君として、何事に寄らずしろし召ざれば、御仁政普く及渡る事なかるべし。最明寺



時頼入道の如く、自ら諸國を巡り給はねば、佐野の常世が、所領を掠られ、身貧にして、武道の本意を忘れざるかしこき心ばへも、彌勒の世まで、顯はるゝこと絶てなかるべし。民百姓市人は、無學の者多く、義理に昧くして、唯中の行届ざるも一筋に、公を恨み奉る者少なからず。近年、大阪甲府の捌き、又、御燒失の事、さしも玉の臺、赤銅の瓦、一時の間に草の家なんどの如く、烟と

立昇り、近きころ、打續き御連枝の御早世、誠に御心の痛み、臣として誰か歎かざらん。大名は、幼より暖に着、安逸に人となり、下の歎き苦み察し薄く、輕きより歷昇りし者は、腸賤して、四海萬民の爲とは思はず。鼻の先の小欲に迷ひ、日の本の尊を穢すもあり。世に、皐陶伊尹の如き臣顯はれ、不仁者おのづから遠ざかり、君の御德光を增、御心も安からん、昔武王に、忠臣十人有て、國治り、一人は、婦人にして文母是なり。女子なりとて、御心を勵し、國の賢臣といはれ給はば、天下の御外聞、諸萬人の悅なり。君が一夜の情に、百年の命も惜しからずとは、情の道なり。君が寵を一度蒙給ひし御身、などか命一つ惜たまひ、諫たまはざらん。文王の御母君、亦、后、御德四海に溢れ、千歲の今迄も、いと慕しくこそ思侍る。諫臣有て國亡びずとかや申候。殊更に、君は、御仁心深く渡らせ給ふ。臣又忠を以せば、堯舜となし奉る、などか難からん。男子は、内に忠義を存上候者なきにしもあらね共、家を顧み、妻子家臣の上までを思ふを以て、みす〳〵御不爲と存候御事も、口をつぐみて言上にくゝ年毎に、御心の痛み數添る事、數ならぬ身にも、いと歎かはしくこそ。なべて、世の中に命だに不惜ば、何か恐るゝ事の侍らん。女子無き世ならば、衣紋繕ふ男あるまじと、双が岡の何某法師の筆すさみにも殘されたる如く、上闇くば、誰か文武忠孝をも勵むべき。弓射る者的なくば、何を以ねらはんや。只賴み奉る所は、君御一人が、四海萬民の心を勵し給ふ的かと存候。かゝる仁君の下に居て、忠孝の心無きは禽獸にも劣り、人の頭司たるもの、聊か私の心なく、己を正しうして、後、下を糺さば、誰かは善に進まざるべからん。都て御遠慮あらせら

れ候大名、御入用多く候故、家中、半知借米等致候儘、いとしき娘を遊女うかれ女に賣り、妻にはわかぬ別をし、乳母又水仕女などの奉公に出し、借米中は、諸町人買掛り等の代金不拂、是故、又町人の難儀に迄及候。領分の、民、百姓、市人、過分の用金等に苦み、誰一人も、御壽命長久を祈り奉る者無き樣に相成、仕へ奉る者、女子なりとも、誠忠を盡し奉らんの心ならば、御儉約を旨とし候はんこそ勿論なるに、忠の心薄きは、只、其の身、其の身が大奥の御首尾宜からん事をのみ存じ、價高き珍味、亦は、綾錦を求め、國產又は、下屋鋪の品杯と僞り贈り、其の家々の衰微、下の歎を一向心付ず、誠歎ケ鋪事ならずや。御早世の君の御附、老たるはさも有ぬべし。年若き者、古は、殉死だにもなし奉りし程なれば、己々は、命もいかで惜からねど、其のたらちねの、かゝれ

とてしも撫たりし緑の黒髪を剃候こと、御菩提といならで、大なる罪なり。父母兄弟の歎き愁傷、いふばかりなく、兼好法師の言の葉、一旦の出家はなり安し。出家の後の出家は遂げ難しとす。男子すら如斯。まして、淺はかなる女子の身は、耳目の欲には迷ひ易かり。殊更に、好色は人の欲する所なり。煩惱のきづなは斷ち難く、君の御名を汚し奉るも、稀にはこれあるよし、傳承參らせ候。御菩提にはあらずして、却て人の譏を招き、破戒の人を求る業也。是佛事放生會とか、魚鳥を放たせ給ふとて、餌差漁翁に命じて、多く捕へ奉りしを放させ給ふ。御供養にもひとしからんと、愚昧の心に感を解かね參らせ候。こは、君の露ばかり知ろし召給はざる御不仁の至と奉存候。是等諫め奉らば、神社佛閣の御祈、千部萬卷の御經にも遙に增、御慈悲、廣大の御隱德かと奉存候。是全く、

治の極りより、人々其の身安きに居る故、人の察し薄く相成、御仁政下に屆かず、四海萬民の困窮は、亂を生ずるの元、日の本の國の恥辱かと口惜く存候。諺に油斷大敵、燒鳥にもあまねく緒を付るとか申候。愚智短才の女の身すら、國恩の深きを片時も忘るゝ事無ければ、いとゞ、歎ヶ敷奉存候。恩を請て、恩を不知は禽獸に劣りなん。猫も三日の恩を知り、犬は三年の主を知り、尾を振にあらずや。數代恩祿を貪り、功も無く



能も無く、治世に安座ます。其の事を思はざるは犬馬に恥べし。恩を思ひ奉るは、祿の高下に依るべからず。先祖主計頭親吉が捧げ奉りし誠忠の心を繼、國家御長久の御爲を存、身を忘れて斯く申上候。多罪御ゆるしの程奉希候かしこ。

寄贈者いふ。徳川幕府の盛時にあたり、婦女子にして、かゝる上書をなしたる其の見識、その誠忠感ずるに餘あり。故に今の世に稗益

なからんも、かくは抄出つ。さなれ、その奢侈をいましめ、又小欲に迷ひ、日の本の尊を穢すなどいへるは、いつもかはらぬ、よき誠の草とやいはまし。

衝口漫言（七）

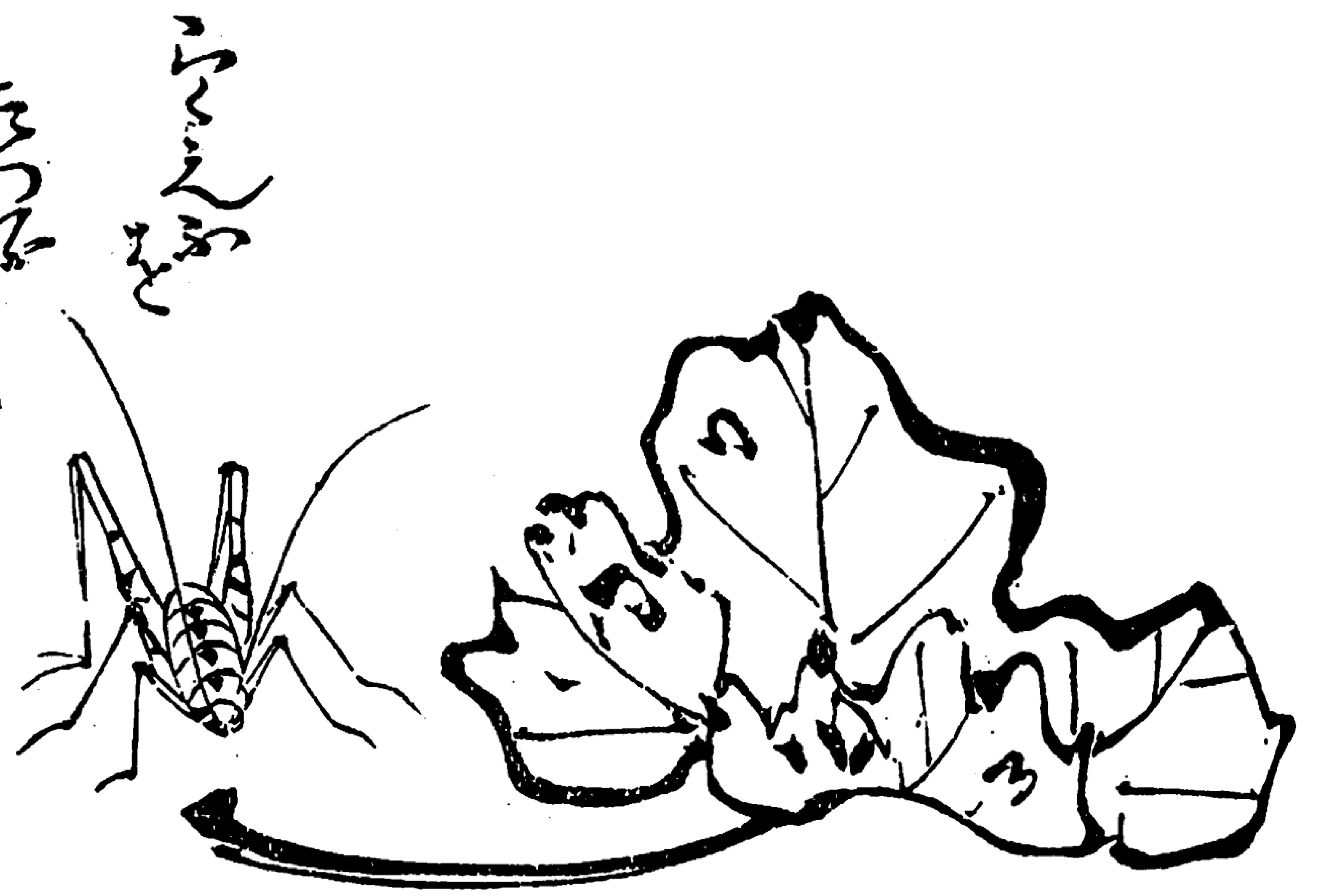
白松園主人

○第二の耶馬溪

青海島の絶景が、第二の耶馬溪以上の價値あることとは、以上述べた所によつて、皆さんの御首肯せられた事と信じます。そこで、之れから、全所に於ける風土、人情の大體を紹介しておきます。此の島は、餘り大きくもない、孤島のことであるから、無論住民は、常に、漁業を以て、衣食の料とするのである。漁民の性質は、勇敢ではあるが、無教育であるから、非常に、迷信に強いのである。從つて、あらゆる神社佛閣に、喜捨奉納すること、恰も、塵芥をすつるといふよりも、寧ろ、已れの身を棄つるより輕しといふてよいのである。四十以上の漁民は、悉くチョン髷を結んで、維新以前の古風を存してをるが、その由來については、種種の說があるけれども、その中、誤つて海中に落ちたる時、之れを攫みて、引き上ぐる便利のためぢや、といふのが確のやうである。だから、浦人の難船に遭うて、九死のうちに一生を得、再び、妻子を見ることを得た時は、直ちに、その結髪を切つて、神殿に納めるのである。又、冬は、羽織のやうな者を着るものはなくて、袷を七八枚も重ね着てをるが、我々に比すると、頗る厚着と云はねばならぬ。これは、なぜであるかと問ふてみるに、寒中に寒さを感ずる時は、海中に入り難いから、

捕鯨の業に從事する者は、猶更、之れが必要ぢやといふてをる。

春立ちそめてそろ〳〵暖になつて來ると、陸地に近き海濱に來て、釣を垂るゝもの、網を曳くもの、水を潜つて鮑をとるものなどが夥しいのである。但見る、日本海の荒波の上に、七八才から、十二三才位の少年等が、老翁一人を船頭として、奇岩突兀として、恰も、碁石を散布したやうな間を、危ふげもなくあやつる有樣、さながら、腸を斷



つかやうである。此の少年等は、毎年四月頃より海中に沈みて、海草魚貝を探ぐるのが常であるから、夏に至るといふと、其の軀色は、炎暑に焦されて、全く、黑奴と同樣である。如何なる鑠日炎天と雖も、物蔭に入つて凉をとるといふことなく、只海中に浮沈して、冷を取り、衣服をさへ着るといふことは、更にないのである。こゝに、特に云ふべきことは、別に女子の一隊があつて、海

中に沈みて、海入をするのである。此等の者は、皆、男装して、船をあやつり、同じく魚貝を取りて、夫や、親の助をするのである。されど、一且海荒れて、激浪港を破り、斷崖將さに碎けんとするに當つては、漁業を營むことが出來ないので、家に籠もり居て、糧の乏しきを悲しむのも哀れである。漸く、夏の終となると、夜中、數里の沖に漕ぎ出て、篝火を焚いて、釣鯖を試みるのであるが、幸なる時は、一時に數千尾を得ることがある。斯くの如くして、冬の貯蓄をするのだが、日頃負債のあるものは、之れ等の社會には、所謂親分といふものがあつて、それがために、終始奴隷のごとくに苦められるのである。かやうに、四季の渡世は、皆海上のことで、それも、百難を犯してやらねばならぬ。都會の人は、拾錢を費さば、容易に美味に飽くことが出來るが、漁夫が、かくまでに辛苦して得る者であると云ふ事は、恐らくは、少しも御存じないであらう。

毎年陰暦の七月に、住吉神社の祭禮がある。其の日は、早朝から身を清よめ、神輿を奉じて海に浮かび、牛飲馬食して、日頃の勞を遣るのである。

通浦の内を分てば、棚浦、段、横などで、名高き捕鯨會社は、本浦の東北海濱に、白壁を築きて屹立してをる。さて、漁民の躰格は、强壯偉大で、風俗の質素は、勿論のこと、言語は野鄙で、解し難いことが頗る多い。今、その二三の例を擧ぐれば、

シヤイ、（驚きたる時用ゐる）
アナゴーナ、（あんな、をかしいこと）
アッチソッチチュウ二、（なんでもまあ恐ろしい）
ボートフットキナイシヤントシャイ、（驚きたる時の形）

先づ、このやうな言に類したのが多いのである。そしてまた、わとおとの區別がない。此處より一里ほど沖に、相島といふのがある。之れまた、言語が更に解し難く、殆んど、異人種に接する思がする。猿が多く栖んでをる事は。前にもいふたが、害をする事が限りもなく、大根でも芋でも、皆、堀り取られるので、漁民が、之を忌むこと丶いふたら、惡鬼のやうである。島中未だ、人跡の至らぬ所もあるといふことだ。

（以下次號）





敎の庭

十月五日兼題

海邊紅葉

天　肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

いはとこににしきのとばりかけ渡し
　たかふねまつかいそのもみち葉

評　こゝろもことはもうるはしく品位ならぶものなし

地　三河國寳飯郡下地町　永井さい子

影うつす繪しまのもみちなみなみの
　ふでのおよはぬにほひなりけり

評　いともたくみによみなられたるはなみなみの口つきにあらず

人　本郷區西片町　竹村貞子

いそやまのもみつる頃はあまの子も
　けつらぬかみにをりかさしつゝ

評　めづらしからねど作意よくとほれり

甲之部

海はらをさしている日のいそつたひ
まはゆきまてにてるもみちかな　肥後　佐々小琴子

天ひとのころもとも見んみほのうらの
まつにかゝれるつたのもみちね　河内　岡田美貴子

磯やまの木々はみなからもみちして
なみにもあきのいるそみえける　石狩　阪本榮子

このころはつりする船もいそやまの
もみちのかけにこがれぬるかな　三河　河合ぬい子

目もあやにいりひかゞよふあきの海の
しまわのもみちいそまさりけり　福岡　武田鑑子

乙之部

うら風にいそやまもみちかつちりて
いろあるなみのあやにしきかな　穗積穰子

むらしくれすきやしつらむいそ山の
まつないろとるつたもみちかな　三木ふさ子

うちよする浪もにしきとまかふまて　伊勢村春子

そめしもみちのいろのまはゆさ　伊勢村花子

心なきあまも手折りてかさすらん
ゆふ日かゝやくきしのもみち葉　瀬戸榮子

荒なみのよせくるいはにはふつたも
あきにはもれすもみちしにけり　田代喜和子

うすくこく色そふいそのもみち葉は
なみのしふきのそめやしつらん　衣笠澄子

こからとふ磯へのまつのこのまより
山のもみちもみえわたるかな　北島操子

小ゆるきのいそのもみち葉色つきぬ
よへのしくれやうらつたひせし　北島功子

うちよする浪のしふきやかゝりけん
いはれのつたのいとゝいろこき　山本梓子

はつしくれすきゆく磯のもみちはの
いまいくしほはなみやそむらむ　早川たれ子

きりはれてゆふ日かゝやくいそ山の
もみちになみもこかれてそよる　服部蔦子

はせつりてかへる浦わのゆふもみち
ひとえたなりていへつとにせむ　中舘やう子

ほの〳〵とあけゆくまゝにきりはれて
いそやまもみちなみにゝほへり　棚田滿智子

もみち葉のうつろふ岸にうちよする
なみもにしきとみえわたるかな　柳田益子

なくしたにとらぬあますらいそ山の
もみちひとえは折りかざしけり　内田とく子

うら松のみどりになれしめうつしに
つたのもみちもあきはうれしき

あまのすむ磯邊のもみぢゝりそめて　關口きせ子
なみにもあきのいろぞ見ゑける

眞帆片帆見ゑかくれするなみの上に　菊地かれ子
くれなゐふかきもみぢ散りけり

片きしによするなみにもいろみゑて　椎野濟子
もみぢながるゝあきのうなばら

ひとしぐれ過ぎしやま邊のまつかぜに　濱口ころく子
もみぢゝりかふあきのうなばら

うちよするなみのあやにも色みゑて　山崎うた子
いそやまもみぢゝりそみたるゝ

わたつみの波間に見ゆるあまをぶね　松山かすゐ子
もみぢをのせてこがれ行くなり

丙之部

うちよする濱のはなさへもみぢして　椎野秀子
あきにはもれぬいそのやまかげ

あまびとも袖ににしきやかさるらん　椎野薫子
いそのもみぢのかぜにみだれて

こゝろなきあまもしばしば眺むらん　椎野鋭子
いそのもみぢのあきのさかりを

もしほやくあまのとまやもゆく秋に　椎野ぬき子
にしきをかざるいそのもみぢは

夕日さすやまへのもみぢかげ見ゑて　大槻まつの子
いそうつなみはにしきなりけり

夕日かげうつれるきしのもみぢばゝ　竹村竹里子
なみのあやおるにしきなりけり

秋かぜにきりはさながらはらはれて　關勝子

ゆふ日まばゆきいそのもみぢは　荒井滿氏子

こくうすくそらともまがふ海はらに
にしきおりなすきしのもみぢは

見わたせばうなばらとほく山みゑて　荒井千代子
こなたのきしにもみぢいろどる

秋ふかきゑじまがいそにきて見れば　山崎かめ子
なみにうつろふきしのもみぢは

いそ山のもみぢのにしきうちかされ　田尻保代子
なみのしらたまつゝまいしかば

わたの原小しまのこずゑもみぢして　德永廣子
こくふれさへもてりわたりけり

朝しほのさし出のいそのもみぢ葉は　佐々有鄰子
からくれなゐにゝほひぬるかな

小舟さす海人もかぢをやとゞむらん　杉山きみよ子
いそへのもみぢいろふかきころ

夕日さすいそへのもみぢ見わたせば　川中子てつ子
にしきをあらふこゝちこそすれ

ふれとめて見るひと多くなりにけり　田代綾子
いそのもみぢ葉いろづきしより

きのふけふいそのもみぢ葉色づきて　衣笠志女子
にしきと見ゆるなみのうへかな

かぜあらきいそへのもみぢ散しきて　吹田たけ子
にしきうかへるあきのうなばら

いそ山のきしのもみぢのかげ見ゑて　田村多豆子
なみのうへにもにしきしきけり

こゝは濃くかしこはうすしいそやまの　村上操子
もみぢのなか瀬いつこなるらむ

かけうつるもみちの色にあかしかた
　あさきみきはもふかく見えけり　上原のふ子

うすくこくいそへの木々の色つきて
　はなにもまさるあきのこのころ　松村あさ子

見渡せはよせてはかへすしらなみに
　くたけてのこるきしのもみち葉　青木たま子

よる浪のいろくれなゐに見ゆるまて
　いそへの木々はそめつくしけり　福原薑子

流れきてなみのまにまにたゝよふは
　いつこのやまのもみちなるらん　岩田春子

すまの浦やきゝのもみちの散る頃は
　よせくるなみもにしきおるなり　鏡山増代子

あさなゆふな磯うつ波やそめぬらん
　くれなゐふかきうらのもみち葉　松尾せい子

いくたひもうちかへしつゝ染ぬらん
　なみよるいそのもみち葉のいろ　序山あや子

よる波にぬる手のもみちいろそひて
　おきのいりひにゝほひあひたり　序山ふみ子

舟よせてたれか見るらんわたつ海に
　かけもこかるゝきしのきみち葉　戸塚てつ子

山姫のおれるにしきのさまさまを
　うみにうつせる木々のもみち葉　川村松子

歸るてもぬるてもいかておよふへき
　いそやまゝつのつたのもみち葉　香斐ちか子

秋のいろに海さへそめぬやまもみち
　にしきはなみにはなとうつりて　舘脇ます子

和田つみの神もめつらんもみち葉は
　奈邊田よし子

　なみにさらせるにしきなりけり　佐藤わき子

わたつみの八重の汐ちをさまよへは
　いそのもみちもにほひそめけり　中村せつ子

しらなみに浮へるあきのもみちはゝ
　にしきにまさるいろそ見えける　加藤まさ子

ふく風にうらやまもみちちりそめて
　なみのまにまににしきおるなり　増戸そで子

いそ山のいはかきまゆみいろふかく
　いくしほまてとしそめわたるらん　赤尾かつ子

わたつみに浮へるふねのしら帆にそ
　もみちはちりていろとりにけり　丸城さたり子

いつこより風のさそひてわかふねに
　かへてのもみちゝりかゝるらむ　金井ぬき子

わたつみの波間たくゝるもみち葉は
　あはれいつこのきしによるらむ　高木はな子

わたつ海に山邊のもみちうつろひて
　にしき織りつゝさゝなみのゆく　高地こう子

なるみかたいそ山かけのもみち葉は
　散るときしもそなかしかりける　中村りき子

あき風にいそやまもみち散りそめて
　おきのしら波いろつきにけり　荒野たに子

そめわたるいそ山かけのもみちはの
　したてるいろそうみにうつれる　田川みさた子

かせ寒みしぐれ身にしむおきあひの
　かなたのきしに見ゆるもみちかな　柏木すね子

ふれとめていさ見にゆかんきしの邊の
　もみちのにしきいほさかりなり

風ふけばちるもみぢ葉をきしちかく　　宮武てる子
ふねこぎよせて見るそたのしき

おきとほくしら波わけてゆくふねに　　近藤せつ子
ちりくるもみぢあはれなりけり

吹く風におきつなみまを行くふねの　　清水てふ子
しらほにちるはもみぢなりけり

あかしかたきし邊にたちてなかむれは　　大久保伊野子
もみぢをさそふまつかせそ吹く

いそつゝきあゆむかなたのたかねより　　藤波たま子
こそめのもみぢちるそうれしき

しら波のよするなきさをなかむれは　　飯塚まつ子
みねのあらしにもみち散るなり

あかしかた波間にうかふもみち葉の　　村上友代子
たゝよふさまそあはれなりける

ふねうけてかなたこなたを眺むれは　　小川つる子
きし邊のもみぢいまさかりなり

わたのはらこきゆく舟と見えつるは　　國府田はる子
きしのもみちのうかふなりけり

かゝみなすあをうなはらに色ふかき　　木村とめ子
あきの木の葉そちりてうかへる

おほそらも一つ色なるわたつうみの　　三宅いそ子
なみにたゝよふきしのもみちは

なみのまにおつる夕日のかけはえて　　當間みすの子
みなそこてらすきしのもみちは

うら風にもみち散りゆくみなとには　　沼井あい子
くれなゐふかきなみやたつらん

伊勢の海にふねうき出でゝなかむれは　　會田まつ子

きしのもみちはにしきなりけり

なかむれはあきの木の葉のしらなみに　　今井りう子
たゝよふさまそいとあはれなる

風ふけはこすゑはなれてもみち葉の　　鷲山みゑ子
海人の小ふねにちるそをかしき

わたの原おきつしほかせふきたちて　　向山まき子
さそふにしきはもみちなりけり

さゝ波にみきはのもみちうすろひて　　篠塚たけ子
にしきとたゝむあきのうなつら

わたつみの沖のなみまにちりうかふ　　太田かな子
もみちのいろのふかくもあるかな

わたつみの沖のしら帆にちりかゝる　　金田とみ子
いろもはえあるきしのもみちは

うちわたす千さとの海のおきとほく　　小島しづ子
もみちをさそふあきのうらかせ

ちらぬまもいそ山もみちかけみえて　　岩田よれ子
にしきをたゝむあきのうらかせ

さらぬたににもきとみゆるもみし葉の　　城田ふさ子
なみにてりそふいろそゆかしき

しち濱のあやおるきしのもみしはに　　八尾家子
たつのみやこのにしきなるらん

しら波にあきのなこりをとゞめしは　　秋岡れつ子
つゆにしくれにそみしもみち葉

ゆふひてるいそやま岸のはしもみち　　佐野きやう子
よするなみにもいろをそへけり

うな原やきしのもみちの散るまゝに　　鴻巣とし子
あまもにしきのころもきてけり

かゝみなす海のおもてにもみちはの
あかきこゝろをうつしけるかな　今井たい子

しら波ににしきをそうるもみちはの
あかきこゝろをたれかくむらん　正木たゑ子

うなはらにおつる夏日のかけそひて
いそへのもみちいろまさりゆく　河田いし子

もみち葉のたゝよふみれはまちかくも
しまやあるらしいそけふなひと　小川たき子

ふれよせていそ山もみちみてゆかむ
きりふきはらへ八重のしほかせ　本多きさ子

ふな人ゃしはし眞かちやととむらむ
ゆう日ににほふいそのもみち葉　三宅中枝子

下枝をはなみうちかけてそめつらむ
ひとしほふかきいそのもみちは　服部正子

あさほらけ霧晴れわたりなにはかた
いそやまもみち見にそめにけり　篠田圓子

いそ山もみちしらぬらしさゝらかた
にしきのうらにゆう日さすみゆ　横田音羽子

いそやまの夕日ははやくくれそめて
もみちゆいろやなほのころらん　横田秋子

舟子さへめにつくはかりうみきしの
やまのもみちはいろまさりけり　永井しめ子

そい山のもみちのにしきかつちりて
くれないふかくにほふころかな　横山しょ子

十月五日兼題

女郎花を人に贈る文

天　關口きね子

いつしかとまちし七種の花も、やゝ色めきて、ふちばかまのあでにひもときたる、とりどりうつくしきがなかに、一際すぐれて、女郎花のなまめかしく、露の玉をかざしたるその姿こそえもいはれず。一しほゆかしうおぼえ候らへ。さるを、見はやさむ人もなくて、空しぐさかり過ぐさむも、何となうわたらしうおぼえ候まゝ、手折してまゐらするになむ。文机の友ともなし給はゝ、花の面目この上もなき事と存候。なほまた、築山の松にやどる月を友として、萩の夜の長物語をきこえかはすも、いと興あることゝ存候ふに、ことに、さいつ頃めぐみ給へる松むしの、御なつかしき君をまちくらすをあはれとおぼし、まなびのみちに御いとまもおはさば、御出たまはり度、待上まゐら候。

かしく。

地　日向國宮崎町字小々森三百十番地イ號　林さち子

こゝにひきこし候うてより。初めての秋におはし

まし候ふを。あたりは、此の花、中々に多く、賤が屋の向ふの野山にて、今を盛の最中と咲きには ひ候。かゝる田舍にありては。かりそめにも。愛づる人とてはあく、只、まき場の露と。この秋をすごしはてさせ候はむも、いと口惜しう候ふまゝ。一束手折て奉り候。せめて、御花瓶にさゝせ、くちあん其の後までも、御かたはらにおかせたまはばあど、たのめ渡りまゐらせ候。御車さしよせたまはらば、のこりの花の面目も此上なかるべしと、切にはおもひやられ候へど、難くば、御言の葉の露だにもと、待ち侘び候ふらむをも。思召やらせたまへかし。かしこ。

關口きせ子

人

久しく御對面も致さず、いと御あつかしく、日々御うはさのみ致し居候。扨て、秋としいへば、事あき身にも相沈まるゝならひあるに、友の君には、先つ頃より御心地例あらずして、相ふし給ふよし、さこそ御淋しき事あらめと、御いたはしく存じ上候。日頃、君の好ませ給ふ女郎花、今年は、ことにはでやかに咲き出で候まゝ、御こゝろを御慰め給はんすべにもと、二三本さしあげ候。御枕邊近うまゐり、御慰め言きこえあげたしとは存じ候ものゝ、折あしく、やみがたき用事これあり候へば、けふはえ參らず。されど、近き内には、かならず御伺ひ申上くべく候。一日も早ういゑさせ給はん事のみ、かげあから祈居候。かしこ。

（以下原稿到着順）

岩田よね子

秋も、早殘り少なう候へは、御許樣始め、皆々樣御變りなう入らせられ、何よりの御事と存じ候。偖て私事、昨日はめづらしく外出致し候まゝ、秋の七草見んとて、向島なる百花園に立ち依り候ひしに、秋季皇靈祭の當日なから、朝まだ早き事とて、中々に人もごず。かの廣き庭園も、さながら秋の野べにて、植ゐなふし千草の花の咲さみだれ候中にも、女郎花のなまめき立てるに、置きあまるつゆの、かざしの玉とみだれたるなど、いひしらずこそ候ひしか。されば、その丶主に請ひて、兩三枝手折らせ、家づとにはいたし候へども、かくてうつろはせはてんも、口惜しう候まゝ、一枝御覽に入れ候。頓て、花道の御心得も候へば、床のすみになりとも、御さしおき下され候はゞ、誠に嬉しう存じ上候。あなかしこ。

柏木春江子

暑さ忘れてより、昨日今日と思ひしまに、はや、秋も最中と相成、千草の花のきそひ顔なる此頃なれば、荒れ果てたる我庭は、いとど、あはれまさるのみにて候を、今朝見れば、さびしき庭も色めきて、女郎花のゆかしく咲きそめ候を、一人ながめんもと存じ、露ながら御目にかけ候。いさゝか、御なぐさみにも相成候はゞ、こよなううれしくこそ。かしこ。

金田登美子

暑しとかこちし夏も、いつしかゆめとすぎ果てゝ、早や、袷こひしく相成候を、御わたりには、御両親様を御はじめ、みな〳〵さま、いつも御さえ〳〵しう渡らせたまふらん。次に、此方一同、ことなくくらしをり候まゝ、みこゝろやすめ給ひてよ。扨、日頃、父の丹精して育てし女郎花、此のほどより、やう〳〵にさきいで候まゝ、兩三枝御目にかけ申候。この道を辨へず。枝ぶりさへ見つくろひかれ、いと〳〵はづかしき限りに候へ共、せめては、御居間の花瓶にさゝせたまひて、御わらひ草にもなし下され候はゞ、いと〳〵うれしきかぎりにこそ侍れ。あなかしこ。

須佐きん子

風のおと雲の色も、やう〳〵秋を催し候折から、御機嫌ようわたらせられ、めでたく存上候。さて、わたくし事、御承知の通りの朝ね坊に候が、けさは、如何なる風向にてか、あさまだきより起きいでたれば、ひさ〴〵にて、庭の面に立ちいで候へば、昨日まで、ふくらかなりし女郎花の、香さへゆかしう、つゞくともなくほころび申候に、ひとりめではやさんも本意なく、花のこゝろもさこそあらめとぞんじ、そのうちにても、おもしろきもの二三種ゑらびて、御目にかけ申候。御文机の友ともならんには、われのみか、花の面目これにすぎずと存候。かしこ。

井上八重子

けさしも、野に千ぐさふみわけ候ひしに、をりしも、かたへにありしわらべのいとあいらしきが、女郎花を手折りくれ候に、心なき賤が目にも、わけて、秋のいろふかうに匂へるやうにて、いとゆかしくめでられ候へば、一人もてはやさんもあたらをしければ、とくかへりて、なかばをわかちまゐらするになん。あはれ、御居間の花さしに、うつし入れ給ひて、花とゝもに、かのわらべのみやびこゝろをめでさせ給へかし。あなかしこ。

岡田まち子

四方のけしきも、やう〳〵秋の淋さをまし、草の根にすだく虫のこゑ、そゞろあはれを催し候折から、まがきに咲ける女郎花、こゝ二日程にて盛りと相成るべく候。さるを、只、我家にのみ眺めすぐさんも、いと口惜しき事に候へば、御老母君の御なぐさみにと、此の一枝御目にかけ參らせ候。かしこ。

丸城さなり子

秋もやう〳〵深くなりて、木々の下葉のいろづく頃と相なり申候。折しも、御玉章もて承り候へば、御母君には、先きつ程より御氣分すぐれさせ給はで、御籠り居給ふよし。嘸々、御心配の御事と御察し申上候。この女郎花、わづか二枝三枝にては候へ共、母の日頃丹精して作り上げしものにて、今をさかりと咲き居り申候間、一枝手折り御目にかけ申候。何卒、御病人様の御枕邊に挿し置かれて、御心慰めどもなし給はらば、こよなき幸に候。申あぐるまでもなく候へ共、御看護專一と御心がけあそばされたく候。いづれ近日の内、御伺ひ申上ぐるつもりにて御座候。まづはあら〳〵。かしこ。

杉山君代子

秋もいつしか半をすぎ、野邊といふ野べは、七草さきそろひ、朝夕の風も、いと身にしむ頃となり候ひぬ。私の父事、日頃草花をめで候からに、いぬる頃より、前栽に女郎花をうへ、朝夕のたのしみとなし、心盡しゝかひありて、さきつ頃より咲きいでて、かぜのまに〳〵なびきつゝ、人まつ顔に匂ひ初め候。されど、かゝるいぶせき庭の片隅に置かんは、いとつれなきことに候へば、知るべの方に御おくり申上候てはと、父の申すにまかせ、今日しも、二本三本手折らせ候。御許樣には、常々花道の御たしなみもおは

し、また、敷島の道にも優れさせ給へは、御文机のほとりにさゝせ、學びの友となし給ひてよ。はた、此の花がいみじき御歌の料ともなり候はゞ、生ふしたてし父も、心づくしのかひあり。又一つには、此の花にとりても、一人の面に候ふべく存候。かしこ。

今井ぬき子

追々、秋風さむくなり行き候て、月下にすだく虫の音、いとゞ、あはれに覺え候今日此の頃。御許樣には、御いたづきいかゞ渡らせられ候や。すこしはおこたらせ給ひしか。伺上候。扨、此の頃は、降りみ降らずみさだめなき空にて、いとわびしさのあまり、久々にて同窓の友をおとづれ候て、種々御物語いたし候へども、親しき君のおはされば、いとゞあかず思はれ候折柄、友の君の前栽に、見事なる七草のさきみだれ候なかに、別きて、女郎花のいともめでたくさきをり候ひしまゝ、一枝こひ申しゝに、ことしは、ことに美くしく咲き出でぬとて、數多給はり候。されば、君にも二本三本分ち參らせ候。あはれ〳〵御枕邊の友ともなし、御なぐさめの一はしともなし給はらば、いと〳〵うれしくこそ。君にも十分に御攝養の上、一日も早く御全快遊され度、いつかはともに手をとりかはして、かの君の花園にたのしく遊ばんと、それのみ念じ上げ參らせ候。かしこ。

中村りき子

夏もやう〳〵過ぎさりて、秋風さむく、雲井に渡る雁の音、いとあはれに、庭の木の葉もきばみ果て、何となく、物さびしき秋の空と相成候。叔母上には、いかに渡らせ給ふにや。過ぎし頃の御病氣より、御身のほど尋常ならずおはしますよし。嘸かし御淋しう入らせられむと、推しはかりより。この女郎花は、今日しも田舍なる兄の許へ參り、其のかへろさ、某の野邊にて手折り參りしものに候。御床の間にさし置かせ給ひて、秋のいろをめで給ひ、かつは、つれ〳〵をもなぐさめ給ふ料となし給はゞ、此の上なき喜びにこそ。

椎野秀子

何かしか折れるばかりと云ひし、嵯峨野にあらぬむぐらが宿、いかで音づれ給はずや。女郎花なに匂ふにんと、口すさみたるも思ひ出られて、露におきふしたる姿、秋のあはれもひとしほに侍り。いつくしみたる花の下紐ほころびそめたるを、たをりて奉れと、いへるまに〳〵、いとほこりかほに侍れと、姿のみながめんも口をしければ、色をも香をも知る人にとて、二枝三枝まゐらすになん。あはれ君よ。秋の夕、御つれ〴〵の友とだに見給ひなば、姿もいかばかりうれしかるらん。かしこ。

關勝子

此の朝げの風は、いかに身にしむ事よ。をとつ日は、とみにまゐ上り、皆々樣をおどろかせつる我罪の深さよ。いかで〴〵、例のひろき御心に、よろづ御ゆるし給ひれ。倘、其の折には、いともいともれもごろなる御あるじまうけにあづかり、覺えずも長居をしつるなめげさ、こも、さる方にゆるしてよ。さるは、昨日、某の君と共に四つの袂を秋風に吹かせつゝ、尾花涙よる瀬の原や、むらさき匂ふきちかうの園、さては、夕日まばゆき女郎花の野邊に、入相の頃まで所定めずあくがれありき、いともをかしき逍遙をこそ仕うまつりけれ。しかすがに、風流女なる君のもの給はぬ故にか、れたくも、尾花は我々を招かず侍りしよ。餘言は扨ておき。此の一束の女郎は、昨日、其のかへさに、折りもて來つる物に侍り。まとゐにもれし君の、せめての御心なぐさみにもと贈りまゐらす。いかで、かざしになとさし給ひてんや。倘、此の花の美しくはたをやかなる君には、いづれ、あさてまゐ上り、對

面たまはろべうなむ。よろづは、其の折りにと。あなかしこ。

田尻保代子

すみのぼる月影、草むらにすだく虫の音など、やう／＼、秋のあはれを催しそめつるに、いかにかおはしますらん。春は、ひとつみどりと見し草どもの、いつしか、色々にさきいでゝ、錦織りかけたらん樣なるこそ、げに、葎が宿にはつきづきしからぬながめなれや。殊に、女郎花の、露の玉をかざしたるなまめかしき姿の、いひしらず、をかしきに。月影をやどし、君を待つらん、松虫のいといたうなきしきるも、さすがに、主の心を得たるにや。そはとまれ。かくまれ。かゝるあはれを、一人、もてはやさんも、あたらしと思ひ給ふるまゝに、二本三本、手折りてまゐらするになん。さるは、はたすゝきほにいでゝまねかれども、いはぬ色に咲きいでたるつゝましき花の色を、あはれと見給ひて、過すさぬ間に、鈴虫のふりはへさせ給はらば、秋の長夜物語に、妻こふ鹿の聲などあはせきかまほしうて、かくなむ。あなかしこ。

德永廣子

秋の露野にあそび侍りけるなりふし、千種百艸花の、いろいろときめきさけるがおほき野路を、とほくふみわけ、そゞろあるきに、露しげくたもとにかゝるを、いとうるさく思ひ侍りて、打はらはばやとふるゝ手にさへ、うつりぬらんとばかりに、にほひ香くはしく、なにとなく、ゆかしきこゝちし侍る。かなたに黄金色にさきかはしたるは、女郎花にて侍りぬ。そのすがたやさしく、名にまさるさまして、なびきつることのふかくかんぜられて、ねもいばず。只獨ながめんことの口惜くて、小庭にうつし植ゑしも、かれてたゆみがちなるつくらひもとゞきかね侍れば、見ぐるしき花姿一束、御隱居樣の御なぐさみにもと、御もと樣へ奉る。見そなはせなまはゞ、いかばかり、本意に侍りなん。あなかしこ。

佐々有鄰子

露になまめく籬のもとの一もと手をり侍れば、藤原行家の歌に、吹風にをれふしぬれば女郎花まがきぞ花の枕なりけるとあるがごとき姿なりければ、短册とり出て、鹿毛筆を、硯の淵にさしめらして、ながめ侍れど、短才のならひとして、いかに筆とるすべもなく侍れば、女郎花に、短册そへて奉るになん。金玉の御詠を承りたく候。かしこ。

高橋たけ子

計らずも、海水浴に御一所にいたし、ひるは海に浴し、夜はあの小道をたどり、螢をひつゝ、毎夜の如く、なかぜの橋まで行き、向ふにそびゆる羽黒の山の端より月出で、北上の河にうつるをながめ、たのしく暮しゝは、昨日とのみ、思はるゝに、殘る暑さもいつしか消えて、此の頃の、風、實に、秋よと覺えられ、今年の夏の樂しかりつる事を思へば、深秋のつゆけさ、一入ならんと、今より、おしはかられ申候。今日、學校よりかへり、明日の日曜なるに心ゆるみ、しらべもせで、後なる小川に行き見しに、向ふ山のかげに、尾花ほに出でゝ、招く心ありげに候ひしまゝ、妹とも打ちつれ、七草をたづねんとてのぼりゆきしに、誰がしわざなるらむ、あわれ、他のくさは、皆ふみねじられて、女郎花のみ、いとやさしうさきみだれ侍りしかば、流石のそだちよと、そゞろ、あはれをもよほされ、つゆながら四五枝手折り、持ちかへり申候。黄金の色にまがふ、よき、ながめを、ひとりうちながめもいたましくて、一二枝差上候間、文机の上の、小瓶に、さしをき、秋のあはれも共に、日々ながめられ、例の巧なる御歌などもらし給はゞ、花もさこそゝうれしう侍らめ。私も、こよなく、よろこばしう、存ぜられ候。かしこ。

八尾家子

あだひとに手折せんは心もとなしとて、山里のゆかりより、送りこせし女郎花。色さへかさへとやら、君にそものし侍らん。なまめく其の名はとがめ給はで、文机のかたはしに、しばし、はべらせたまはらんなむ、いみしき面目にこそ。

口なしのいろをたのみてをみなへし
いはぬこゝろをあはれとも見よ

桝田益子

契りおきしことも、君まつ虫の聲と共に、かれ〳〵になり侍る哉。其のほど、きこゆ侍りしひと本、色にいでゝなまめかしう、かつ〳〵ほころび初めしより、あれたる宿も、名をむつまじみ、うしとは見つゝも、ゆきすぎかぬる人のなきにあらねど、秋霧の立かくしうつろひはせなば、さすがにうしろめたく、見せまほしと思ふ心ひとつを、誰ならぬ君によせ侍りて、露にぬれつゝ、折れるばかりの、此の女郎花ぞ。穴かしこ。

色も香もうつろはぬまと女郎花露のあはれをかけて手折りき

松尾せい子

秋の野になまめき立てる女郎花と、古き歌に詠まれたれど、所せき庭の花は、先つ年、野邊よりうつし植ゑしまゝにて、手いれなど致されば、色香はさらなり、咲く頃さへ後れがちなれど、秋毎に、千草の中にまじり、蒸せる粟のやうなる花開き候事の、しほらしければ、二もと三もと御目にかけまゐらせ候。やがて、萎る身なれども、しばしだに、君が文机のほとりに、立ち侍りなん事、いかばかり、花もはゞ心地やいたし候はむと、斯のごとくに御座候。かしこ。

阪本榮子

朝夕は、おひ〳〵、冷しく相成侍るを、事なうおはしまし候哉。此の頃は誠に御物遠に打過候。さて、かれて移しうゑ候庭前の秋草、昨日今日は、やゝ時得がほなるがうちに、女郎花の風に戯る姿の、あまりに、らうたげに侍るまゝ、一枝手折り進らせ候。あはれ、御文机のほとりにとゞめ給ひて、一首の御言の葉をも御もらし給はらば、花も一しほにほひをまし候はむと存し候。かしこ。

篠田圓子

我身ひとつの秋にはあられどゝ、古人がうたひ給ひけむも、實に理りなりや。文机の上の書も讀みつくし、あらぬ事のみ思ひ浮びて、あまり徒然なるまゝ、やをら端近う出でゝ、庭の遠近を打ちながめつれば、あはれ名にめでゝ折れむばかりに、咲き匂ひぬる女郎花に、うす霧のたちかゝりて、人の見る事やくるしきとの、古き歌の思ひ出でらるゝことの、いとをかしう侍ゐ。殊更に見せ參らす程の珍らしき花にもあらぬ折から、君にも、定めて同じおもひに沈み給ふらむとて、一枝折りてまゐらすを、若し、瓶のかたはしなりと、ふたげさせ給ひなば、こよなううれしきことになむ。あなかしこ。

横山芳子

秋の野草のいとおほき田舍にすまひ候ひてより、桔梗、かるかや、女郎花、名もなき花をも友として、君と語りしふるごとを思ひ浮べつゝ、あかぬながめの其中に、古も、今も、をみなの姿としてもてはやさるゝ女郎花、今を盛りの萩こねて、いと優しう咲きそろひ候ふを、都なる君には、また、めづらしう候はんかと、一もと贈りまゐらせ候。御つれ〳〵のおなぐさみにもなり侍らば、いとうれしうなん。かしこ。

くさぐ

月雪花のみつをひとつによめる長歌

横田音羽子

春くれは、霞たつ田の、山さくら、花の香ふかく、咲きいでて、人の心も、あくれて、野行山行、玉しきの、都にちかき、をはつせや、檜原のおくも、春くれて、七日こもりの、かへろさの、袖にしつろゝ、はなの雪、ふりせぬほとに、いつしかも、秋にしなれは、住の江の、あら、松原、廣澤の、池の汀の、月のかけ、袖ふりはへつ、冬されは、比ゐのねおろし、身にしめて、さか野のあたり、あらし山、雪見たわれて、おもふこと、なへてくらしつ、九重の、都にすめろ、身を幸にして。

鹿

さをしかの聲もかすかにきこゆなり
　とほくたひれのあかつきのそら
　　　　　　　　　　　　　柵田まち子

師の君を思ふ

學びやにのこしおかれしなでしこは
　つゆのめくみにはなさきにけり
　　　　　　　　　　　　　田中たちい子

亡き師の君を思ふ

今日あすとたのみし花はちりにけり
　また來むはろをまつそかなしき
　　　　　　　　　　　　　同

松島にゆきて十五夜の月をよめる

ふくろたになみ風さひしまつしまの
　こよひの月はたれにみせはや
松しまのなみふゆられて行ふれは
　きしまてをくれ秋のよの月
　　　　　　　　　　　　　横田秋子



宮嶋＝危機一髪

大欽冬

一体、名所古跡抔を探ぐるときに、見ぬ先きの想像が過ぎるもので、此處と云へば、ソーかと失望するは、珍しからぬ談しである。予は、かねて、之を承知して居る筈ぢやが、昨夏、宮島に遊んで、矢ッ張、例の歎聲を發せざるを得なかつた。乾燥無味なる藝備の山川を見た眼で、宮島に行くと、滿山老樹欝葱といふ譯で、四五丁先きの海上（此處は小蒸滊にて往來す）から、全島を眺めたときには、丸で別乾坤の感を生じた。處が、近づけば

近づくに随つて、頓に趣味を減じ、その市街といふ所を通るに及んで、愈々失望して了つた。此處を見たものは、恐らく、何人も異議はあるまい。

上陸早々眼を掠めたものは、何であつたかと云ふと、先づ、穢ならしい水菓子屋、怪しき飲食店、殺風景なる雜貨店、若くは、旅人宿の類のみであつて、丁度小川町、又は、銀座邊の夜店よろしくと云ふ鹽梅であつたからだ。ソレに、此處に來る華客の多數は、例の水兵、日頃、軍艦で飽いて居る例の水兵で、一旦上陸と來れば、何の遠慮もなく、飲んだり、食つたり、躍つたり、跳ねたりするから、之は、ドウヤラ宮島の風景と、調和することが出來ないやうに思はれた。

宮島は、周圍七里餘もあるさうだが、嚴島神社、及び市街の在る處は、島の一角で、山勢逼迫、人家、皆崖に倚り、水に瀕して建つて居る。デ、遠景の古雅愛すべきに引換へ、内は、隘いのと穢ないので困つた。尤も、神社は、古色蒼然として、何となく床しき所あり。結構一種の特色を備へて、羈客の同情を惹かないと云ふことはないが、將來此の神社を保存して、廢頽の虞なからしむることは考へものだらう。宮島より嚴島神社といふものを除いたら、殘るものは、唯だ木石ばかりぢや。

當時、廣島豫備病院から、此處へ、轉地療養者を遣つてあつた。予は、豫ねて、之を知つてるから、不取敢、慰問に出掛けると、その本部は、山腹に在る一古刹、光明院と名づくる處にあつて、戸田と云ふ軍醫が、患者を監督して居つた。因つて、予は、軍醫に面會して、先づ、來意を告げ、尋いで、種々の雜談を試みた。

此の時、宮島に在りし患者は、約三百五十名、之に對する看護人が二十六名、之を四ヶ所に配置して居ると、軍醫は語られたが、いづれも、經過良好であると聞いて、予は、衷心悅んだ。且つ軍醫は、語を繼いで、此の地の晝夜、温度の變換酷だしき事。濕氣多くして、脚氣患者に對し、不良なる事。數年前までは、宮島に、蚊が居らぬとて、島人、大に誇つてあつたが、近年、ソロ〳〵唸なり始めたのは、全く、杓子のお蔭だ抔といふことを懇々話された。デは、杓子と蚊とは、ドンナ關係があるやと問ふと、軍醫は、微笑を洩らして、杓子の原料には、材木を永く海中に浸し、之が自然腐蝕して、蚊を產するものならんと云はれた。」訪問やら、見物やらで、予は、到頭一日を宮島に費やし、翌日、廣島に歸つたのはよいが、歸途、偶然駭くべき一椿事が起つた。廣島と宮島間の距離は、丁度、東京と横濱との間位で、汽車で一時間足らずの處である。この近距離の地で、ソンナ椿事が起つてたまるものかと、思ふ人もあらうが、之は、全く事實だ。文明の利器と、相伴ふ一種の危險である。

予が乘れる列車は、宮島を發すると間もなく、俄かに、非常汽笛を鳴らした。スハ大變と、乘客、皆、外を見たが何んにもない。列車が、ヤット進行を停めやうとすると、一少年が、茫然として路傍に佇つて居る。此の時、忽ち機關士が、大聲を揚げて、『線路に妨害したのは、其の子供だ、直ぐ摑へろ』と、二三回呼ぶのを耳にしたが、手に汗を握つた乘客は、之を聞いて、皆、ホット安心したやうであつた。

新聞を見て居ると、石が汽車の窓を割つたとか、鐵砲丸が硝子を貫いたけれど、幸ひ怪我がなかつ

たとか、云ふ記事が屢々出る。殊に、轢死なんと來たら、毎月幾人あるか、算へ切れぬ程である。この上より云へば、汽車は、實に危車だ。之が取締は、極めて必要である。サテ、車掌は、逃げんとする少年を捉へて、無理に列車に乘せ、次の停車場に着車するや否や、之を驛長に引渡した。後の處分は、如何あつたか、予は聞き得なかつたが、彼の少年は、實に、臼の如き巨石を軌道に横へ、大胆にも、列車の顚覆を企てたのであつた。ア、危機一髪!。

天津籠城中の鄭夫人

森林生記

前の天津駐在帝國領事鄭永昌氏の夫人は、名を濱子と稱へ、沈毅貞淑にして、夙に賢婦人の聞え高き人である。同夫人は、昨年良人と共に、天津に居らるゝと、計らずも、六月頃より團匪の事變が起り、月の半ばに至つて、居留地は、遂に、匪徒の砲撃を受けるやうになつた。この時、我が領事館に難を避けた日本婦人は、十何名といふものであつたが、是れ迄、見もせず、聞きもせざる劍光砲聲の爲め、膽を奪はれて、誰一人役に立つ者はない中に、獨り鄭夫人のみは、良人の股肱となつて、泰然公私の務に從ひ、時に避難の姉妹を勵まし、時に負傷せる兵士を扶け、時に憐むべき支那婦人を救ひ、その他、炊事に、看病に、監督に、實に、盡し得る丈けを盡して、毫も遺憾なかりしのみならず、之が爲め、日本婦人の名聲を、大に、各國婦人の間に發揚したと云ふ事である。その苦るしさ、その勇ましさ、その熱誠、その決心、一として、

日本婦人の龜鑑たらざるものはない。其の筋でも、夫人が、事變中の功績著るしきものあるを認め、今回、畏くも、勳六等に叙せられ、寶冠章を賜はつた。我が邦にて、皇族を除く外、此の如き貴き勳章を授つたのは、實に、濱子夫人が初めてであるさうな。で、本誌は、今度、同夫人に請ふて、天津籠城中に於ける偉勳の一班を掲げ、讀者諸孃に、活きたる模範を示すこととした。願くは、世間の稗史小說抔と、之を混ずることなく、熟讀玩味した上、よく自得されんことを望むのである。

抑も、天津に於ゐて、清兵が、各國の居留地を砲擊し始めたのは、昨三十三年六月十七日のことであつて、此の時は、未だ、我が日本兵は、海軍の陸戰隊が、百三十名位しか居ませんし、各國合せて、三千足らずの兵を以て、廣い居留地を防がなくてはなりませんから、隨分、心細ひことで厶いました。領事館に居らるゝお人們も、頗る御心配なされて居ると、其の中に敵の砲擊は、愈烈しくなつて參りまして、彈丸は、我が日本の領事館へも、屢々落下破裂致しますから、實に、危險至極で厶いますし、十數名の籠城婦人の中には、懷姙をなされて居るお人もあるゆへ、濱子夫人は、良人に向ひ、

「良人、妾しは厭ひませんが、外の御婦人們に、お氣の毒でありません。殊に、身重の方もありますゆゑ、婦人だけを、彼の椽の下へ、一時お入れなすつたら如何でせう。其の中に日が暮れたら、此の樣に烈しくは打まいと思いますから。」

鄭領事「爾じや。已れも今そう思つた所じや。では、彼處へ、先づ身重な婦人から入れるが好い。」

と椽の下に穴がありまするが、是は、種々な不用なものを入れおく穴で厶いまして、其れへ、一時、婦人小兒を入れましたが、中々それでも危險ですから、濱子夫人も、お困りになつて、殆んど、策に盡きて居りまする。スルと、青木中佐が御越しになりまして、

青木中佐「如何です鄭夫人。隨分烈しく來ますナ、アハ、、、、流石に貴女は、穴へお這入りになりませんな。」

濱子「ハイ、妾しは堪へて居りますが、外の御婦人們が………。青木さん。何處か、モッと堅固な所へ、避難するやうな場所は厶いますまいか。」

青木中佐「サア、其の話で來たです。貴女だから、隱さずにお話ししますが、今の有樣では、迚も長く持堪ふることが、出來まいと思ふですて、爰、一兩日の中に、太沽方面から、救援軍が來て吳れば助かるが、それでないと………。此れは、外の御婦人には、お話し出來んです。唯、貴女の腹の中におゐて貰ふだけですが、支那兵も、日清戰爭以來、中々强くなつたし、又、彼等を指揮する隊長等も、餘程、比較的戰術に長けて來たから、若し彼等にして、大擧突擊して來るやうなことがあると、如何も、現在の兵數では、頗る危ないのです。」

濱子「では、突擊して參るやうすが厶いませうか。」

青木中佐「それは、未だ、確かとは分らぬですが、大砲を恁う猛烈に擊つておゐて、其の下から突込んで來ると云ふことは、戰術上にあるです、支那軍人のことじやから、其の樣な巧みなことは、行り得まいとは思ふですが、併し、又行らぬとも限らんですから、そこで、種々評議の上、英國の工部局を以て、最後の防戰所と決定したです。それ

で、各國とも、婦人子供などは、大概此方へ移すやうにしますから、貴女は、日本婦人を殘らず連れて、情願、工部局へ行て下さらんか。」

と斯くの如く青木中佐が云はれるので、濱子夫人は、鄭領事に其の通り語らるゝと、領事も

「其の方が宜しかろう。英國の工部局には、堅固で大きな穴藏があるそうだから、それへ這入て居たら、大丈夫じやろと思ふ。」

濱子「けれども、外の御婦人だけは、穴藏へお入れ申しても、妾しだけは領事館に居たう厶います。」

鄭領事「何故……。」

濱子「何故と被仰つて、外の御婦人方は兎に角に、妾しは、領事の妻、それが未だ、危急に迫つたと云でもないのに、領事館を逃出して、他國人の家へ行たとあつては、第一、本國のお人們に聞へて面目ないし、又、女が殘らず外へ出て了つて、一人も領事館に居なくなつては、萬事につけて、不自由だろうと思ひますから、是非妾くしは、領事館に居て……。眞逆、妾しが女だてらに、鐵砲を以て、働くと云ふことは出來ませんが、負傷者でも出來ましたときは、切めて、看護でもして、女だけの義務を盡したいと思いますは。」

と、今に始めぬことながら、濱子の雄々しき決心に、鄭領事は、我が妻ながら感心して、暫し無言で居られましたが、良やあつて、

「成程。お前の氣象として左もあろうが、併し、お前が行かないと、他の婦人も遠慮して居て、必ず行くことでない。皆、領事館に居ること、なつては、スワと云ふ場合に、足手纒ひになつて困るから、是非婦人を殘らず連れて、一時移つてお呉れ。お前の氣質は、誰れて知つ居るから、領事館を逃出したなどゝ云ものはない。」

と、云つてる所へ、又、青木中佐も、入來りて、共共勸めました、そこで濱子は、暫し考へて居ましたが、稍やくに決心して、

「それはどまでに被仰るに、聞入れぬと云ふは、却つて、妾しが惡う厶いますから、では兎に角、仰せに從つて、一時、皆さんをお連れ申して參りませう。」

と、是から十餘名の婦人方を勵ましつゝ、英國の工部局へ行つて見ますと、成程、各國の婦人小兒が、澤山に避難して居ますが、何れも皆悄然として、中には涙汲んで居る婦人もあります。

工部局は、中々廣いのでありまして、其の内に芝居小屋がありますが、その舞臺も、棧敷も、諸外國婦人が充滿して居ります。

濱子は、一同に向ひ、

「皆さん。外國婦人の見て居る中ですから、情願、お心を確かに持つて、日本の耻にならぬやうにして下さい。」

と、諭しながら、自分が雄々しく擧動つて見せますゆへ、是に勵まされ、一人として、女々しき卑怯なことを云ふものはありません。濱子は、一同を工部局の穴藏へ入れておいて、そうして、自身は、又、領事館へ歸りますと、領事館は非常に混雜をしております。何故、此樣に混雜をして居るのかと思つて見ると、それも其の筈で、モウ此の時、負傷水兵を續々と擔架で運搬んで參りました。

（未了）

附言　鄭夫人の肖像は本誌次號の口繪に掲ぐべし

談話の鍊習

田山とり子

言語の鍊習をいたしたいと存じまして、おわかい方々と、籤をひいて、題をとり、一日おはなし會をいたして試ましたが、なか〱、面白いおはなしが御座りました。その一ッ二ッをさしあげますから、樂園欄へなどしかるべく。目的は、敬語の用法を正しういたしたいと存じましたので御座ります。

（一）思もかけず故郷の人に遇ふ　　さう子

ヲヤ、貴嬢は木村樣でいらッしやいませぬか。いつ御上京遊ばしましたか。御家内皆樣御一所に。左樣で入らッしやいますか。たいそう御身おほきう御なり遊ばしたので、御見外申すやうで御座います。前もつて御報知下さいませぬので、吃驚いたしました。御國の皆樣は、御達者にいらッしやいますか。左樣で御座いますか。まことにこの樣なうれしいことは御座いませぬ。種々、皆樣の御上も御伺ひ申したう存じますし、むさくるしい家では御座いますが、御繰合なさられますなら、直ぐ近所で御座います。どうぞ、御寄下さえませぬか。母も、めづらしい御方にお目にかゝたら、どんなに喜ぶことで御座いませう。サア。道路が惡うございますので。

國に居ります時分は、たのしう御座りましたネ。休日毎には、方々へ御一所にまゐりまして、面白う暮してをりましたが、御別れ申してからは、ただ、御手紙のやりとりばかりで、御目にかゝることも出來ませず、文の上では、どんなに面白いたのしいことでも、それほどには感ぜられませぬでしたが、この樣に、また幸、同じ土地に居るやうに

ありましたから、國に居りました頃とかはらない樣に御交際ねがひませうネ。御話して居りますうちに、最早まゐりまして御座います。まことに、むさくるしい宅で御座いますので。サア、どうぞ、此方へ御上くださいましな。

とり子曰はく、さぞ御うれしいことで御座いましたらう。御母樣もさぞかし御喜で御座りましたらう。これからの、御三方の御物語、マアどなんに樂しいことでございませう。おさしつかへなくば、うかゞはして頂きたう御座ります。

寶笑百話

與太生

（一）はじかき

緒言では御座らぬ。時候の故か、とかく頭の方へ來たがッて、いらぬことに、にごり點までが、一ツあがッて、はじかきで御座る。ナニ、假字が違ふ。耻なればハヂでなればと仰しやるのですか。貴君でもない。これ即ちはぢかきたる所以ありで御座ります。

實のところ、度々御辭退申上げたのです。如何仕りまして、卑下慢なんて、左樣な野氣のあるものでは御座りませぬ。然れば、原稿料の次第によつて。とは又、あまりに御情なき御言葉。眞實生等ごときものゝ書いたものが、御益に立つことがあるといたしたところで、報酬なければなんと〳〵、貧乏にこそ仕れ。與太生さほどまでに墮落いたしませぬ。記者足下から、樂園へ何かと、しば〳〵の仰、下手のよく好とやら、ぬたと申すものは、一兩度、手前から御願申上げましたことも御座いますが、その外に、御願の出來さうなものは、ど

うも。

しかし、人世意氣に感ずれば功名また誰が論せんです。孔明の樣な不性な方でさへ、三度めには三分一の成効に滿足をすゑて、草廬を飛出したと申しましたもの。かうめいても江戸ッ兒で……。イヤ早、めいが御耳にとまりましたか。いちで、國語のなまりはなほりますまいと、先以て、はちかくこと件の如し。

（二）火事場の狼狽

溺死人もコザろ
ナント名案を聞いては下さいませぬか

神田の大火事の時のことでした。むかしは、火事を江戸の花だと申したさうですが、飛んでもない花のさかりが、二日二晩とつゞいた。西へも東へも北へも南へも、八里四方、八百八街、百三十萬の市民、ひのこの飛ばぬ地もなく、煙にむせばぬ人もない位。花の江戸も、如何に散つて終ふとぞと、心あるものは、皆心配をして居る中に、二の大火事九段の兵營の門前の土場にあがッて、心ないものもありましを又、見物仕らうといふ、その見物人の間に起つた珍談ですが。仰にやた。及ぶべきです。左樣な不心得なものでもの。どうせ滿足なことでは御座いませぬよ。

甲君、實に能う燒けるな。ソリヤ彼處へも燒えあがッた。ソリヤ彼處へも。ソラ又彼處へも。イヤ容易に此の火事は終まるまいて。どだい、井戸の水や、泥滯の溜水などで、この火事を消さうといふのが無理ぢやよ。琵琶湖の水を遠慮なく持ッて來て、ぶッかけて見玉へ。直に消えるぢやが。

乙贊成々々。あれだけの水なら、たしかに消えるよ。其處へ氣が付かぬといふは、人間といふも

のも、案内外愚なものばかりぢやあ。
甲イヤッ、突方もないところから、ブシ上ッたぞ。
もう淺草方面まで擴がッた。ア、己みあん己み
なん。
と、しきりに長大息する圖端に、足端を失ッて、
土堤の上からコロ〳〵〳〵、彼の深い牛ケ淵
の中へザンブ。少しも、水練の心得がないと見え
て、しきりに、もがいて居る。
乙エ、失敗ッた。君待ッて居玉へ。北海道の漁場
には、非常に潜水に達者なものの居るッてから、其
を頼んで來てやるから。
何と御信切な者ぢや御座いませぬか。牛ケ淵に溺
ッた友達を助けるために、上野の終列車に乘込ん
で、北海道へ出立したさうでした。
火事は、幸、其の夜の中に鎭火ッたが、彼の消火
の名案を考得た甲某は、この鎭火の事實を、萬劫
末代知ることが出來ないといふ不幸を贏け得たの
であッた。

(三)奥様の新經濟論

おさんどんの辭職
アラいやだワ先月の御給金がマダ
さがらなくッてよ

奥様 貴方。御米を一等米にいたして宜しう御座い
ませう。どういたしても、其の方が、經濟で御座
いますよ。イッもの三等米で御座いますと、おい
しい御菜が御座いませぬと頂戴できませぬので、
まことに不經濟でございますが、一等米にいたせ
ば、お香の物が、御干魚の一二枚もあれば、おい
しう頂戴できます。其の方が餘程經濟で御座いま
す。
旦那様唯々として之に從うたはよかッたが、永年
忠實につとめて居ました飯炊のお何どんは、突然

辭表を呈出して、宿元へひきさがッた。小間使のお誰には其の理由を話したらしいが、申上げにくいことでゝもあらうか。奥様にたづねられても、一向存じませぬが、とにかく、生意氣で氣の早い人で御座いますなど丶申して居りました。

はじめて一週間ばかりは、御飯ばかりでも結搆ぢやと旦那様は喜ばる丶、奥様は、ネイ貴方、この方が、よッぽど經濟で御座いませうと得意がる。

二週間ぐらゐのところで、何事も、この調子でなければ經濟といふものは立ちませぬよといへば、旦那様は、左様々々と、無障に嬉しがッて居らしやッた。

三週間四週間日を經るに從がッて、新經濟論の勢力は、非常に擴張されました。

諸道具も、よいものを買うて大切にした方が經濟、衣服も上等の品で仕立て丶大事にした方が經濟です。と、何につけかにつけ此の主義の主張に、六十圓や七十圓の月給では、さすがの旦那様も、ポッケット保護の必要を感ぜざるを得ざる時も出來たので、いさゝか躊躇の色をあらはすことも分りましたが、左様いふ場合には、

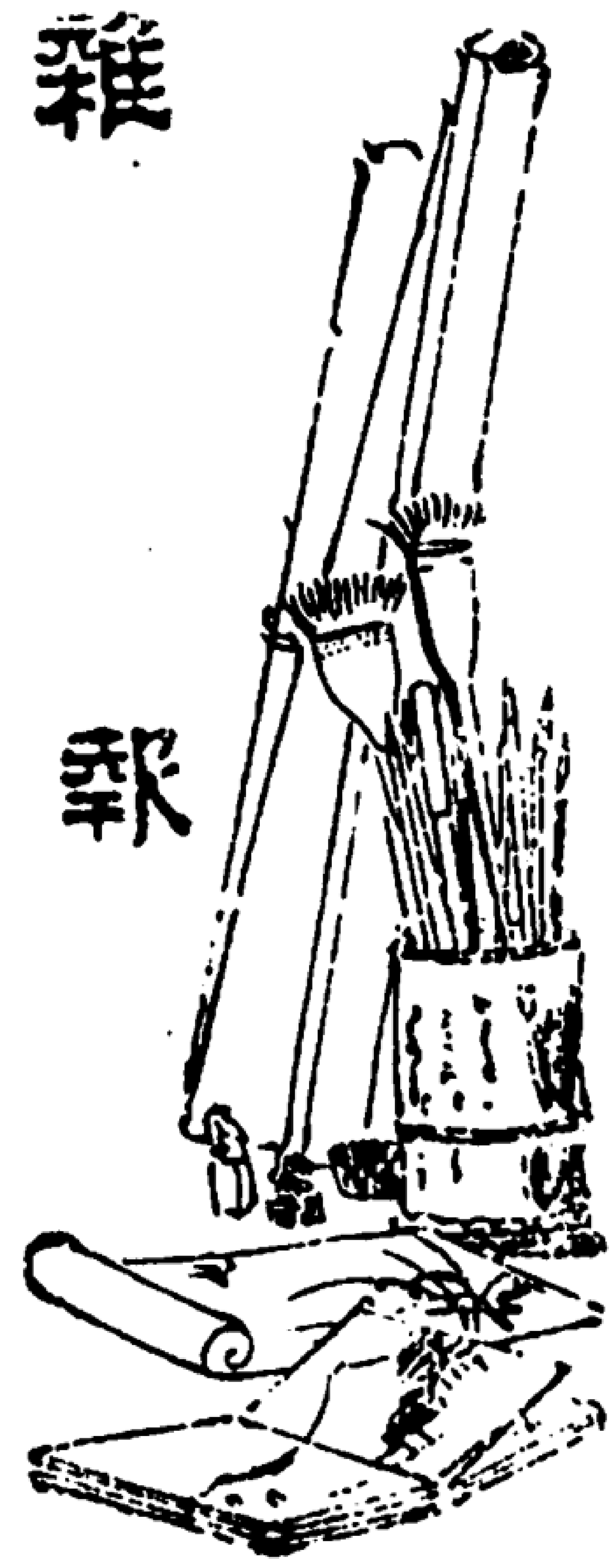
　やすものがひの錢うしなひと天保のハイカラアさへこの主義を認めて居るでは御座いませぬか。明治の新敎育をうけられた貴方に、これぐらゐの道理が、まだ、御合點なさることが出來ませぬか。

と、その氣焔遂に當るべからずになッてしまうた。

五月六月と經ちますと、いくら一等米でも、お香物では我慢が出來なくなりました。ヤレ天麩羅、ソレ鰻、八百膳の御料理が結搆です。メトロポールの西洋料理は帝國ホテルのよりはおいしう御座

りますなど丶、遂には、うつくしい衣服を着かざッて、土曜日曜は何家彼樓の遊食三昧。こゝにいたりて、小間使お誰どん嘆じて曰はくです。

ホントウにお何どんは、えらい人だッたワ。この月で四月お給金さへいたゞけない上に、お香物ばかりで三度の食事。經濟とやらいふものは、人をやせらす御禁厭か知ら。



雜報

紫雲靉靆

●靖國神社落成式　九段の靖國神社にては、建築委員より社務所へ引渡し濟となりしに付き、去る五日午後一時より、之が落成式奉告祭を執行したり、其の次第を聞くに

早旦より本殿拜殿等を裝飾す、神職本殿に昇り席に付く、次　開扉宮司奉仕主典二名從ふ此間着座の諸員平伏、次　獻饌禰宜主典奉仕、次　奉幣宮司奉仕、次　祝詞此時着座諸員一同平伏　次　禰宜主典拜禮、次　撤饌禰宜主典奉仕、次　閉扉宮司奉仕主典二名從ふ、此時着座一同平伏、次　退出、神職及參列諸員拜殿に昇り席に付く、次　淸祓を修す、祓詞を讀む間着床の諸員起立、次　玉を拜殿の四角に懸く、宮司奉仕、次　神酒切木綿を拜殿の四角に懸く、禰宜主典奉仕、次　神饌所奏樂所廻廊等の四角同上、次　祝詞を申、宮司奉仕、此間着床諸員起立　次　右畢て退、

又、今度の建築費は、總額十七萬八千五百圓にて、其の内寄附金は、僅か三千六百四十三圓四十七錢に過ぎず。內多額の寄附者は、相撲協會三千圓、陸海軍一等軍醫三十圓、士官候補生十六圓等ありと。尙十五日頃より、境內取締りとして、遊就館最寄りへ巡査派出所を設くる筈なりき。因に、來

月大祭は、一日より擧行し、一週間の見込にて同係委員長には、野津陸軍大將、委員には、陸海軍將校數名任命あるよしなり。

●臺灣神社御鎭座式唱歌　本月二十七日、臺北にて、擧行せらるゝ鎭座式の節に用ゆべき唱歌は、「にぎみたま」と題し、高崎御歌所長の作歌、芝樂師長の作曲にて、左の如しといふ。

第一章

おほみ心を心とし　我が高砂の民草を
そだてつちかひおしなべて　開化の露にうるほわせ

第二章

文明の花咲せむと　竹の園生の御身もて
兵士と共におきぶしゝ　野をわけ山を踏さくみ

第三章

劒ぎの風にくしけづり　矢玉の雨を身にあみて
瘴烟毒霧に犯されて　將星光りをかくしけり

第四章

あふげば高き宮ばしら　むかへは淸きます鏡
この民惠みさきはへて　鎭りませるにぎみたま

●天覽の近衞機動演習　近衞師團秋季小機動演習擧行に付、大元帥陛下には、はや行幸仰出されしことなるが近衞第一步兵旅團は七日頃出發し、數日行軍、續きて、野外演習を行ひつゝ集合し、次で、旅團對抗演習を天覽に供する筈にて、其の日取は左の如し。

五日より九日迄	行軍演習
九、十、十一、十二、四日間	野外演習
十三日	休業
十四、十五、十六、三日間	聯隊對抗演習
十七日	休業
十八、十九、廿、三日間	旅團對抗演習
二十一日	休業
廿二、廿三兩日間	假設敵師團演習

●高崎行幸供奉　大元帥陛下には、近衛機動演習地へ行幸あらせらるゝに付き、十二日、左の如く供奉仰付られたり。

侍従長侯爵　徳大寺實則
宮内次官男爵　川口武定
侍従武官長男爵　岡澤精
侍従侯爵　廣幡忠朝
宮内書記官　丹羽龍之助
侍醫　桂秀馬

右の内、侍従、侍醫、侍従武官數名にも、供奉仰付られ、内事課よりは、井上、金坂兩屬、隨行命せられたりといふ。

●東宮殿下の葉山行啓　皇太子殿下には、御豫定の如く、十二日午後三時廿五分、新橋發汽車にて、葉山御用邸に行啓あらせられたり。供奉仰付られたるは、高辻侍従長、村木武官長、本居侍講等にて、有栖川宮威仁親王殿下にも、當分、同地御滯在の御豫定にて、御同行相成られぬと承りぬ。

●東宮御參内　皇太子殿下には、葉山行啓の御暇乞として、十二日午前十時、東宮御所御出門、高辻侍従長御陪乘、村木武官長、其の他の供奉にて、御參内兩陛下に、御對顔あらせられ、種々御物語の上十一時五十分頃、御退出相成りたりとぞ、

●東宮殿下御調度輸送　皇太子殿下葉山行啓に付、主馬寮よりは、十一日午前十時廿分、新橋發車にて、御召馬車一輛、馬匹五頭、御料乳牛二頭長持二棹を、同御用邸に輸送したりといふ。

●迪宮殿下御箸初の御祝　皇孫迪宮裕仁親王殿下は、益々御壯健に渡らせられ、昨今の御體量は一貫七百二十餘匁あらせらるゝとぞ。尚、去る八月二十八日は、殿下の御降誕後百二十日に相當し

たるを以て、所謂御箸初の御祝を行はせらるべきのところ、當時、日光御旅行中なりしを以て、御延引相成りしが、去る五日其の祝儀を擧げさせられしが、其の御次第を承るに、殿下には、當日正午、三の膳附の御鄭重なる御膳部に着かせられたる後、川村伯夫妻、加藤、木内兩侍醫等供奉して、宮中に御參内、兩陛下に御對顔終りて、賢所に御參拜の後、青山御所へ御參候、皇太子幷に同妃兩殿下に、御對顔あらせられたまひしと承りぬ。

また、迪宮殿下より御贈進の御品々は、

天皇皇后兩陛下へ	生鯛一荷宛
賢所へ	生鯛一臺
皇太子同妃兩殿下へ	生鯛一臺宛
常宮、周宮 富美宮、泰宮 各殿下へ	生鯛一臺宛
有栖川宮殿下へ	五種交魚一折
九條公爵へ	五種交魚一折
中山一位局へ	三種交魚一折
柳原權典侍へ	三種交魚一折

ありとぞ。

●御養育主任等へ御下賜　去る五日は、迪宮裕仁親王殿下御箸初の御祝日なりしに付、天皇、皇后兩陛下、東宮、同妃兩殿下より、御養育主任川村伯夫妻、其の他各御用掛、侍醫、御乳人等に對して、夫れ〲御下賜品ありたる由。

●皇族講話會　有栖川宮、久邇宮、梨本宮三殿下を始め奉り、川口宮内次官、中村陸軍、齋藤海軍兩總務長官、九條、三條兩公、廣橋、齋藤、長崎、稻葉、小藤、日高、桂等各宮内官、林、大庭、坂本、伊集院の陸海軍將校、關主事諸氏は、一昨夜七時より、靈南坂なる帝室制度調査局樓上に參集し、皇族講話會を開き、穗積博士の憲法講義、坂本大佐の無線電信の講話あり。同九時散會したりと云ふ。

●閑院宮殿下　先頃、信州地方より御歸京あら

せられたる閑院宮載仁親王殿下には、去る九日午前十時過御參內、天皇陛下に御對顏あらせられ、御旅行中の御物語せさせ給ひ、正午前御退出夫より午後六時十分新橋發汽車にて京都へ向け御出發相成りたりといふ。

●北白川宮妃殿下御出發期　故北白川宮妃富子殿下には、田中家令、高野、樋口兩家從、及び、侍女數名を隨へさせられ、廿日午前九時二十五分新橋發汽車にて、横濱に向はせられ、同港より淺間艦にて、御渡臺あらせらるゝやに承はる。

●閑院宮殿下の博覽會敷地御撿分　第四師團秋季演習御見學の爲め、大阪に赴かせられたる閑院宮載仁親王殿下は、同地御滯在中、廿一日より廿三日迄の間に於て、第五回內國勸業博覽會敷地を、御撿分あらせらるゝ旨、御沙汰ありたるに付、農商務大臣秘書官織田一、文部省技師久留正道兩氏、御案內の爲め出張を命ぜられ、織田氏は、十七八日頃出發和歌山に立寄り、夫れより大阪に赴く豫定なりき。

●北白川宮殿下御銅像工事　故、北白川宮能久親王殿下の御銅像は、近衛師團司令部の發起に係り、目下、砲兵工廠にて鑄造中なるが、本年一杯には、竣工すべき見込にて、建設地は、最初、日比谷公園地との議ありしも、畏き邊りの御思召もあるやにて、目下、尙未定なり。同像は、臺灣御征討中、馬上臨戰の御姿を實寫し奉りし者にて、御體御乘馬及臺ともにては、非常の大銅像なるが、其の材料一切は、古河市兵衛氏の寄附したるものなりといふ。

●天盃下賜　森、櫻井、山地の各子爵、及、渡邊千春其他六人の華族は、去る十一日午前十時三十分、宮中に於て天盃を下賜せられたりとぞ。

●拜謁　清韓兩國沿岸より、歸朝の霓乘組員、海軍少佐竹内次郎氏、外一人、及び過日歐米各國より歸朝の、松平賴親、渡邊直道の二氏は、去る十日午前十時三十分拜謁仰付られ、又、海軍中尉脇田正太郎氏外一人は、去る十一日午前十時三十分拜謁仰付られたりといふ。

●久邇宮御出張　邦彦王殿下は、八日、近衛師團機動演習の爲め、埼玉群馬兩縣下へ、御出張あらせられたりとぞ。

●元雇外國人の敍勳　曩に、滿期歸國したる、元東京帝國大學法政學部敎師、佛國人、ジヨルジユ、アッペール氏は、今回、三等瑞寶章を授與せられ、外務省を經て、本人へ送付の手續わりたりといふ。

●献上電話機の御嘉納　遞信省高等官判任官、及び傭外國人等一同より、御慶事祝賀の爲め、東宮御所に奉献したる電話機は、本月二日關書記官捧持、東宮御所に參候し、三日、更に川口技師と共に參候したるに、殿下には、親しく謁を賜はり、高辻侍從長、村木武官長、中田主事等を隨へさせられ、大廣間に於て、右電話機の御覽あり。種々の御下問に對しては、關書記官、川口技師と共に、詳しく御説明を言上したるに、殿下には、最とも御滿足の旨、御言葉を賜りたりと承りぬ。

●林子爵の參內　富美宮、泰宮御養育主任林子爵は、八日午前十一時頃參內、兩內親王殿下の御近況を奏上し、幷に、富美宮御誕辰に、御祝儀を賜りたる御禮を言上したりといふ。

●臺南陳列所　故北白川宮能久親王殿下の御出征中、大患に罹せられたる臺南旅團將校集會所には、故殿下の紀念物たる御病床、及び御椅子、其の他御手廻りの物品を保存しわりて、入口に鳥居

を建て、且、其の附屬舍を以て、敎育部、勸業部、農事部と爲し、種々の物品を陳列し在る由なり。

●陸軍將校合祀仰出　前號報道せる楢原陳政、兒島正一郎、中村秀次郎、牧庫一郎、杉山彬、五氏の外、昨年の清國事件に關する戰死者、陸軍步兵少佐服部尙、外三百五十二名、及び、臺灣守備隊土匪、討伐中に於ける戰死者、陸軍騎兵特務曹長登米麗路外九名、靖國神社へ、合祀仰付らるゝ旨、昨日仰出されたりとぞ。

●近衞師團總代の渡臺　臺灣神社大祭に付、近衞師團よりは、參拜總代として、故北白川宮殿下の副官たりし陸軍步兵大尉伯爵久我定謨氏を派遣することに決定し、同氏は、德川家達公、德川達孝伯等と共に出發すべしと云ふ。尙、同師團より臺灣神社へ献上の品は、未だ調製せられざるを以て、今回は、單に目錄のみを捧呈する都合なりと。

綾羅錦繡

●篤志看護婦人會　日本赤十字社篤志看護婦人會は、十一日午前十時より、本社に於て幹事會を開き、大會の件に就て、協議する所あり。結局、來る廿九日午後七時より、鍋島侯爵邸に開會する事に決し、引續き午後二時より、例會を開きたり。列席者は、小松總裁宮同妃、閑院宮妃各殿下を始め、會長鍋島侯爵夫人、以下各幹事、其の他五十餘名にして、山下講師の治療介補に關する講義、及び、繃帶術實地演習等ありて、午後四時散會したりと。

●感ずべき少年　目下、東海道筋を遊說中なる報効義會の郡司大尉が、去る七日、名古屋末廣座にて、幻燈演說を催ほし、熱心に占守島の現在將來に就て演說をなし、旅店中村屋に歸りしに、間

もなく、十五六歳なる少年の面會を求むるものありたれば、大尉は、座敷に通して面會したるに、少年は、生は伊勢の產にて、目下は、某將校の許にありて勉强せるものあるが、今夕の御講話を承はり、實に感奮に堪へず、甚だお耻しきことなれども、占守の小學校生徒に、鉛筆にても贈りたし、お届け下さるべきやとて、二十錢の銀貨を差出したれば、大尉は、大に感じて「御好意誠に難有く、之れを屆くるいと易けれども、寧ろ、書面に認め、東京支部に宛て送附されたし、占守小學にては、內地小學生よりの慰問狀など一々保存し、生徒に示す樣になり居ればとて、之れを返せしに、少年は、然らば其の手續に致すべしと答へ、引取りたりと。大尉も、いたく此の少年の赤心に感じ、爾來訪問者ある每に、語り居れりとぞ。

●奇特なる納豆賣　四谷鮫橋谷町一の二十三、長井幸次郎(六十)は、妻マサ(五十八)との間に、菊吉(十五)を頭に、八才と三才の三子を擧げ、幸次郎の納豆賣と、マサの煙草卷にて、辛くも其の日を送り居しが、不幸にして幸次郎は、六月頃より腦神經病を發し、床に就きしより、菊吉は、成人しき氣を起し、每朝納豆を賣り步き、父が働にも增して收入を得、母をして、活計の憂なからしめ、父を看護し居るといふ。奇特の事といふべし。

●支那人の孔夫子祭　去る九日は、孔子二千四百五十二年祭に當るを以て、橫濱に於ける淸國人は、一般に休業し、朝來國旗を揭げて、例年の如く盛なる祭典を爲さんとて、午後三時中華會館に於て式を行ひ、夫より宴に移りたる由。同日大同學校には、名譽校長犬養毅氏來臨し、同校生徒は、唱歌或は體操等を爲し、市内は、至る所に球燈を吊し、爆竹を鳴らしたりと。

●第二回米作豫想　本年米作に就ては、曩に、第一回の豫想を(八月二十五日二百十日一週間前)報告せしが、其の後、概ね氣候適順生育佳良にして、適々虫害を被りたる地方ありと雖も、驅除其の宜きを得たるを以て、格別の被害なく、反て、第一回當時の景況より增收の見込あり。今、別表(九月廿四日秋分)に就て、其の景況を見るに、本年の米作は、四千六百十萬餘石にして、前年に比し、一割、平年に比し、一割三分六厘弱の增收あり。之を既往十ヶ年の實收に徴するに、三十一年に次ぐものゝ如し。

米作累年比較

明治二十五年	四一四二、九六七六
同　二十六年	三七二六、七四一八
同　二十七年	四一八五、九〇四七
同　二十八年	三九九六、〇七九八
同　二十九年	三六二四、〇三五一
同　三十年	三三〇三、九二九三
同　三十一年	四七三八、七六六六
同　三十二年	三九六八、八二五八
同　三十三年	四一四六、六七三四
同三十四年豫想　第一回	四四七七、四九九〇
同三十四年豫想　第二回	四六一〇、六〇七一
平年	三九八四、五〇三八

平年とは、三十三年より七ヶ年前に遡り、其の內、最豐(三十一年)最凶(三十年)の二ヶ年を除き、殘り五ヶ年を平均したるものなり。

道府縣	卅四年豫想 第二回	卅四年豫想 第一回	卅三年實收	平年
東京	三八、三三七	三三、〇三六	二九八、一八二	二九一、八三四
京都	八三五、六九三	八二五、四九八	七六四、一三四	七四一、七〇五
大阪	一、三〇六、八七九	一、三〇六、八七九	九七三、〇一六	九六七、一四〇
神奈川	四三一、〇六一	三九八、一〇三	三五三、七三五	三五五、七三五
兵庫	一、九三〇、〇六六	一、六六八、八〇七	一、九三七、〇二四	一、六六三、八五〇
長崎	四二一、五一七	三六二、三七七	三三六、一六三	三五五、八六八
新潟	二、七八四、三三五	二、六五一、三三五	二、三五〇、一五五	二、二八九、一八〇
埼玉	九四一、八四〇	八九五、三三三	八九八、五四四	八七七、六九九
群馬	四四四、九四〇	四四四、九八〇	四四四、四九〇	四三三、三六八
千葉	一、六四六、四一九	一、五八六、一〇四	一、四三二、六六九	一、三七〇、三三六

茨城	一、二六九、一七〇	一、二六七、七三〇	一、二〇一、八四九	一、一六三、一七六
栃木	八四三、六七一	八四三、六七一	八四五、四五九	七八四、八一〇
奈良	六六三、八五四	六六四、〇五五	五八二、七〇八	六〇〇、四一一
三重	一、二八三、三二七	一、一八五、五三一	一、一四四、六二五	一、一三三、七九六
愛知	一、八二四、九一七	一、八二二、一八二	一、七三一、一九四	一、五一九、六〇一
靜岡	一、〇三一、〇四四	八八一、一四一	七三四、四四七	九〇八、三〇六
山梨	三四六、一五〇	三四六、一五〇	三三九、六六七	三三七、三三九
滋賀	一、一五七、三三七	一、一五四、五一七	一、一五一、一四五	一、〇七六、六六三
岐阜	八五〇、〇〇〇	八五〇、〇〇〇	九七三、〇七九	八一七、四五九
長野	一、二三四、〇五四	一、一九二、七七七	一、二八五、四七二	一、一六七、六六三
宮城	一、三四二、八〇〇	一、三四二、八〇〇	一、二六六、七九四	一、一四二、七七五
福井	一、四〇五、一〇六	一、三八八、八二四	一、三三九、八七五	一、二九九、五四五
岩手	五八五、七四〇	五四六、六九一	五五七、八四八	五三六、七二六
青森	七九一、四五三	七九五、〇八六	六七九、八〇〇	七二九、六八八
山形	一、六〇五、三八一	一、五九三、九三一	一、四六八、六〇七	一、三九三、一四七
秋田	一、四一七、七八〇	一、四一七、五八二	一、三〇六、〇六二	一、一五〇、九〇二
福井	八八九、四四五	八七八、八八三	七一三、一一三	六五〇、五〇六
石川	一、〇七二、一〇七	一、〇七〇、七一三	九三二、〇六三	九二一、七八八
富山	一、四九四、三八四	一、四八九、九〇二	一、三八二、五二四	一、三六〇、五八八
鳥取	五二九、一六八	五二九、六六三	五三六、九〇三	五一九、三一一
島根	七八〇、〇七九	七七七、九一七	六九三、六六五	七一五、六六六
岡山	一、四六七、五九五	一、四四一、五五二	一、二九八、三〇一	一、二三六、五九三
廣島	九六〇、四九八	九三三、〇〇八	八六八、六六六	八八五、四九四
山口	一、三三七、一八六	一、二八一、七三三	一、一三四、八〇三	一、三三六、九九八
和歌山	五三三、〇五二	五一五、九六六	四二八、七四一	四五〇、六一三
德島	三八〇、三三七	三九二、六九二	三一七、四九六	三〇四、一五三
香川	七一八、三六四	六九四、九四八	六四一、七七五	五三三、五一八
愛媛	七一九、四八五	六六四、三三六	六二一、一一二	六〇〇、四八四
高知	六三七、〇〇〇	六二七、九二七	四六六、〇六五	五〇八、〇九二
福岡	一、六二七、二六七	一、五一〇、二五〇	一、五一〇、二五〇	一、五七〇、四四二
大分	七三二、五一五	六八七、七三〇	五八二、〇三五	六四四、〇〇八
佐賀	八八〇、三四二	八二七、一三八	六六一、三三八	七八九、五七六
熊本	一、三三八、二七八	一、一三七、八六四	一、〇〇五、九七七	一、一一五、五六八
宮崎	六三三、六七二	五七三、八二九	四七五、三〇五	五三四、七一三
鹿兒島	七〇〇、八二三	七〇〇、八二三	七七八、六九二	六九六、三三七
沖繩	四三三、三三九	四三三、三三九	三四、二四五	三九、〇七六
北海道	一三一、八六〇	一三一、八六〇	〇九、八七三	六五、七三〇
計	四六、〇六、〇七〇	四四、七七四、九九〇	四〇、四六六、四三四	三九、八四五、〇三八

（備考）秋田沖繩の二縣は、報告未達に付、假に、第一回豫想高を以て補塡せり。
平年の計は、內譯と符合せず、之れ前表の平年數を記入したるに依る。
本表記載したる第一回豫想の計と、既に報告したる豫想高と相違あるは、其の當時、滋賀、秋田の兩縣報告未達の爲め、假りに、前年の數を以て、塡補したるが爲めなり。

●・・・・・・・

●十五年間無言の女　米國ニユージヤージー州、ジヤコアスタオンに、無言の女として知られ、其の名をルクレシアモルマンと呼ぶ。本年五十歳の婦人にて、多年來人と物を語りたることなきものなり。此の婦人は、租稅を納むる女子は、當然、選

擧權を有すべきものなりとの意見を持し、千八百八十六年に、租税の納付を拒みたることありしが、滯納者は、入獄せしめらるべしと威されて、漸くに納付したるも、其の際誓ひて、女子に、選擧權を與へらるゝまでは、人と語らずと云ひ、爾來、今日まで、無言を守り居るなりと。

●英國の婦人體操家　此程、英國のダーハン、ジヨイント學校の、體操教師に任ぜられたるオン孃は、同國サウスホートの體力養成學校を、卒業したる人なるが、體操綱登り、及び、水泳の諸術に於ては、金牌を得たることあり。又、飛越しの名人にして、己れの身長の高さまで飛ぶことを得。クリノケット、及び、コッキーにも、極めて名手なり。且又、生理學衛生學に通じ、看護法に長ず。而して、其の受くる年俸は三千圓なりと云ふ。

●世界の最大船　英國ホアイト、スター流船會社の新造船、ケルチック號は、此の程紐育に向け、初航海を爲したるが、此の船は、現時世界の最大船なるのみならず、搆造の新式なることに於て、他に多く、其の比を見ざるものなりと稱せらる。其の排水噸數は、三萬八千三百二十噸、二千二百五十九人の船客を乘するに足り、下等船客の室と雖も、數十年前の上等船客室に優り、又、其の搆造の宜しきを以て、彼の動搖を感ずること極めて少く、主として、船客の便利と、快樂とを務めたり。故に、其の速力は、割合に早からず、初航海には、八日を費したり。但し、次航海よりは、七日以内に減ずることをうべしと云ふ。

●露國と教育の進歩　露國皇帝は、ウアンノウスキ將軍を文部大臣に任して、鋭意教育の進歩を計り居られしが、今や、改良ある語は、同國教育會社の警語となり、已に、諸般の教育機關に於て、

改良を實施したるもの少なからず。大學制度の如きは、目下、改良方法に就き、切りに攻究中なり。己に改正せられたる事項中、最も賞讃すべきことは、中學校の課程中より古語を除きたることにして、明後年よりは大學の入學試驗にも、希臘語、及び羅典語を要せざる都合なり。此の改正に對しては、同國自由主義進歩主義の新聞は勿論、保守主義の新聞も、之を激賞して、露國は、他の進歩主義の歐洲諸國が、爲し得ざる英斷を爲したるものなり。露國教育の將來は、大に有望なりと云へり。

●・・・・・・

●空中航行船の世界一週　アラジル人チユモンは、巴里に在りて、空中航行船の實驗中なり。氏は、未だ、懸賞を得るまでの好成績を擧げざるも、屢々實驗の結果、非常なる暴風あるに非ざれば、氏は、自由に航行船を操縦し得ること、恰も鳥の空中を飛翔するが如くなるを證し得たる由にて、遠からず、成功するに至るべしと云ふ。又、紐育サン新聞は、氏の航行船を評して、汽船の創造せられたる時に比し、其の構造に於て、別に優りたる所ありと稱する能はざるも、之に依りて、空中航行の問題、解釋せられたることは疑ひなしと云へり。尚、チユモンは、航行船の成功を確めたる上、世界を一週する意なる由なり。

●・・・・・・

●僂麻質斯と果物　果物を食するときは、體内の酸分を減じ、僂麻質斯に罹らざる効あり。果物の酸は、變じて血液中の酸分を減じ、尿酸排出す。果物中、最も消化し易きものは、熟したる葡萄、桃（水蜜桃の類）杏、橙、極めて熟したる梨、無花果、波斯棗、焙りたる林檎、及び、其の煮たる果物なり。胃病にて、胸の焼るときには、分量を定めて、二三日若しくは一週間、果物を常食と

なさば、容易に平癒すべし。普通の食時に、果物の定量を用ふることも、衛生上頗る効力多し、輕き下痢を催さしむるには、林檎、無花果、梅、桃等宜しとす。

●禿頭の原因●●●●　是れに就きては、從來醫學者間に、一定の解釋を得ざることとなるが、米國の醫學者、バーレー博士が、最近の紐育醫學者雜誌に於て、之を說明せる所に據れば、禿は、單に空氣を寖入する其の人の體、實に原因するものなり。即ち、吸入せられたる一部の空氣、肺の一部に停まりて、排出せられざるとき、體肉の不潔物の爲に汚れ、斯くして腐敗したる空氣は、血液の中に吸收せられて、毛髮の發育に、有毒なる作用を起すなり。即ち、之を證するため、多年、頭の禿たる人の息を管に依りて、水の中に吹き込ましめ、充分、其の息の腐敗するまで、之を蓄へ置きたる後、其の水を振蕩し、此の液を以て、十四日間に、一回犬に注射したるに、犬の毛は、徐々に禿げ始め、五十二日の後に、腹部の毛は、盡く禿げたり。然るに、注射を止むるや、毛は、元の如く生じたりといふ。

●世界最大のトンネル●●●●●●●　シユラ、シムプロン、鐵道と稱するは、瑞西より伊太利に達する鐵道の名にして、今より十年前に、計畫せられたれども、アルプス山脈横たはりて、ドンネルの難工事あるため、未だ、落成に至らざるものなり。此のトンネルは、全長十二哩半、悉く岩石より成り、開鑿工事の困難なることは、多く其の比を見ざるものなれば、最初は、トンネルを開鑿せずして、鐵道を通せんと、種々の計畫を爲したれども、孰れも、成功の容易ならざるより、斷然、此の工事に着手することゝなり、起工したるは、千八百九十八年

の十一月にして、千九百四年の五月に竣工する筈あり。此のトンネルは、恐らく、世界最大のものならんと云ふ。

●歐洲各國と繪端書　ドクトル、ヘムボ氏の調査したる結果に依れば、歐羅巴諸國にて、最も繪端書の流行するは、佛蘭西にして、年々郵便局は、八千八百萬枚を取扱ひ、政府が、之より得る收入は、實に六百萬マーク(我凡そ二百八十萬圓)の多きに及ぶ由。次は、澳太利匈牙利國にして、其の郵函に投せられし者、三千一百萬枚、其れより以下、伊太利の二千七百萬枚、英國の一千四百萬枚等にして、他諸國にも、百萬枚以上の差數ある由。而して、一年間に於ける世界全體の繪端書發送數は、無慮二十三億六千萬枚の多きに達し、其の過半は、歐洲諸國より來るものなりと云ふ。

●落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る、但漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ふべからず。

二、文体は、投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、五行内外の事。

但、可成は、フリガナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は、差支なけれど、便宜の所へ、必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は、隨觀隨日何にてもよけれど、有益にして、興味あるものを望む。

五、〆切期限は、目次兼題の歌文と同日の事。用紙は、半紙。尤も、ハガキにてもよし。

▲越後、はる子　何と皆様と、方言を少しづゝ出しあつたら如何でせう。わたしの國では、ヒトツ、へとせ、これも我地に限りますが、まちがひます。フトツ、ヒタツあどは、珍しうもムいませぬ。秋田の方へ寄つた方では、ヨーヅヤ、ヨーツヤ、コヌキバニ、セビエタネ、コノーセ、コノセ

など申します。それは、弟よ弟よ、小軒端に蛇居たから殺せ殺せ。と申すことで厶ります。

▲石見、順子　妾の妹は、本年五歳になりますが、父母なども、よほど心にかけてをります。日常、家庭に於ける遊戯、及び玩具としては、如何なるものが、よろしうございますか。御教をねがひます。

▲尾張、松子　わたくしは、和歌を學びたいと思うて居りますが、田舎のことゝとて、御ならひ申すべき方なくて困つてをります。どうぞ御地にてよき先生を教へて下さいまし。

▲福島、はつ子　夫婦間日常の稱呼について、御尋ねの方がござりましたが、とても一定するわけにはまゐりますまい。が、夫より妻をよぶ時には、昔からの通、名前を呼ばれたらよろしからうと思ひます。妻より夫を呼ぶ場合、これは至つて少い場合ですけれども、斯様いふ時は大概略します。普通の家にては、貴方、子あれば父上様、孫あるやうにあれば、お祖父様と申す方が通例の様でございます。如何でせう。

▲新潟、八重子　われ／＼婦人にも自轉車が似合ひましやうか。

▲記者　似合、不似合などの些細なことは、どうでもよいといたしまして、衛生上、婦人に自轉車は、危害少からざることは、事實です。既に米國などでは、自轉車の婦人間に流行して以來の調査によつて、兒を生む時、及び、生兒發育の上に於いて、恐るべき影響を受けたことを發見し、其の流行をとゞめることに苦心してをるといふことです。

▲山形、わき子　料理法、一般を通信教授で教へるところは御座いますまいか。

▲東京、なでし子　くし子孃、しゆん子孃には、

遠からず、御會合して、親しく御交際が出來るであらふと、誠に嬉しく樂しみに、且つ待遠しい樣に思はれます。然し、よしの孃には、非常に殘念乍、親しく御會合が出來ませんが、又、他の宜き法を持つて、例へ關接にでも、御談笑の出來る樣に致しませふネー。

▲東京、あでし子　夏の初に、極仲の宜き友と、荒川の堤上に樂しい、實に愉快な一日を暮しました。又、此の秋に於て、共に參る約束があるのです。あの荒川の長流が、夕霧に包まれて、上流の蘆原の陰の水に夕日が、微に寫つて、四邊は、早や淋しくあつて、彼方には、仄に殘照の光を帶た帆影が、靜かに霧の中に消へ去つた時、私達は、何んな感が浮ぶでしよふ。まして、孤雁が哀叫して行つたならば。また私の大好な、秋期となりました、然して、私は、此の秋に於て、郊外の風景を非常に最も愛すのです。最も秋は萬物凋落悲觀の事が多い、然し悲觀中、又自の詩味が豐であらうと思ひます。可憐な秋草が咲く邊、赤蜻蛉の飛ぶ處を。白露踏みつゝ、郊外散歩は如何です。諸媛。

▲東京、あでし子　私の説に、御賛成下され、誠に有難ふ御座います。何ふか皆樣の御盡力を持つて、成立致す樣、希望に堪えません。私は、無論我が身に出來得る限り、御盡力いたします決心です。一日も早やく、其の方法の發表せられん事を願ひます。

題字と口繪につきて

幕末の義士、吉田松陰先生の手蹟を、山田與風女學校長に請ひ、之を摸寫して、掲げたるものにて、其の筆勢の活動生氣眞に當時の先生の今茲に在るが如しまた口繪は東久世伯と高橋松亭先生の物せられたる者にてうるはしき筆づかひいとも〳〵巧なりかし

新刊廣告

井上頼圀校訂　小澤政胤編著

慶長以來 國學家畧傳

全壹冊洋裝
八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢
郵税十里以内七錢百里以内十二錢百里以外廿四錢

深く國學者の傳記を集めたる書は僅に微細なる古學小傳の類に過ぎず徳川時代文學史の研究に不便少からざりしを著者小澤氏從來慨して前後**十年間諸書を參照**し遂に本書を大成せられたり著者は尚之に満足せずして略傳と名づけられたれど其實**今日**に於ては**最**も**完備**したる**國學者の傳記**なり載する所は慶長以來明治二十八年まての有職故實家神道家語學者文人歌人等**五百四十名**各人の末には**其の著書目錄**をあげかつ引用書目を明示したり或は之れを**國學者人名辭書**ともいふべくまた**列傳体國學史**とも稱すべし巻初にはイロハ分**索引**ありて搜索に便じ**國學傳統系譜**ありて各學者の學統を一目に見るべく**國學者年表**ありて一見各時代の學者を數ふべし殊に斯學の老大家**井上頼圀先生**は反覆叮嚀自ら**校訂**の勞を執られたれば其正確なること根據ある他書の比にあらず本書一たび出で、國文學研究者は**暗夜**に**電燈**を得たるの思ひあらん**師範**學校**中**學校高等**女學校**其他**各種の學校**に於ては無二の**參考用書**たるべく殊に**文部省檢定受驗者**は必ず一本を座右に備へざるべからず

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社 國光社　電話新橋八八番

發賣元　東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地　靜思館　電話本局千三百七番

明治三十四年十月廿日發行
每月二回五日廿日發行
第貳百參拾九號
明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

女鑑

東京築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷